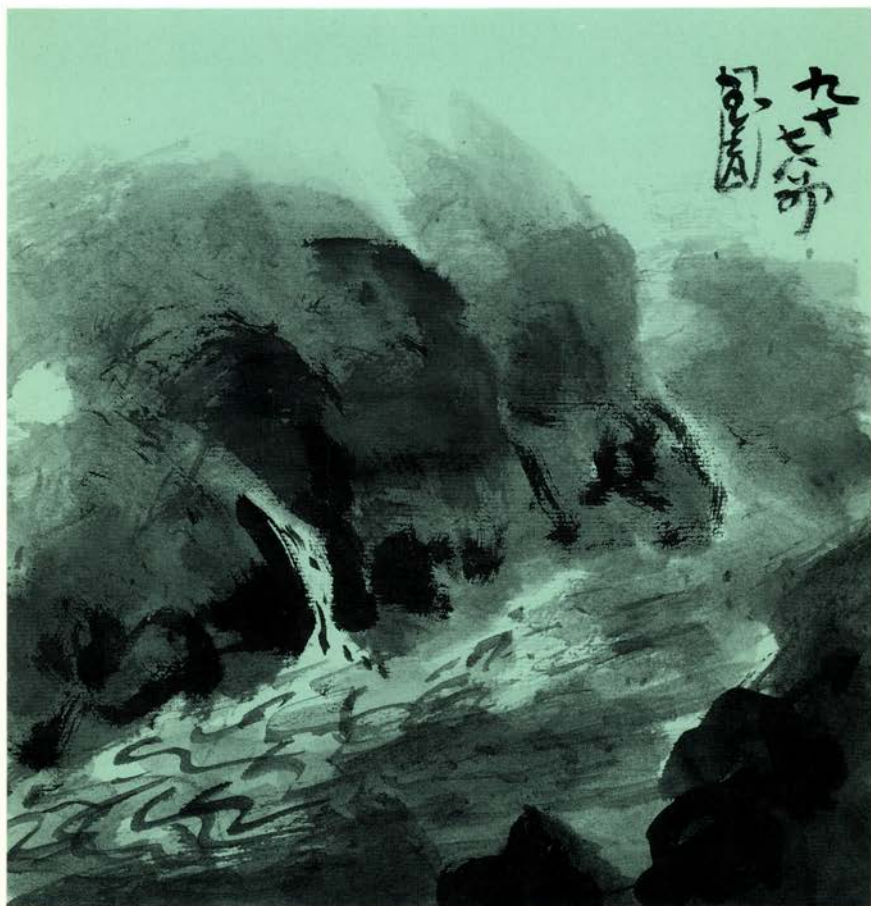


川柳塔



No. 878

七月号

第6回 川柳塔まつり

<同人総会>

と き 9月24日(日) 午前10時-11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4 F 金剛東
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)
議 事 平成11年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成12年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<各賞表彰・記念句会>

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4 F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞授与

兼 題 「花 形」 (鳥 取) 鈴 木 公 弘 選
「鮮 や か」 (和歌山) 福 本 英 子 選
「憧 れ」 (鳥 取) 小 林 由多香 選
「忘 れ る」 (青 森) 波多野 五楽庵 選
「自 信」 (奈 良) 宮 口 笛 生 選
「むらさき」(事前投句・8月20日締切) 黒 川 紫 香 選
◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定

会 費 2 0 0 0 円 (記念品呈)一当日いただきます

<懇 親 宴>

と き 同 日 午後5時-8時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3 F 葛城

懇親宴会費 7 0 0 0 円 (会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8 0 0 0 円 (朝食付)

◎①事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌最終ページの
申込み用紙に明記の上、8月20日までに本社事務所あてお
願い申し上げます。

②懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用
紙でお願いいたします。

③記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人で
も多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

今世紀最後の山

橘 高 薫 風

今世紀最後の路郎忌が巡って来た。

来し方を思えば、路郎先生はじめ六大家への思い出は多い。前田雀郎先生は講演を拝聴しただけだが、他の先生方とは歓談交々ご教示を得た。梶元紋太先生とは初心時代毎月二、三度は会っていた。ふあうすとの大会で時実新子を紹介され、その後寺尾俊平と出会った。

大阪、神戸や京都まで斬新な句会に臆面もなく出た。大山竹二、中尾藻介、岩井三窓、堀豊次諸先輩の句に注目して、それら豊かな感性を砂に沁み入る水のようには吸収した。私も感受性に富んだ句を指向したが、その類の句は路郎先生には抜けなかった。従来の型の句ばかりが入選して私の作句意欲を大いに殺した。私の新鮮なと思う句の抜け出したのは、先生に師事して五年も経ってからで、その後は一気阿成であった。川柳が麻薬になった。

先生は恐ろしい人だと思った。

短歌や俳句、詩も心して見詰め直した。
井伏鱒二の翻訳で有名な一篇

勸 酒 于 武陵

勸君金屈厄
満酌不須辭
花発多風雨
人生足別離

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

に感服したのもその頃のことである。

ルノアール日記に「蛇長すぎる」との洒落た句語のあることを知ると、冊子全体を通読して、言葉探しをした。内外の小説や随想、内田百閒やバーナード・ショーを読んだ。

研鑽のグルーブも時代時代で変わったものが出来た。田中好啓を主宰に、海地大破、藤川良子、窪田久美子、山本柳化、西山寛子らと「いずみ」を結成したり、後年、中堅作家の頃には、中尾藻介、岩井三窓を中心に、寺尾俊平、森本夷一郎、越智楨、室田千尋、光森良、海士天樹、高杉鬼遊、櫻谷寿馬らと共にたいしようの会を持つ

た。それは大阪北の繁華街の一角「入船」という飲み屋の二階で、月例会を開き、酒食第一、談論第二、作句第三の寄り合いだった。たいしようは大正であり、大将であり隊商でもある。太笑、大勝、大賞、対症と何でも御座れ、対照対象どれもたししょうになるような梁山泊めいた雰囲気、今でもすき焼の肉の匂いが甦る。

こう書いてくると、それでは路郎門での勉強が問われそうだが、初心には川維にしたり支部の後藤梅志、魚住満潮、阿倍野支部での須崎豆秋に刮目し、川柳塔雑誌の正本水客、真鍋一瓢、早川清生、西川晃に教えられた。

当時、いち早く個性派に目をつけて佳句を記憶したことになる。

人間形成には、中島生々庵、西尾葉面主幹と、近江砂人番傘主幹に負う所大であった。

好きな川柳をと言えば少し語弊があり、正しくは川柳にたずさわっているうちにずんずん好きになった川柳に、思い切り打ち込めた私は仕合わせ者である。

今しむじみ、私は二十世紀の川柳作家であることを自覚する。

今世紀最後の一つの小さな山で終りたい。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

私の句

破顔一笑弱気な部下をたしなめる

(路郎)

岡本久峰

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 今世紀最後の山

路郎と言う名の幸二郎

川柳塔(同人吟)

この句この人

自選集

川柳の群像 大野武太

俳風柳多留二四篇研究 19

水煙抄

大空のこころ

(114)

秀句鑑賞

同人吟

水煙抄

橋高薫風……(1)

西村哲夫……(2)

橋高薫風……(4)

橋高薫風……(48)

東野大八……(49)

河内天笑選……(54)

橋高薫風……(56)

仁部四郎……(58)

中山雅城……(60)

橋高薫風……(87)

中山雅城……(91)

路郎と言う名の幸二郎

西村哲夫



万代と言うところに大阪のお婆ちゃんの家があった。遊ぶ道具もなければ、従兄弟もいない、葭乃のお婆ちゃんとお手伝いのお婆ちゃん二人が、腕白小僧の私を迎えてくれる。路郎という名は勿論、お爺ちゃんが居たことさえ気が付かない。大きく見えた机の周りには一人の老人を囲み、なにやら忙しくしていたことは記憶の底に少しある。「門前の小僧習わぬ経を読む」という諺があるが、この時あまりにも幼い私にこの諺が当てはまらない事は言うまでもない。

縁あって河内の古寺に嫁いできた母は、作句を止めてしまったが、若かりし頃川柳雑誌の校正編集を手伝っていたらしく、少しは川柳人路郎を知っているようだ。これこそ門前の小僧云々である。川柳を作れなくなったと嘆く母ではあるが、路郎の心が今も生きていると思いたい。

麻生幸二郎のお葬式には、沢山の弔問者があったと記憶しているが、この時ですら川柳人路郎を私は知らない。作句しなくなった母から川柳の事は聞かされていない。しかし、

愛染帖

茴香の花

「角」

一路集「恵み」

「隠す」

初歩教室「シーズン」

嘘のない嘘ー母・麻生霞乃のことー

■私の川柳川柳は十七音字中心だと路郎は言った

六月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／岸本宏章）

柳界展望

林荒介さんを悼む

七月各地句会案内

■編集後記

波多野五楽庵選……（88）

宮西弥生選……（92）

大谷幸次郎選……（94）

伊藤寿美選……（94）

楠見章子選……（95）

吐田公一……（96）

西村梨里……（98）

桑原道夫……（100）

……（102）

……（106）

……（120）

小林由多香……（122）

……（152）

みつ子・楓葉……（154）

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

（霞乃）

私の句

鰯雲おーいと駆けてみたくなる

徳山 みつこ

家の本棚には『旅人』『福寿草』が有り、これが爺ちゃん婆ちゃんの書いた川柳の句集であること、麻生路郎が有名らしいことは、何時からか私に知られることとなっていた。

そんなある日のこと、川柳をたしなむ僧侶仲間が、どこから聞いたのか路郎の孫としり、わたしを半強制的に川柳塔本社句会に連れ出してくれたのである。ちなみにこの仲間というのは当社同人ではない。路郎の孫だからできるという。分らないままに兼題『空気』を作ってみた。「氣に入らぬ人が帰って窓あける」この時の主幹、西尾葉先生がこの句を抜いていただき、句会通いが始まった。

私と川柳の出合いは、母でもなければ路郎のお弟子さんでもない。ただ孫だからしてみろという言葉であった。それから7年、月1回の本社句会で沢山の柳人に恵まれ路郎を聞くこととなる。川柳イコール路郎のイメージが出来上がってからは、路郎イズムを聞き続けてはいるが手に負えない。不朽洞時代の方々を羨ましくさへ思ふ。

川柳人の作る川柳は、ひとり一人の個性とそれこそ命そのものであって、何れたりとも関与不可能ではあるまいか。

路郎は路郎一人であり、路郎の存在は路郎の句そのものだけである。やはり私は、幸二郎の孫でしかなく、残念ながら路郎の孫では無いと痛感している今日この頃である。



橘 高 薫 風 選

唐津市 井 上 勝 視

理屈だけで女に勝てるわけがない
寝込まれて男半身不随なり
床あげの妻と夕餉の酒の味
目指す星もぎ取られたる富湖の計
老いの時計なんでこんなに早いのか
牙がとれ男だんだん萎えてゆく

宝塚市 嵯峨根 保 子

波浪警報年金六十から貰う
晩節を穢すなかれと桐が咲く
四面楚歌派手に動いたせいらしい
素っぴんになると美人が入れ替わる
仲良しは悟りに遠い人である
トルネードなどと渦巻パンのこと

唐津市 仁 部 四 郎

無党派も用意はしてるむしろ旗
当て馬の馬脚に似てる僕らの脚
芸名のない犬だって鼻は利く
西暦も皇紀も節目好きである
割勘で清く正しい別れ酒
少子化を嘆くな徴兵制はない

和歌山市 牛 尾 緑 良

花が咲き地球が丸くなったよう
ゆつくりと走るゆつたりと生きる
ジグソーに人の心がはまらない
オッチャンと呼ばれ点滴してもらっ
いつからか十七歳のドアチェーン
石地藏欠けて人間たらんとす

豊中市 安藤 寿美子

春雷やあさきゆめみし午前四時

雨の音春の朝寝をもうすこし

負け犬も時に遠吠えしたくなる

ブランド品に縁なくしずかに老いている

むかしおとこありけり恋もあまたなる

雲流れ時が流れて石舞台

出雲市 竹治 ちかし

春が来るスキップ三と四のリズム

喜びをたたんで少しずつ覗く

乱雑な机に置いてあるリズム

足裏に里の温さを教え込む

生活がひっきりかきカレンダー斜め

から咳をする わたしの中の亡父

鳥取県 さえき やえ

ちぎれわかめ寄ると西から雨になる

おとしよりの話やわらか艶がある

志功展 涙がとめどなく落ちる

生きるはりここに畑がある限り

予定どおり出来た仕事はうつくしい

ダンディーな荒介さんにもう逢えぬ

今治市 野村 京子

薄味でとっても長いお付き合ひ

やわらかい風に抱かれて新茶飲む

負けそうでしたっかり者の妻を呼ぶ

恋は水色翔んでごらんよ夏帽子

耐え抜いてすこし傾く母の塔

桐の花やがていくさに出る女

船頭の木曾節聞いて鯉のぼり

五月雨が虹色に見え恋かしら

見舞いには悪友いちばん先に来る

煩惱と同居して退屈を知らぬ

遅咲きの男の夢は果てがない

軽いものばかり読んでも疲れてる

泡までもうまいビールの候となり

一夜干しさんまは秋刀魚よりさんま

借用証万年筆で書けという

引越しの荷を品定めする目目目

勝鬨の列へ味方の顔をする

魂が迷える富士の大樹海

荒介逝く

話し掛けたそうな唇をする遺影

面影が櫛の遺髪にまた浮ぶ

咲いたまま落ちた椿の手も振らず

大阪市 川端 一步

たましいの浮遊大きな樹が消えた
供養かな鴉が食べた墓の飯

観音講千代さんが泣きみな涙

西宮市 奥田 みつ子

宿り木にはならぬ二本の足がある

星眺め花を眺めて耐えている

横顔に男の苦渋にじませる

明日を見るために昨日の目を洗う

悪いことばかりして来た気もするが

川柳は楽しむものと言うけれど

弘前市 高橋 岳水

風邪を引く度に老化に突き当たる

ご当地のビールを旅の贅とせん

パソコンの深みにはまる朝寝坊

許されて一合の酒嚙んで飲む

晩節がバブルはじけて狂い出す

人間の業を見ている昼の月

西宮市 牧 渕 富喜子

茶柱にふと揺れている鬼がいる

出来不出来花は咲くべし咲かすべし

身勝手な指だ雑草抜いている

パンジーの笑い癖から立て直す

荒れるかも知れぬと予報言っている

母の日もそうでない日も子を想い

熊本市 永田 俊子
それからのことは知らないバラの花
蕾まだ百鬼夜行の世を知らず

さばてんが乾いて少年狂い出す

方向音痴の一生でした無一物

道連れを亡くしてから暗夜行路

唐津市 久保 正 剣

遺言を破り捨てたいときがある

完全に灰汁が抜けてはいない喜寿

とてもエッチなおじさんの千円札

風みどり金では勝てぬと教えられ

がんぐろが母を泣かして母になる

唐津市 山 門 幸 夫

リレー式左手出して繋いでます

はじめての年寄になり要を得ず

梅の実の色づく頃の恋恋し

小手毬を散らして雀隠れんぼ

惨い青春育てた子等の脱日本

唐津市 山 門 タ ミ

キャンセルのきかぬ片道切符秘め

沈黙の親父の宝刀子は知らず

長幼序隣の国に学ぶべき

年寄り自由きままで羽根がない

眼裏に名所名所の藤五月

唐津市 宗 水笑

隠し芸ほどは冴えない仕事ぶり
厚底の平成おいらん脚を見せ
神さまになってあえなく逮捕され
身の程を忘れ美人に向く視線
鮎泳ぐ流れが時に家を呑む

唐津市 市丸晴翠

欲張りな絵馬に冷たい風が吹く
針ピンと体重計はけちらない
発掘の土偶を濡らす酸性雨
躓いた石に座って見はるかす
モザイクの暮らし彩る団地の灯

唐津市 山口高明

会わせたい方が居ると口説く伯母
ベット禍ワニが棲んでる下水道
原稿が無くて本音がついポロリ
可愛いと抱いたお方に御小水
闘争の歴史見て来たモアイ像

高知市 北川竹萌

皐月鉢あげて溶けあう五月晴れ
両隣花苗あげた夜の雨
加勢あり八十八夜の故里茶摘み
仁淀川挟む向こうも茶摘み唄
茶工場の新茶よい出来よい香り

高知県 赤川菊野

も一人の私が旅を急きたてる
民族の願いとどかぬ板門店
登校拒否そんな言葉に遠い国
エトランゼ右も左もチマチョゴリ
鬼だって一人暮しは淋しかろ

松山市 宮尾みのり

子としての立場未だにある仏事
乗り継いで来た人生のこれっぽち
きらきらはいつときだよといふし銀
誇りある腕をロボット脅かす
巣立つ子へ育てられたは母の方

香川県 池内かおり

仁和寺で頂く抹茶お静かに
酒好きへ土産は出来た鬼ころし
財布の紐酒の館でまたゆるむ
すぐ解けるように結ぶも妻の愛
イセタンでシャツと帽子と卵の花と

香川県 成重放任

少子化が父の怖さを遠ざける
春雷に出かける妻の後戻り
しっかりと結んだ紐に夢がある
お多福がお多福桜見てはしやぎ
もう一度音がほしいと言った亡父

香川県 神保坊太郎

竹原市 森井菁居

新築に新婚らしきツバメの巢
日和見の山で旗色読んでいる

人生いろいろ細く長くの手もあつた
火だるまの恋の主役で充ち足りる

くやしきの顔つきでなる冷凍魚

笑い袋の中の笑いを詰め替える
闘いが済み虚しさをもてあます

カタカナ語漢字のルビを振って欲し

参道は初夏福運を拾えそつ

清廉といえど霞はよう食わず

宇部市 平田実男

竹原市 時広一路

結論は出てる会議と知らず吼え

四十年寝ていた下駄が訴える
ヨードン孫の元気に追いつかぬ

鏡になった子供にかじられる

リストラを勇退と言う社の人事

朱竹二枚相乗効果無いですか
百葉の長に体調聞いとくれ

人生の転んだとこが糧となる

笑顔には笑顔真つ赤な薔薇開く

親が子に出す信号は青ばかり

美祿市 安平次弘道

竹原市 三宅不朽

階段の途中で童話ふと思ひ

傷心へ切手の色も選る便り
一枚二枚七枚研ぐだけの鉋

未完の絵がたまりゆっくりしておれぬ

淋しがりやで噂話を真にうける

札束の重さを知らぬ苗を植え
駄菓子屋の百円いきいきとはずむ

介護法四月もいつか過ぎました

青虫の横断孫としやがみ込む

矢は既に尽きた情けはいらないよ

竹原市 小島蘭幸

広島県 藤解静風

始球式総理は変化球でくる

モナリザの微笑ブーチン氏の微笑
新緑に圧倒されている無職

師の姿勢父の姿勢がある背骨

丁寧な言葉で抓られているぞ
呆けた顔して呆けてない要介護

結婚記念日僕は川柳大会に

愛犬だけが迎えてくれるそれでいい

右顧左眊キミは悪人にはなれぬ

夢の中にときどきロバのパンが来る

倉敷市 小野 克 枝

流し合う湯舟に計算などはない

嫁と言う立場で声を加減する

知らんふりして婆拔きのババ抜いてやり

病乗り越える風と樹のいくさ

満月に淋しい影を持つ女

倉敷市 井上 富 子

お花には優しさがある味が有る

見栄張って豆をこさえただけの旅

ガイドブックで目星をつけてある土産

外国の土を踏まない僕の靴

自己評価の高いお鼻と小半刻

岡山市 大石 あすなろ

四面楚歌壁にもあった非常口

渡された鍵の重さをてのひらに

一枚の切符がつなく胸の駅

シャガールの絵から恋人抜けて来る

再会へ匂い袋をしのばせる

岡山市 小林 妻 子

独房に内鍵のあるバスがいい

朝のラッシュへつぶやくことも忘れてる

ささくれた暮しへ雨が漏ってくる

高度成長列島改造した話

狭い日本どこへ逃げます春がすみ

岡山市 矢内 寿恵子

移ろいの世にうたかたの夢追うて

穏やかを希う花寺風の寺

平穏をひたすら希う老いの日々

新世紀担うこの子も塾通い

昭和史も語り部となるサクラ散る

岡山市 山本 玉 恵

世渡りの下手さを笑う豆の蔓

聞き役に回ってからの身の構え

金婚を目前にして永の旅

残り火を囲う指先からの冷え

もうひとりの私が嘘を知りたがり

松江市 川 本 畔

捨てられた玩具が漏らす子守歌

黄昏のまだ花道を掃いている

さわやかなガムの匂いのするすみれ

垂れ下がる糸の端には要注意

地下道が続き孤独が深くなる

松江市 安食 友 子

受賞する我が子へ自慢気のカメラ

無理難題背負わされてるお人好し

松江城ライトアップまでして媚びる

ご対面未知数を抱いてうふふ

静けさを掻き乱してる鷓鴣(みそざい)

出雲市 富田 蘭水

母の日を心から祝う年となり

分身の眼鏡がむりをすなと言ひ

善意だな小ワラビ残している子供

留守番をしかと引受け作句する

くしゃみ一つ靴ひも強くしめて出る

出雲市 吉岡 きみえ

ありがたい法話がとろりぬむらせる

夕暮れに春の涙が乾かない

そもその始まりみんな白だった

この辺でめしにしようよ腹の虫

豆のつるスリルの中で伸びてゆく

出雲市 園山 多賀子

葉桜と契った夫は逝き急ぐ

お浄土でペン胼胝ほぐすゆとり在り

喪が明けて上昇氣流に誘われる

優しさに狎れてしまった著我の花

私に勝つため黒い服を着る

出雲市 小玉 満江

たんぼぼがおしやべりし出す春の風

死亡欄百歳の人で安堵する

聞かずとも目がいやいやを言っている

会長の酒量を部下が取り締まる

潮時という心得を持っている

出雲市 久谷 まこと

音立てて牡丹くずれる芽出し雨

常連が揃い屋台の声はずむ

幸せと愚痴おりませて茶飲み友

波風も思い出話共白髪

平凡に一日終わるありがたさ

出雲市 小白金 房子

間引き菜のいのちを貰う雨上がりに

春耕へ持ち出す農の茶はうまい

連山を逆さに映す代掻き田

揚げ雲雀鳴いておごらぬ高い空

アイ染の伝統守るサイの音

出雲市 石倉 芙佐子

おんなは或る日鏡の中の夜叉を見る

朧月鏡の海でたわむれる

髪きりり女性上位の記者会見

火の鳥のあなたも知っている鏡

白々と今日は涼しい顔をする

島根県 松本文子

ゆったりと眠って独りまた佳きかな

生きる自信ないまま長生きするような

卯の花や見舞うつもりが見舞われて

世代交替門が開け放たれている

おぞましき世やコンピューターウイルス

島根県 堀江正朗
腹立てた後から見えぬ目が疼く
雑草とささやく僕も雑草さ
聞かれても思ひ出せないから笑顔
一筋の道しか知らぬ白い杖
花散って青葉並木は鳥の国

島根県 堀江芳子
伊勢神楽 頭を噛んでくださった
しどろもどろ外人さんと通じ合う
友達のような夫婦を句が支え
正朗さん芳子さんと呼ぶ息子
色合を聞いてフアッションほめてくれ

島根県 榑原秀子
矯めてみる黄色い花の多い春
日を経ずにまわり緑に萌えている
すべるような湖へ一羽のゆりかもめ
宍道湖の夕陽六時四十五分没
山の藤別れがあった日が残る

島根県 伊藤藤寿美
麦藁帽に春が止まった紋白蝶
ミニトマト大好きな孫の小さな口
ブランコに乗ってつぶやく中也の詩
僕の好物作ってあった妻の留守
妻の留守偶にはいいね昼の酒

島根県 森茂美

春耕や土の匂いの真ん中に
背伸びせねば取れなくなった棚のもの
初夏の候風が残してゆくみどり
名店はのれんの奥に顔がある
介護法ほじくる度にボロが出る

鳥取市 徳田ひろこ

枝を切る話に揺れている大樹
オペ前に私も風邪をひかぬよう
病室へいっぱい庭の花咲かす
少女からパワー貰っているベッド
面映く背なが聞いているありがとう

鳥取市 西村黙光

方言で書くと悪口面白い
ペン先が磨きをかける知能線
飲むまいが飲むが西へ陽は沈む
ペンよりは便利がいいよ口の先
酒うまし歯止めの効かぬ喜寿の坂

鳥取市 石上悦子

母さんの方はひよこに戻りたい
泣かないと赤くなれないピラカンサ
隕石は渦中の人のくしゃみです
パパママのけんかにはくはやじろべえ
おまじない児がしてくれて元気出す

鳥取市 岸 本 宏 章

散つてしまえば桜のことはもう忘れ

地図出してやつと探した法善寺

ふるさとの鐘は昭和の音で鳴り

酒少し入れると勘が冴えてくる

会見のノート上手な嘘もある

鳥取市 岸 本 孝 子

一人いて気ままなようである悩み

子に妥協してから貰う荷が重い

酒席では一も二もなく妥協する

人間のエゴが恵みの雨にする

隠し持つ核をときどき日に当てる

鳥取市 春 木 圭 一 郎

女とは気づかぬふりで妻と母

女には弱く男にも弱い

女にも理由あり男には言えぬ

女には苦勞をさせぬこと誓う

女から生きるパワーを日々もらう

鳥取市 武 田 帆 雀

菊を挿すこれから長い独り旅

お互いがおたがい豆の蔓の花

目の黒い伯父に悪役持つて来る

灰皿が必要大事なお客さん

デパートの肩モミモミで小休止

鳥取市 倉 益 一 瑤

赤ちゃんに遊ばれている春の午後

宝石箱に友達たんとつめてある

わたくしを行方不明にした介護

ピーチクパーチク雀が頭上からさわぐ

追風が吹くまでじっとしていよう

鳥取市 美 田 旋 風

介護など受けないように散歩する

すこしずつ捨てて身軽に古稀の坂

春風に浮かれ煩惱顔を出す

損得をやめて茶漬けに味が出る

控え目にすれば追いつけられ

鳥取市 富 山 檳榔樹

思い出を絵皿に盛った喜寿の宴

ぬか味噌の茄子紺映える母の皿

旬を食べ大地の恵み手を合わせ

老いたかなノートに愚痴をしかと書く

温い風夫婦の日日を吹き溜める

鳥取市 山 本 益 子

未来という語源を探る辞書抱え

人生の鬼退治には勇気いる

倦怠期じつと無言の睨めっこ

白い歯の健康美惚れ嫁にする

言葉とは生き物なんだ慎重に

鳥取市 前田 一枝

辞書ひいてそれでも誤字のままに書き

おどろいた山男でもはやり風邪

今度こそぼたんのように咲いて見よう

下戸のくせしつかり呑んでかため酒

あせってもどうせ返せる銭じやなし

倉吉市 淡路 ゆり子

春という大きなところ包まれる

人間の掟を孫に教え込む

訣れ際花の名前を一つ言う

子離れは上手に出来た桜はらはら

バス停の白木蓮に見惚れてる

倉吉市 野口 節子

三歳児びつくり箱をさげて来た

若夫婦温度の違う茶を飲ませ

優しさを貫き通す豆のつる

少年の宇宙一步も踏み込めぬ

父逝つて傘の大きさ思い知る

倉吉市 山中 康子

煮えたぎるマグマうっかり手が出せぬ

羞恥心ちよつと気楽になつただけ

おしやれ気の強いところは母似かも

闘病記はつとな涙じわじわと

続べくくる母の明日へ陽があたる

倉吉市 松本 よしえ

稜線をむらさきにする夕茜

湖を鏡に咲いたナルシスト

人形にじつと見られて眠れない

万歩計すみれたんばばれんげ草

講演の終り拍手で目が覚める

倉吉市 最上 和枝

楽茶碗包む両手に火の匂い

法螺吹いた後の冗句をさわやかに

散り急ぐ姉の乳房は熟れぬまま

童話よりテレビゲームの子が寒い

ささやかなボランティア終え軍手干す

倉吉市 米田 幸子

びつくり箱の中身は遂に見ずじまい

私にやがてやがてを待つ心

終焉を飾る私の一行詩

ばあちゃんがはたと詰まった手鞠唄

おとなしいだけが取柄の私です

米子市 鷺見 正子

節約を楽しんでいる割烹着

一張羅着るといらない物も買う

レンゲタンポポ街の花屋で咲いている

五十五歳からわたくしに似合う白

孫よりも無邪気に笑うおかあさん

米子市 野坂 なみ

さわやかなニュースは朱鷺の誕生だ

一本釣り糸も気構え持っている

マリオネット心の糸を練りながら

サミットの花道踏んで欲しかった(前総理)

病む娘から手のり文鳥はなれない

米子市 光井 玲子

アルバムを開く昔に逢いたくて

緑まだいっぱいのこの街が好き

物溢れ人のこころも褪せてきた

亡兄の忌へ溢れる愛をありがとう

これからも唯さわやかに生きてゆく

米子市 木村 富美子

大学は出てないけれど偉い人

よく食べてよく眠るから大丈夫

音立てて茶漬けさらさら淋しい日

一盛りのきゅうりも誇り持つみどり

余りにも白を粗末にしてないか

米子市 永井 三津子

生きるたび意固地の鱗増えて行く

正念場峠越えればきつと春

駄菓子屋にむかし昔が詰まってる

ああ未練水面にさえも亡夫の顔

二十三年耐えぬけ亡夫の回想かな

米子市 中村 金祥

中退の子の未来にも乾杯を

昭和の日何を祝えばいいですか

足跡は見果てぬ夢を追いつけ

セクハラは駄目で不倫はいいですか

ライバルは腹八分目で耐えている

鳥取県 新家 完司

草花のことばあふれている五月

茫然といちにち過ごすのもクスリ

さわやかなともだちみんな金がない

じゃんけんぼんケチはだいたいグーを出す

好きだよとつぶやいてなお好きになる

鳥取県 津村 八重子

占いも愛の強さに負けました

孫の書くばあちゃんとてもいい顔で

栄養のいかんを問わず野菜好き

カラオケのマイクに平和かみしめる

血のつづきコピーしたよな顔ならび

鳥取県 羽津川 公乃

不揃いの苺に旬の陽が溢れ

米作り止め農繁期落ち着かぬ

ゼンマイの綿帽子から春動く

黄味二つ今朝は両目の目玉焼き

日記には去年も同じ歯の治療

鳥取県 村上信子

温泉にひたり無欲になっている
菖蒲湯にわたしの軽い罪が溶け
長男の殻ぬぎ切れず過疎に住む
神話にも人間臭さ見えかくれ
パン屋さんふんわり甘い香りする

鳥取県 乾 喜与志

三本の足よたのしいこの日課
ポチポチと日毎福祉の温泉に通う
花の鉢家每ならぶ街になり
私の青空に鯉およがせる
五十回忌の婆ちゃん囲む孫曾孫

鳥取県 谷 口 次 男

虎彦の「足摺岬」そこで読む
言うことを聞かぬ子どももパソコンも
故郷の波の小唄に救われる
じつくりと見てると皺もいい絵柄
独り身は間違い電話また楽し

鳥取県 土 橋 睦 子

老眼鏡外出用が見つからぬ
少しずつ荷を軽くする法話聞く
太陽が紫色になる黄砂
やわらかいメロディー流す歯科医院
春おぼろ恋の目盛りは計れない

鳥取県 岩 崎 みさ江

ボス猿の死角でほぐす肩の凝り
愛されぬ犬ほど人に吠えたがる
象の足に潜む哀しみ視てしまう
恍惚は神の計らいかも知れぬ
錯覚も良かれと思う旅の果て

鳥取県 土 橋 はるお

虹の端掘っても何も出てこない
悔しさを入歯でそつとかみしめる
しみじみと詩の朗読を聞いている
少年の非行を悔しがるノート
奥の手を出して酒のむことはない

鳥取県 上 田 俊 路

風みどり少年の夢発芽さす
葉桜を横目アメリカハナミズキ
遠く住む子は案じても期待せず
厚底を履いて視線を上げてくる
ヘルパーのえくぼが介護和ませる

鳥取県 塔 寛 子

庭師にも日展クラスありと知る（只今 庭園再改造中 5句）
しだれ梅絵を描くように植えこまれ
岩陰になじみのカエデ艶つばく
ところ得た石燈籠に亡父浮ぶ
盛土の苔むす頃は如何に住む

鳥取県 西原艶子

いにしへの風 家持の歌碑包む
観るだけで華やきもらう牡丹の朱

暇な身へ到来物も閑かなり

究極のみそ汁を追う妻の知恵
生きている証の音がよく響き

鳥取県 林 露 杖

新緑の朝の大気を胸に溜め

七割が吾よりも若きおくやみ欄

現実味しつくり来ない介護法

温暖化人心頓に冷えていく

大相撲観てる限りの平和哉

鳥取県 太田 幸 枝

人形が旅の恥までしゃべり出す

赤い羽根恵まれぬ子に届くよう

青い蕁ソツとのぞいて見たくなる

どん底を詩がささえて這い上がる

有頂天自己の軽さが分らない

鳥取県 石 谷 美恵子

桜さくらおぼろな亡母が恋しいよ

そして三年桜の花は咲いたのに

桜満開 頼まれごとは後回し

そらんじた詩も途切れる老いの坂

一夜千し揺れる港の風物詩

鳥取県 国森 武子

老いて知る天の恵みと地の恵み

漢詩読む心四千年を飛び

水中の小さな花も陽の恵み

死ぬまでに良い人形を作りたい

かわいいと名も無き花を孫はほめ

鳥取県 田村 きみ子

ショッピング少し若やぐ花と蝶

新聞のチラシを読んでミルクティー

ミニトマト熟れてきましたきれいです

幸せを逃がさぬようにポストまで

少し陽気になってみようか今日は晴

鳥取県 山本 正 光

今日は好い話来そうで耳掃除

煩惱を小出ししながら生きている

一人旅深い訳などありません

お元気でなどと立派なお言葉だ

銀行へ行くとき一寸着替える

鳥取県 西川 和 子

糸端をやつとつないでいる絆

花道の裏に涙と汗がある

バージンロード父の温もりまだ残る

鼻歌で日曜大工しています

子育ての頃は活気に満ちていた

和歌山市 田中みね

孫のためなら見栄も張ります鯉轍
何分にも素人できて柏餅

妻の手で無惨な鯛の活け作り

神様がこ一番に居てくれる

連鎖反応ひとりが泣けば双子ちゃん

和歌山市 川上大輪

疑問符が今日もふつくら炊きあがる

笑っても泣いても妻は出て来ない

今日もまたバントマイムで過ぎてゆく

行列の出来る店には行きません

男結びも女結びも愛だろ

和歌山市 木本朱夏

新緑の匂いに黒き魔物棲む

夏大根ビリツと痛いところを衝く

十指みな怠惰に春は遅々として

薄物に尻尾隠して春の宵

投げやりな一日だったネギ坊主

和歌山市 西山幸

コーヒーの味 朝刊も退屈だ

歩きだしたら皆親切で意地悪で

凡々と聖書の重さなど忘れ

近道を行くと意外な人に逢う

小走りになってこころを見せにゆく

和歌山市 桜井千秀

情薄れ独り遊びに慣れてくる

眼鏡の度進んで未来かすみ出す

鬼アザミ差し伸べる手を拒絶する

背伸びしたとて多寡が三センチ

生き地獄とまでは言わない高齢化

和歌山市 青枝鉄治

政界の黒いドラマは果てしなく

一幕の芸にもピエロいのち賭け

相槌のほかには芸のない男

頼まれのスピーチ終えた酒の味

法螺吹きの話の中にあるロマン

和歌山市 福井桂香

はにかんでは似合わぬ薔薇の首

細胞分裂そして大きくなる噂

玉葱の輪切りに座るアルカン

コピ―するたびに渴いてゆくところ

少子化へ桃はどんぶら流れない

和歌山市 細川稚代

寄せ植えのひとつがそっぽ向きたがる

横むいたつぼみに水をたつぷりと

葉桜に恐いニュースが多すぎる

ゲーデニング姑は立派なデザイナー

おだてたりなだめたりして歩く足

和歌山市 山根 めぐみ

魂を逃がしてみたい五月空
風のうしろで糸をひくのは紅牡丹
話したい母と話せぬ子の叫び
根性を競い合いましょ油虫
文句言う人に併せて言う文句

和歌山市 池永 正 匍

庭石はスターのように胸を張り
愛の日も忍の日もある夫婦みち
うつなのか雨の日ばかり覚えてる
道草の余裕が知った雪月花
でこぼこの人間さまとたまに遇う

奈良市 天正 千 梢

神苑に今をさかりと紅枝垂
玉手箱開けに行くのに化粧して
秘密厳守と油断さしている
極楽ごくらく首まで湯につかり
埴輪の目 千三百年も夢の夢

奈良市 米田 恭 昌

逃げ馬にのってせしめたさつき賞
見せかけの辞表あつさり受理される
企みを心の闇に眠らせる
育児参加男も産休とると言う
夫婦別姓白い眼で見ることはない

香芝市 大内 朝子

梅雨あけの陽がまぶしくてうれしくて
前向きにアンテナをはるかたつむり
わたくしの鬼を見たときぞっとする
逢うたびに喧嘩している仲がいい
筋通す癖がおとこを遠ざける

大和郡山市 坊農 柳 弘

星まつりペンフレンドの誘い来る
会者定離風の気儘に引きずられ
ストレスを流し込んでる缶酎ハイ
梅雨明けだ分別臭い仮面とる
絵手紙の朝顔母の夏だより

神戸市 中村 ゆきを

立ち止まるふたび逢えぬ風だから
人はふと神にもそむく日のありや
ケータイ往き交う大学午後の門
豆飯を噛みしめ答探してる
感謝して指一本ずつを眺めとり

神戸市 山口 美 穂

父の忌に父の愛した蘭が咲く
カーネーション贈れるしあわせ母九十一
靴が鳴るをうたつて老母の歩に合わす
マニユアルの通りの落し穴に落ち
小半日 時を忘れて庭に居る

風みどり夫婦げんかをやめにする

神戸市 木村 貴代子

白熱の議論の場にも花を盛る

スポーツもモデルもこなす車椅子

新緑とつつじが匂う町自慢

パソコンと椅子が一つで社長室

神戸市 小林 一夫

恋人と別れた話ぎんなん苦い

風船が帰っていったくもり空

蟹売りとしばらく話し蟹を買い

こともなく鉄道模型脱線す

総理死す午後の床屋の歌謡曲

相生市 中塚 礎石

制服にバッジをつけて顔ができ

アルミ缶だけが無くなるゴミ置き場

山城の曲輪にへたり握り飯

朝昼晩やもめになってからの酒

階段はだんだん細くなる孤独

芦屋市 黒田 能子

嬉しい時淋しい時も花を買い

番犬もわたしも今日は忙しい

木々みどりアロマテラピー森の風

階段の真ん中へんでまた迷う

幼子のいずれは離す手を握る

冬春夏競演列島長連休

尼崎市 春城 武庫坊

生きる為 五月の空を蝶が舞う

五月晴れ老いには老いの夢がある

少年の狂気はびこる世紀末

大正の耳に悲しいことばかり

尼崎市 春城 年代

雷鳴の轟き渡り端座する

暴れまわってけろりと雷は去んだ

二階へ声かける凄かったね夕立

片肺で生きのびて来たあすは立夏

老いのあと先 蝶は生れて来たばかり

尼崎市 田辺 鹿太

食べて寝て妻の振り子が止まらない

自画像を水墨にする定年後

自転車にモーター付けて何処へ行く

葉の色で花の機嫌を確かめる

土に生き土に還った父の墓碑

尼崎市 長浜 澄子

同じ血を分けた仲にもある個性

後戻り効かぬ月日よ悔いばかり

シャッターチャンス心の紐が解けている

運を天に任す勇気が萎えてきた

どうあろうと春には春の花が咲く

伊丹市 山崎君子

楊貴妃に逢うて親娘の花疲れ

ホカホカを出してお花見夜に入る

母の日は歩け歩けのスニーカー

注腸検査宇宙訓練さながらに（検査入院 2 句）

夜の病室亡夫に問いたい月あかり

川西市 松本ただし

そろそろと地面こすって杖と足

新聞の端に書いとく十七字

鯉のぼり見掛けぬ時代カージャック

森喜朗名刺の束を下げてゆき

アメリカ屋日本支店の御用聞き

西宮市 林はつ絵

鬱払う願いもあつてクルーズへ

旅の卓よく似た人生盛り上がる

歳を言いたいといのこと許される

お早うと明るい声が出て済んだ

死に急ぐ闇を察して雨の夜

西宮市 門谷たず子

手を繋げばも一度飛べる川の幅

チャンネル権まかせられても淋しかり

レシピばかり溜めて今夜も煮っころがし

輪廻転生お骨になった犬に会う

人生のおまけ楽しむ喜寿傘寿

西宮市 山本義子

存在感たまに波風立ててよし

相槌のよくも悪くも話好き

老人力出すほど他人の厚意うけ

あす討死にするかも知れぬ影法師

呆けた亡母の歳に近づくなりわたし

西宮市 秋元てる

明日に光と旅を喜ぶ傘寿過ぎ（旅 3 句）

素通りの故郷は桜盛りととか

未だ出来る旅有難し松前城

女兒生るああ吾ついに曾祖母か

連休や傘寿さしたる事もなし

西宮市 井上松煙

長風呂を案じる声に目をさまし

髪染めて歳をかくした女ふえ

品のよい老女の茶髪ほがらかに

マグマにも煩惱ありや噴火する

忘恩を写経に詫びて夕茜

西宮市 緒方美津子

ひこばえのひよっこり見えしああ五年

老いてなお自由一ぱい変換キー

最良する力士の勝負リプレイで

春の陽に襦袢干してるママのあり

山桜咲きはこりおり竹のうつ

西宮市 刈田泰司

大阪市 玉置英子

休刊日一日眼鏡持て余す

休場の横綱マゲが邪魔になり

休肝日決めてはみたが秋の夜

休日の都心を歩く万歩計

お化粧の一部始終を見届ける

姫路市 古川奮水

新社員夜桜準備場所確保

不器用が誠実な出来褒められる

ケイタイを拒むとベルを持たされる

石畳歩くも楽し旅日記

三曲の和音円熟奥にいる

大阪市 西出楓楽

風薫る仔犬一匹欲しくなる

お迎えに亡夫が来たら断ろう

くやしいがお金に敬意表します

リベンジを考えながら鍋磨く

逃げ足の早さは芸のうちだろう

大阪市 神夏磯典子

ささやかな慰め今日の運勢欄

金婚でそろそろ歩調合い出した

肩叩き妻の拳にかなわない

雷が鳴るとあなたのそばへ行く

手術して心も見える夫の目

山路が半値二度目の佃煮に
寝る時は涅槃像より丸くなり

峰打ちもこの体には命取り

ヨーグルト苺載せると嬉しそう

車椅子薔薇に呼ばれて二度三度

大阪市 井上白峰

右ひだりどちら向いても義理を欠く

満ち足りて人の心が読みとれず

何時までも続いて欲しいロスタイム

一瞬の油断に詰まる車間距離

人は人 自分を知れと天の声

大阪市 清水絹子

波風もたたず独りの日向ぼこ

近寄れば古代の息吹朱雀門

日本列島風よあらたに選挙戦

凜々と明治が光る翁の背

子の自立仏とふたりかしわ餅

大阪市 鶴田遠野

蟻の眼に湖と映った水溜り

鮮やかな造花妬いてるプランター

汚れ役受けて出世と縁ができ

子が巣立ちや々と自室を与えられ

非常口準備している倦怠期

大阪市 河井庸佑

公正な目を曇らせた先入観
冷静に反論受けるのも度量
下積み能耐えた努力へさす光
安心をさせる嘘だと聞くベッド
グループで元気の中と旅かばん

大阪市 大塚節子

四科まわされ別に異状はありません
エレベーターで降りる変な顔
独りになって結構自由ありません
母逝きてかさ低うなる洗濯機
長老の手のあたたかく萬福寺

大阪市 小林周信

文豪のペーパーナイフ遺品展
偶さかに買った英字紙日持ちする
古稀過ぎてからはペーパーライバー
気配りの人と旅して疲れます
棚田の昼餉葉蘭に包む握り飯

大阪市 川久保睦子

紙フーセンむかしむかしを抜けてくる
相槌を打つ人もなく猫と居る
夢を織る枕はわたしの宝物
妻だけは味方と信じ靴を脱ぐ
自分史をはっきり残すカタツムリ

大阪市 鈴木トヨ子

春風に若さいただく旅に出る
故郷で小川の春を跳んだ夢
弥生三月財布が笑う子は踊る
部屋の手鉢そろそろ庭を恋しがる
夫婦箸辛い歴史を忘れてる

大阪市 津守柳伸

剪定ヘゴメンゴメンを繰り返す
カレンダーぎつしり埋めて恙無し
衣替え去年の染みをいとおしむ
朝漬けの味ママさんは薄化粧
旬の物旬に頂く果報者

大阪市 川原章久

一生の最後は黒で締め括る
いやな顔何時も横向きアマリリス
ほん少し補う金で大火傷
負けたらし雨の北浜傘もなく
四度目の仏の顔は母である

大阪市 辻川慶子

ベランダにとり可愛い鯉のぼり
読み終えてヒロインのまま余韻あり
母と娘のこころの対話サクランボ
男坂跳ね上げる石割れる石
二転三転勝利の汗は美しい

大阪市 津村 志華子

もてなしのお世辞に軽く酔っている

どたん場になつても女打算的

春の風ひとの噂が好きらしい

過信した心を洗う朝の水

亡母蒔いた花を供えに花手桶

大阪市 渡部 さと美

お袋と息子ら呼んでいるらしい

三人の子だけは母に逆らわず

きれい眉あるのに描いている車内

カレンダーにわたし引つ張られてばかり

手打体験して食べました奈良のそば

大阪市 板東 倫子

気まぐれな渡世へ迫い風向かい風

失業の息子が老母に優しすぎ

ある日ふと男の貌を見せる孫

介護法に聞きたい愛とは絆とは

葬列ではしやぐ大阪弁の女づれ

大阪市 小糸 昭子

キャラメルが過去の思い出連れて来た

ばちばちに行きまひよという気の軽さ

気をつけて摘む芽摘まぬ芽選り分ける

芽が出たら次は伸びよと声かける

あいまいな言葉で真実ばかされる

大阪市 町田 達子

子供の日を出掛けるシャンソンの夕

無駄買うて暫くお脳軽くなり

杜若 あやめも萎える二十九度

大好きな童謡の卵の花を知らず

深刻な話かブランコ動かない

大阪市 中田 あい子

行き先がいつもあいまい姑の旅

太閤の湯殿あと見にも有馬坂

鉢植えの花満開の露地四月

バーゲンの服センスよく着る娘

ジベタリアン山うば族も普通の娘

大阪市 寺井 東雲

太平洋丸い虹の中を飛ぶ

行く度にトイレを借りる家がある

水族館ジンベイサメとキッスする

二人連れ遺跡巡りは自転車で

眠るにも形が違う面白さ

池田市 栗田 久子

振るう刃にためらい持たぬ十七歳

罪に泣くその少年の母が泣く

極限の叫び届かぬ異空間

深い洞木の精霊にふと出合う

はし打ちの朱鷺よエールが聞こえるか

和泉市 岡 井 やすお

七夕のねがいに応え光る星

七月に入り活気付くグラウンド

初帰省学生らしくなった孫

七月だ山々禁を解き招く

大工方まだちよつと無理団地の子

和泉市 西 岡 洛 醉

青春の恋あれからの幾星霜

定年になってドラマの小休止

燃え尽きぬ女でいたい日々好日

原点に戻るレールに無為徒食

ダンディーの父スーパーへ髭を剃る

茨木市 藤 井 正 雄

歩こう会妻がおはこの卵焼き

ペーパークラフト器用な手先飛ぶトンボ

おぼろ月テラスで妻が呼んでいる

孫に歯が二本覗いて春うらら

喜寿祝う戦などない迎春花

茨木市 堀 良 江

老妻は孫を見る目でついでくる

呼び戻したい人のあり春の雲

みどり児の手ほど鈴掛 陽の透ける

口紅が気になる稚児の花弁当

花散る日爪ことさらに紅色に

河内長野市 加 島 由 一

朝飯がうまい よっしゃと靴を履く

いつだって泣ける特技は笑顔です

悪いこと続く ええことつづかんわ

母親は会ってたらしい馬の骨

タレントの卵危ない橋渡る

岸和田市 長谷川 呂 万

傘寿われ最高の夢尊厳死

計算と利息老後にくい違う

職退いて悠々自適が忙しい

計算に入れた息子ニューヨーク

將軍の胸勲章で飾りたて

岸和田市 高須賀 金 太

木々の色冴えたら私まで冴える

雨だれは私を連れて逝くようだ

はつきりと言えばきつちり爪はじき

今まさに私のころ割れんとす

いつまでも進歩をしないな人間

岸和田市 岩 佐 ダン吉

伏せられた活字に生きていた多喜二

大勢に流され僕は何だろう

あの頃の勇気の二字を探してる

いつか浮くことを信じて流される

祝勝会おかしな男写ってる

岸和田市 原 さよ子

コーヒーの匂いに負けた散歩道

計算がないから家族温かい

派手な服着れば恥ずかしそうな影

冗談の中にも友の思いやり

たたく手に力がこもる孫出番（孫ピアノ発表会）

岸和田市 藪 野 けい子

筍を煮てかあさんの味に似る

景品に拡大鏡を選んだら

朝刊の十頁を先に見る

睡眠三時間に出た合格通知

介護して窓に見る月冴えている

岸和田市 宮 野 みつ江

親不孝息子の文ようれしさよ

悲しさの深い人ほど優しい目

豊かさに馴れすぎ尻尾振らぬ犬

春風に押されて軽い車椅子

少しだけ覚えた点字見て読めず

堺市 柿 花 紀美女

無器用ですぐに白黒つける父

威張るほどの事ではないが今日も主婦

満々とみだし呑みかう子の就職

淋しさを口笛で夫まぎらわし

バツサリと男を切った一行詩

堺市 志 田 千代

観光マップ古里はその続きです

山菜採りにわか縄文人となる

おつうじがあつたと姑のはずむ声

さっぱりとティッシュで涙ふきました

庭の隅猫こんもりと用をたし

堺市 神 原 文

着物着て心洋装する女

和服ならいつもあなたに褒められる

流行るもの避けて通るがピンク好き

ジーンズで翔びたい気持だけはあり

生活も服も落ち着くモノトーン

吹田市 古 川 喜美子

今日咲いた花は昨日を忘れてる

ためらいの向こうにいつもいるあなた

露の世のいち日何を悔ゆる身ぞ

花ひらく人が仏になる夕べ

万緑に輝く朝を呱呱の声

吹田市 山 本 希久子

弟の方が大きい靴を履く

新茶の香癒しの時間くれました

人恋しうす紫に暮れる街

都わすれに遠い恋の日

眠りにつく病院の曼陀羅図

吹田市 石原靖巳

野次馬が騒がないから火が消える

心地よい酒だ地球が揺れている

本尊の御名は知らず花の寺

枝雀来て浄土がやたら賑やかだ

ミレニアム日本を変える票を持つ

吹田市 大谷篤子

みどりの日午後ゆつくりと時流れ

何時からか待つてる時間好きになり

キャンパスと見立てて化粧して楽し

決断をしてしまったら慌てない

逢いたくて逢えない朝がまた明ける

高石市 浅野房子

蟹一匹あてがい妻を黙らせる

それなりに暮しています離婚以後

尺塩がいいあんばいに効いてきた

宴果ててあとは廃墟となるホテル

差別など一切しない犬が好き

高槻市 傍島克治

名前から浮かぶイメージ裏切られ

遠方の友置去りの二日酔

口数増え妻快復の兆しみえ

はなやかな祝儀袋に照れる額

連休を待つこともなき老いの日々

豊中市 田中正坊

何代も無能の総理持つ不幸

肝心なところかくさる僕の国

三十と七十おんなじわたしです

過去帳にまだ書いてない私の名

背伸びして現代短歌辞典買う

豊中市 吉田あずき

息の根も凍る十七歳の言

豆御飯炊けばやさしくなれそうで

五月の街何か探してみたくなる

地球ごと電波魔神にのつとらる

心配ご無用われに月あり四季もあり

豊中市 井上直次

御集印帳墨くろぐろと筆運び

合掌を忘れさせてる奈良の風

どちらにも肩入れ出来ぬ訳のあり

凄腕も鳴りひそめてるこの不況

物知りの妻を頼りに生きている

豊中市 湯浅馬洗

百四歳天地の恵み受けて逝く

お迎えは亡父の命日母も供

納棺に唇に紅差すわが娘

不揃いの箸から箸へ母の骨

かど口から呼んだおふくろもういない

豊中市 松岡久留美

半日の出会いに咲いた花もある
ランドセル背中に走る孫の道
平凡の中で見付けた今日の幸
省みて喜怒哀楽のながい道
優しさは無学の母がくれたもの

豊中市 岸田知香子

一気飲み案ずる息子の歓迎会
女偏返上したい昨日今日
狭くても私の定位置ミシン前
弓削の里鶯迎え送られる
ガタ郎のエンゼルが呼ぶ弓削の郷

富田林市 藤田泰子

溜息で朝夕鏡曇らせる
大胆なお方でヘビースモーカー
母の橋離れ小島を串刺しに
怖いもの知らずの友が居て楽し
子を産んだ数だけ届くカーネーション

寝屋川市 江口度

公園の鳩はお経が嫌いです
ダンブカー女男になぐり込み
泡風呂に入って海老になっっている
山ぶきの花を見ている雨やどり
目玉焼き妻の自画像かも知れぬ

寝屋川市 森茜

蝶々に誘導されてはなの寺
待つような待たないような人を待ち
玄関をあけると闇が座っている
病むひとの着物吊るしたご祈禱屋
字になって蠅が止まったカレンダー

寝屋川市 堀江光子

言訳をしない男の咲かす菊
無口だがあれでなかなかフェミニスト
塗り重ね女の余念ない世界
丁寧にしまい忘れた万華鏡
写経万遍まだ人の事己が事

寝屋川市 平松かすみ

トンネルが里の匂いを消しました
二車線になって浦島さんのよう
婚札へみんな出ている隣組
薬草履習った人にめぐり合い
ご訪問して下さるはお坊様

寝屋川市 山本三郎

新婚の宿を訪ねてフルムーン
パソコンで宿を探している娘
湯の宿に老母を囲み夜が更ける
亡き母は星になったと子に教え
真夜中の流星群に起こされる

寢屋川市 籠 島 恵 子

足並みがそろちゅーリップの発芽

古代米むらさき色も美しく

五穀米炊いて家族をおどろかす

パン焼ける匂いかすかにする夜明け

投函をしてから眠る午前五時

寢屋川市 柴 田 英壬子

ムスカリとリラにも逢って舞子ビラ(淡路花博 5句)

香草入りサラダをそつと食べ残す

はぐれたら花の館の前と決め

バラ色のソフトクリーム ポーズして

しおさい花園 大阪湾を一望に

寢屋川市 富 山 ルイ子

ボロボロのかばん私によく似合う

何よりも親友の長寿を乞い願う

借りた金返したような気もするが

病葉と思えぬ老母はまだ白寿

山笑う古里亡父の墓参り

寢屋川市 酒 井 勇太郎

あの窓に未だ見ぬ人のシルエット

安らぎは求めず毎日がバトル

二度の職終えてひたすらボランティア

母の味亡霊のよう付きまとう

見渡せば周りは妻の友ばかり

羽曳野市 福 田 満 州

えんどう満開もんしろ蝶が毬をつき

花みずき咲く頃生まれみずきちゃん

捜し物ナイナイ病と名付けられ

のはほんの妻もたまには噴火する

やつとこさ脂肪減つたら皺が増え

羽曳野市 西 村 りつえ

こどもの日豆をむきつつ母を恋う

乗せられて座った椅子が朽ちていた

よそ見して透かさず妻のカーブ攻め

逃げ出した魂探す万華鏡

天と地の恵み忘れぬ田植え唄

羽曳野市 徳 山 みつこ

そつと噛んでみる初生りの莢豌豆

桜もう蟬を迎える貌になり

空豆も青い大空好きなのね

筍を食べて命をつぎ足そう

おすそわけして私も温うなり

羽曳野市 三 好 専 平

頑として人民服を脱がぬ老い

オンドルにテレビオーデオ置いてあり

杏咲く村はどこでも「いくさ」知り

厚底もチャイナドレスも歩く街

ヤオトンの苦勞知っている黄沙

羽曳野市 安芸田 泰子

不機嫌な主へ犬も目を逸らす
リハビリの足へ老犬心得る
身構えて優しい風を遣り過す
散り際は少し未練な八重桜
二十世紀の桜がすべて咲き終る

東大阪市 森下 愛論

しがらみを剥がして増える酒の量
たかが耐杯抑揚付けず飲みなはれ
暗闇に手足委ねる者もなく
泣いて済む事さっぱり引きましょ
うちぎり絵のやさしさ幼い瞳の光る

東大阪市 安永 春

年功も時の流れに逆らえず
燦さんと渚に騒ぐ子等の声
うきうきと体験遍路待合わす
縄電車カラオケ行きに乗り合せ
懐メロを唄って青春謳歌する

枚方市 栗林 光夫

ゴールデンウィーク背広ネクタイ恥ずかしい
花屋さんに小さい麦の秋がある
軍歌なら次から次へ湧いてくる
入社して第一枚目の新名刺
生涯を働き抜いた無位無冠

枚方市 前 たもつ

八十八夜教えてくれる街に住み
豆の蔓分相応にのびている
狭い部屋物に囲まれ豊かなり
清き一票守り通して半世紀
水道水撒いて畑へ雨を待つ

枚方市 宮川 珠笑

若者のスピーチ文例など要らず
農道を避けて農繁期の散歩
ケイタイで二階へ御飯知らされる
嫁たちも愚痴る集いを企画する
亡夫の遺産と保健メニューに埋つてる

枚方市 海老池 洋

何処へ行く人科パピルスペーパーレス
たかがティッシュされどされどと撒く悪魔
桜つばきに椿さくらに憧れる
大芝居打った男へ遠花火
ブライバシー背中合わせにすむ孤独

枚方市 寺川 弘一

選り好みできる辛せ気がつかぬ
お互いの香りに馴染み夫婦かな
老人が老後いちばん思案する
大人になって大人の不甲斐なさわかる
星屑のひとつの地球でもめている

枚方市 森 本 節 子

吹く風はさくら色からさ緑に

つつじ咲き庭の色調乱れだし

洗うたび肌に馴染んではなせない

ライトアップ大橋浮かぶ舞子の夜

花博で日本丸にも逢ってきた

枚方市 鈴 木 政 子

朝ドラにシングルマザーが流行そ^{はやり}う

帰阪して貧乏症が一気に

敵艦に体当りした十七歳

殺人の経験したいと十七歳

バスジャック目立ちたかった十七歳

藤井寺市 高 田 美代子

悪かったなあで済ませるのも夫婦

どちらが先かそんな話はせぬ夫婦

夫婦別姓何時別れたか気がつかず

似ないもの夫婦長持ちしています

嗚呼夫婦 土に還ってまで夫婦

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

夏探す鳥と連れ立ち湖のほとり

うつつから覚めるとからだ解かれる

騒いだら愛した記憶消えそう

数珠の糸切れて水晶手に残る

淡き恋タンポポロード走った日

松原市 玉 置 重 人

生きるとは食後の薬欠かさない

セールスに息ひそませるドアマラー

フロメシネルそんな夫を残せない

力んでも力んでも終着駅がある

朝めしがおいしい今日も楽しみだ

箕面市 岩 津 ようじ

脳病院の院長惚けた噂聞く

切る切らぬ意見異なる医者同士

今世紀最後の桜散り終わる

貧乏性 多忙多忙と満足気

天井の早食い記録持っている

箕面市 唐 住 実

啄木の窓から通げた木の校舎

世は進む私は老化進むだけ

花咲いてニュースにならぬ他所の国

底抜けの財布見ている元首相

達観の店主の喫茶店もひま

箕面市 出 口 セツ子

回想が増える日めくり軽くなる

数行の人生なんだ我が履歴

一呼吸座り直して読む手紙

新世紀無限の夢を描く息子

十七歳の思考を写したいカメラ

守口市 結城君子

されど嬉しい孫の婚約決まった日
忙しき弾いて聞いているナスダック
公平にほめて石楠花二つ咲き
岡本太郎の鯉職なら揚げたいな
おや半袖になったやないの影法師

八尾市 村上剛治

細紐のだんご結びにある決意
母の顔みると本音が転げ出る
まなうらに煌く故郷の青い海
厚底の靴が必死で歩いてる
喜劇だな義理で誘われ義理で行く

八尾市 高橋夕花

挨拶ぬきでまず一献を差し上げる
雑巾を刺すこともなし本を読む
花冷えの女エンジンかからない
小夜更けてゆらりと踊る魂だ
花に水 私にたっぷり水をやる

八尾市 宮崎シマ子

苗の時名を覚えてた白い花
地車の綱幼きものの手にあまり
頼られていて頼りない足となり
シスターも乙女 赤いセータ買っている
七切れに上手に切つてある西瓜

八尾市 内海幸生

せめて一句 夢のゆめとはならぬよう
何もせず何もできずに陽が沈む
孫巢立ち子が去り亡妻と二人だけ
どの部屋もテレビが映つていてひとり
裏切らぬ花に囲まれ水を撒く

八尾市 篠原いつふみ

心配が終電始発の音も聞く
変化球君の心にストライク
戴いた海外みやげ見せられる
散歩さす女が犬によく似てる
裏腹の笑顔女は怖いもの

八尾市 吉村一風

野仏に笠きせてあり花吹雪
ハンカチと一緒に夢をたたく
囀りに蓄ふくらむ川下り
定年で素うどん吟味してする
幸せを数え生きざま考える

八尾市 生嶋ますみ

幸せを包みこむようわが家の灯
いたわりの言葉かけ合い通夜の道
言いわけはすまいと決めて月仰ぐ
貴婦人のように白ばら薫ってる
言い負けて置こうお世話になる嫁だ

大阪府 米澤 俣子

向き不向き幾度去就くり返す

思考力ゼロ 様にならない春の風邪

いつも笑顔つくろう人に躊躇する

急かすともいずれば宇宙の旅に出る

自信家の入れ歯カチカチ音がする

京都市 高島 啓子

猫用の入口よその猫も来る

門を出て特に用事は無いのです

叡山を借景にして寺の門

風いっぱい小鼻に溜めている自信

フラメンコ佳境となつて風を蹴る

亀岡市 井上 森生

孫が来る友が訪ねる良い転居

保津川も嵯峨野も宅の庭先よ

燃えるとも山奥深くヤマツツジ

孫をあやす你好ハローこんにちは

無私無欲すんなり見える定年後

愛知県 早川 盛夫

嗤わないのは借金の所為らしい

安心をしたか途轍もない軒

約束は当てにはならぬ呂律なり

私より金に用事があるらしい

顔触れへ今日の席順この辺り

富士宮市 渥美 弧秀

ホーホケキヨ今朝も窓から富士仰ぐ

小雨でも鶯の啼く森に生き

お早うの体操富士は五月晴れ

草取りの背なに花びら降りかかる

八十余年亡父の倍余り娑婆に生き

静岡県 蘭田 猿杵

与えらる儘に介護保険証

山野草街で磨かれ蘭になる

山はもう眺めるだけの登山靴

山門に見つけし春の千杜札

地球儀に飽食と飢餓同居する

富山市 舟渡 杏花

行き詰ったと見えぬお代り三杯目

一ひろの縄の誘いに耐えている

いつか光る小石が眠る小引出し

樟若葉千体仏の中にいて

性書と聖書 間違いにも程がある

富山市 島 ひかる

感性が光るみどりの風に会う

一階で消える二階で見る夕陽

優しさを倍返しする人と住み

ジーパンに袈裟住職のひと昔

青空も知らず育った娘のノート

横浜市 菱田満秋

東京都 播本充子

黄砂降る生れ故郷は春の風
手術する前に退院日を決める
大手術精神力もものを言い
退院へ飲酒復活日取り訊く
退院をすると全快だと思い

横浜市 山下省子

うれしくて他人にも分けている涙
陰ながら応援すると逃げられる
逆風が前へ前へと駆り立てる
スタートの我慢永くは続かない
涙目の写真の孫を抱きしめる

町田市 竹内紫靖

人間に見切りをつけてバガボンド
鈴蘭やこの万灯をいつ点そ
果せない思い託そうシャボン玉
パニックに俄然張り切る特売日
スタンバイわたしに潜む活火山

川崎市 和泉あかり

よく噛んだ男よく飲む喉になり
ハイビジョンを台とし古き雛人形
容赦なく腫れ目の投手撮される
新大関まず一勝のはたき込み
ゴッコではなく少年が鬼となり

大宮市 八田敏

怒りたくなったら肩の力抜く
花の里抜けて気付いた指の棘
足腰を病んで恋しい吹雪く里
独り居の知恵は救急車を使い
捨石の野心を誰も気付かない

東京都 後藤早智

子供の日 国旗を前に戦友と酌む
遠き日を幼馴染が提げて来た
介護法に合わせた暮し徐々に慣れ
新築の庭へたけのこ伸びて来た
やめられずまたも凝りそう菊作り

黒石市 相馬一花

托鉢の僧を花見の波が避け
縄張りを持つているのか池の鯉
新参も仲間に入れる郷土愛
前世の景色か夢に出ては消え
火の国に住んで火の帯踏んでいる

方便がいっぱい詰まる袈裟の裏
警官も僧侶も僕も人の子だ
女房に感謝しながらゴンボ掘る
面の皮厚い女に触らない
岩田帯なんか要らない共稼ぎ

黒石市 千葉風樹

花いちもんめだんだん遠い街明り
生きられるだけでいいよと蟻の影

残照の赤は亡父への挑戦状

迷路から抜けて静かになる日記

ゴジラも人も街を壊して生きている

十和田市 小笠原敏人

連休の北の桜は震えてた

花見酒寒さに銚子列を成し

携帯を持ったら電話来なくなり

連休をチャイルドシート着けて待ち

孫帰に残したパンを齧る妻

弘前市 蒔苗果林

一人分洗う食器の音と唄う

明日あれば明日の風こそ花咲かん

女子高生花模様入り名刺出す

苦いお茶帰り際から甘くなり

我とわが楽しむ場所が見付からぬ

弘前市 高瀬霜石

背中から斬られた傷は治らない

本日も枯渇している父のダム

冗談でみんな済ませる肩の幅

入浴剤たつぷり入れる嬉しい日

目が覚めてオヤ生きている生きている

弘前市 須郷井蛙

看護婦ももて余してる肥満体

見なれない子等も来ている遊園地

診察券だけは手早く番をとり

花まつり終えて野鳥がはつとする

高い鼻欲しいコケシは夢に見る

弘前市 小枝ふさる

春彼岸ひとりではには逢いに行く

去年とは違った貌で咲く桜

子の居ない端午の節句よもぎ餅

自然との戦始まり歟洗う

コンビニに勢揃いする美味しい水

弘前市 相馬銀波

背伸びする癖が私の立ち泳ぎ

聴くだけで終る私の健康法

くすり酒どちらも今は休めない

太棹がうなり桜がわつと咲き

ゼロ金利介護の壁が高くなる

弘前市 小寺花峯

まだ止まぬ雨を悔んでいるトンボ

気まぐれな下駄は銭湯へと向かう

くちなしの花が迎える午前さま

テレビ見て涙を流す酒もある

「ハイ」と言えば安心しきる親のバカ

出陣のねぶたで梨花に逢いに行く
弘前市 櫻庭順風

出陣のねぶたの如く行く砂丘
棲端折り砂に噛みつきじよっぱり娘
音たてて帽子吹き飛ぶ日の砂丘
蟹の絵を砂に描いては哀しませ

弘前市 今 愁 女

逆Vのかたち白鳥の北帰行
散りし桜はなれ相寄り水に浮く
流れ星ちちの姿を垣間見る
飽食の猫は薄目を明けたまま
観光地俸せそうな顔ばかり

青森県 西谷大吾

とりあえず明日の米を買っておく
握手したその手が裏で糸を引く
葉桜や野良へ忙しき津軽弁
耐え忍ぶ津軽女やりんご花
新緑の野に夢馳せる木馬たち

砂川市 大橋政良

嘘ばかり聞かされてきた耳洗う
ついてくる影にも汗の匂いする
風向きに合わぬプランを練っている
悪友が起してくれた七転び
神様の留守電願いごとばかり

達筆で堂々と誤字書いてくれ
熊本県 高野宵草

欲の金残して逝くはくやしかり
一斉に時刻うつ老父の時計たち
水仙の閨兵うけて門に入る

熊本県 岩切康子

感謝で胸いっぱいが伝わらず
今日からは明日からはと三ヶ月
みどりの日怪我して戻る情けなさ
懐かしき放っておけずに茅花抜く

唐津市 樋口輝夫

要介護1に不満で増える愚痴
民守るはずの十手が錆だらけ
本部長お詫びだんだん上手くなり
居残りの社員に妻の握り飯

北九州市 梅田宣司

河豚の値を聞かずに食べる味のよさ
人質のような気分で禁煙車
み仏の後ろ姿も見て帰り
手の平にのるだけの幸こばさない

松山市 丹下美津子

平成二年郵貯満期の使い道
叔父さんの横へちまり叔母が添う
大きな目昔のままの友に逢う
生きにくい世に生き初夏の花を助け

香川県 山地 マツエ

主役の座夢見て耐えるかすみ草
ご自由にすればと妻の反抗期
人脈を信じてリストラされている
酸欠の姑が小さな旅に出る

広島市 森田 文

倒木からいのちをもらうきのこたち
ミレニアム銘打つ行事目白押し
延ばしたき用件今日が締め切り日
お決めの結びにかえて花の束

竹原市 古谷 節夫

筍の精気を貰う今朝の膳
後編のシナリオ妻が朱を入れる
一日を御破算にするコップ酒
徒長枝が不精の僕を叱ってる

岡山市 井上 柳五郎

若葉萌ゆブロッコリに似た春の山
この雨に出掛けてみれば句座は満ち
遠く住む曾孫偲はるとなりの児
しあわせは白いおまんま今日も食べ

岡山県 福原 悦子

たった一言父の無口が光り出す
耕せば大地の鼓動しかと聞き
母の忌へ江戸紫の形見分け
尻尾下げ犬も要心しています

岡山県 富坂 志重

老いの身に敵はつくらぬ笑いじわ
もの忘れこまでくれば怖くない
散るサクラと日の暮れるまで話してた
夢を追う追わねば夢が捨てるから

岡山県 荻野 鯨虎狼

笑い顔忘れた婦警に日が沈み
足跡をじっと見つめる蚯蚓の目
寡婦の庭花一杯に咲き競い
悔恨を残して返す片瀬波

松江市 佐野 木みえ

法要の亡父母にと読経声高く
子の帰省ついついビール飲み過ごす
夜の雨牡丹にそつと傘をさす
中国の子に帽子縫う楽しさよ

出雲市 岸 桂子

半額に浪費の虫が乗せられる
淋しさは過ぎた若さのせいじゃない
百花百態忘れたゆとり取り戻す
日めくりをまとめて外す日の早さ

出雲市 板垣 夢酔

生ビール腹に納めりや疲れ去る
石段へ荷物降ろして汗に風
ひからびた喉へ仏のような水
尾に塩をたっぷりつけた鮎の膳

鳥取市 上田宣子

バーゲンの山で光ったお人形
もう一人わたくしが堪えている括弧
いじわるな赤い金魚がお友だち
少しずつリズムがあがり濃い緑

鳥取市 坂田和歌子

ストーンと落ちたトコロテンの私
眉毛も唇も見える宛名くる

ずらずらと魚の葬よ夜が白む
ドキドキ貴男の三角波を喰う

鳥取市 植田一京

愛なのか愛が足りぬか妥協ぐせ
好きな人の隣でギクシャクしてしまう

ホップステップ春から夏へ衣替え
プラス志向 角度を変えてまた進む

鳥取市 岩原喬水

出番待つ鏡に穴があきそうだ
年金で楽しく遊ぶ街に慣れ

退職の花束妻に捧げます
傘寿過ぎ暑さ寒さが身を攻める

鳥取市 杉本孝男

封筒に凝った割には中味なし
名水は五臓六腑に染みわたる

庇いたい突き放したい聞きあい
死に目にも逢えぬ苦しい壁がある

鳥取市 福田登美

生きている今日の幸せ募金する
桐の花紫立てて香る初夏

大声で電話が歩く初夏の街
手つかずの明日を自分の手で開ける

鳥取市 夏目健一

無視をしたりされたりしての夫婦舟
許すこと覚えて風に乘って見る

ときめきがあれば死ぬことないだろう
開封をしてまで見たい親ごころ

鳥取市 近藤佳子

花明り逢いたいひととは遠くして
年一度宴のために花は咲く

宴会はオール皆勤午前さま
五十回忌燃えよ母の日絵ロウソク

倉吉市 山本玲子

夕焼けに勝負あずけて草野球
飛蚊症ふつとよぎった黒揚羽

無邪気に食べた野苺いまは躊躇する
お玉じやくし手足がなくて群となる

米子市 神庭詩郎

普段着で良いを真に受け恥をかき
独り居で留守電ONのままで置き

少しなら染めてる髪も受け入れる
選挙戦済み後援会知らぬ顔

米子市 茂理高代

落ちそうな椿手を添えあたためる
花は散っても咲くけど君は帰らない
芽吹くものすべて味方にして充ちる
こぼれ種素敵な花の返り咲き

米子市 青戸田鶴

リリアンの糸から夢がこぼれ落ち
桐箆笛古い着物をなぐさめる
ひたむきに走り過ぎるとひびが入る
気品溢れた壺に心をうばわれる

米子市 澤田千春

別れても爽やかな風残す友
身の内を流れる母の躰糸
かばかばと子等を吸いこむ塾の口
野仏のあたりの風はさわやかだ

米子市 田中亜弥

河は正直溢れるたびに哭いている
ときめく程の紫の玉もっている
寺の前で好きな花屋に成り申す
挫折のたび緑の中をさまよいぬ

米子市 白根ふみ

山ざくら人目に遙か身だしなみ
鶯に笛したくて山ざくら
熱湯をかけると山葵いきを止め
花水木 皐月の天を受けとめる

米子市 木村春枝

糸車たんと昔を語り出す
呆然と巨木斃れる音を聞く（荒介さんの死 3句）
爽やかな風を残して逝った人
花水木なぐさめくれて花の色

米子市 門脇晶子

サイフォンの香にさわやかな朝がくる
天もストレス溜めたか今日も曇り空
気晴らしの電話が長い一時間
さわやかな山に恋する靴を履く

米子市 中井ゆき

風に吹かれ荒介さんが山越えた
紫紺色今朝の大山背をたたく
鳩一羽今朝も見舞いに来てくれる
見舞客だれも桜の話せぬ

米子市 本吉宗光

ラブソング感情移入半世紀
借金王国民不在^{★ラビ}政^{★ラビ}
年金減額高齢いじめやがて来る
梅雨最中投票日とやその結果

鳥取県 黒田くに子

向き合えばあなたが見えるお灯明（亡夫七回忌 3句）
香煙へ小さい声で おとうさん
あなた知らぬひ孫もみじの手を合わせ
余生とは忍の一字が多すぎる

鳥取県 橋本多哥由

歳月を流れて温い陽もあたる
童心にもどり仲よくなる夫婦
愛妻は紙一枚で離婚する
四姉妹選び嫁にする

鳥取県 原みさを

死の後にも生まれる前も暗い海
骨壺の真つ白という軽さかな
山頭火と酌む梅雨寒のにこり酒
十七歳冷たい声で吠えている

鳥取県 近藤春恵

ほどほどにしないと傷が深くなる
ライバルの前では見栄を張っておく
手柄顔して満点の子が帰り
満開のお花畑で詩が生まれ

鳥取県 石尾かつ乃

春はもう駆け足だったつばめ飛ぶ
城跡の碑文にそっと咲く野菊
横糸がいやだと言って馴染まない
寄せ書きのエールを贈る華燭の日

鳥取県 権代康女

登山帽かぶれば若く見える夫
食べ方で人間模様浮いてくる
やさしさが顔に出てくる思いやり
苗代の蛙が恋の歌唄う

鳥取県 奥谷彩子

日日新たな昨日の自分干している
里の野に小躍りしてるにぎりめし
欠け茶碗ちぐはぐ会話山盛りに
お座敷列車一刻のうたに酔う

鳥取県 乾隆風

自画像を描くと古畳に見える
嫁さんの介護を当てるにすぎない
鶴さんが亀さんさそう福祉バス
采配もできぬ案山子に見るだろう

鳥取県 吉田孔美子

三回忌はたんの花芽増えました
年重ね肌着ますます白が好き
植林の汗は緑に萌えて来た
建築士となりの藁だけ誉める

和歌山市 福本英子

歌詞ほども情映らない天城越え
独銚の湯霽の鶯谷渡り
堂ヶ島潮の彫刻眼のあたり
もうここで引き返そうよ石廊崎

和歌山市 榎原公子

あの人もこの人も亡い初夏の風
塗り替えた壁に染み出る元の色
私はわたし弁解したくない
全身の毛穴で探る明日の風

和歌山市 垂井千寿子

三ヶ月病籠りが初夏になり
若づくり影の背中が笑うてる

風邪引きへテレビの風景きれい過ぎ

ブライドがポチにブラシをかけている

和歌山市 楠見章子

ねぎ坊主いちねんせいもつんつん

蝶追って戻る幼い日の欠片

マスコミに見えぬほんとのボランティア

人間国宝頑固の化石だとおもふ

和歌山市 古久保和子

ふる里の花屋に並ぶ野菜苗

木の芽時誰かチャイムを押して行く

うたた寝へ猫が跨いでいった午後

連休のまん中に置く熱いお茶

和歌山市 玉置当代

右を見て左見る間に鬼になり

そこそこに生きるととても楽になる

紅のあと今にもばれるのに隠す

来世もまた君と添う気の重さ

和歌山市 山口三千子

子は鷹に伴侶と亡姑がだぶりだす

切り取り線切れれば傷付く子の未来

新緑の活気病んでる眼に浴びる

いざという時は頼れぬ命綱

海南市 三宅保州

馴れすぎていないか生きていることに

明日という海へ流れてゆく命

疑えば月にも裏のある如く

ジスイズアペンが私の語学力

海南市 谷口義男

老婆心提案したら嫌われる

大正の反骨見せる意地見せる

物忘れすればボケたと妻笑う

キレた親からキレた子育つ事知らぬ

和歌山県 中後清史

取り敢えず冷凍をして考える

惜しまない汗が実となり花となる

大風呂敷広げて包むものが無い

子が捨てる衣服を母のリサイクル

大和高田市 岸本豊平次

それからは土にまかせる苗を植え

庭畑の出来を近所も気にしてる

見てみたい昔のままか原節子

四季あつて桜筍紅葉柿

神戸市 池田善守

今日一日今日一日を良しと生き

連休に旅に出た頃おらが春

手紙書く友も同じ日手紙書く

犬のせた車椅子押す老夫婦

尼崎市の場 十四郎

モデル地区街一斉に花咲かす
二番目に好きな女と握手する
再スタート ハローワークの靴をはく
まだ達者賞味期限を書きかえる

伊丹市 小熊江美

写されてモデル気分でポーズ取る
鳥取の砂丘のらくだ優しい目
伝説の白兎海岸今日も雨
赤紙が夫に來た日を忘れない

三田市 北野哲男

美しい料理が得意味不問
貧乏で暇ばかりです達者です
どん底と思っていたら底抜けた
視線には安全装置ありません

宝塚市 黒台伊佐武

世の中を斜めに見てる十七歳
若葉萌え風薫る朝ギブス取る
一呼吸置いて夫婦の和を保つ
遠回りして得たものは大切だ

西宮市 西口いわゑ

歲月や捨てて得たものでありました
母の日へ子は持ち寄りて来てくれる
娑羅双樹ひととき無私の境地なり
若葉萌え野の仏にもいい季節

西宮市 菊池トミエ

野も山も三日見ぬまの浅黄色
花博へ行つて疲れた人の波
仏だんに一番似合う金盞花
枝豆がおいしくなつて出る頃だ

西宮市 亀岡哲子

吊皮を握らず揺れに耐えている
家中の椅子を集めてうれしい日
二人分の胡麻に擂鉢大き過ぎ
間引きなど出来ぬ遅れて出た双葉

西宮市 長谷川淳

招かざる客あり話進まない
招待券落し穴には気がつかず
呑むほどに何時か本音を吐いており
ビール党別の胃袋あるらしい

兵庫県 大谷幸次郎

妥協してまあるくなつた顔ばかり
包装という名のごみも買ってくる
うるさいと嫌われながらお節介
少年にぬるい世相がなめられる

大阪市 本間満津子

しよがないな他人の所為じやなししょうがない
口喧嘩の相手も不調つまらんな
信念は強い味方だ挫けない
花盗人花の思いを知らんだろ

花博へ車椅子まで積んで行く(花博) 大阪市 稲本凡子

五体無事それから欲が出始める

無器用に生きた私を嗤えない

母の日はちよつと豪華なフルコース

大阪市 北 勝美

精一杯呼吸へ大口あけ生きる欲

寝たきりへ曾孫を見せに來た連休

難病の妻のケアする春落葉

自転車に乗れる限りは通うケア

大阪市 安達はじめ

若鮎の姿涼しい京料理

ときめいた鼓動を隠すサングラス

待つ事に慣れてのんびり茶をすす

縁日の金魚息づくにわか雨

大阪市 杉澤汀

亡き母の手紙束ねてお仏壇

厚底の靴がどぶ板踏みわった

薄墨で肩書消した名刺だす

晩酌の燗の具合はボクがみる

大阪市 岡本久峰

末世か女子供を狙うとは

医療ミス多発器械に頼り過ぎ

老女医のやる気足許覚束ぬ

中座消えトンボリ幅を利かす蟹

テレビつけ朝の挨拶独居なり

胃カメラに覗かれそうな心底よ

雪景に心洗われ北の旅

七夕に宇宙衛星まばたきし

大阪市 清水利武

国鳥のトキに二代目二羽生れ

一流の店で一番不味い飯

台風一号走っています五月晴れ

リフォームをするのに二百万が消え

池田市 藤井計光

花の名も知らずしきりに褒めている

母の前小さく見える大男

すっぱんの生き血で騒ぐクラス会

底辺の味ある人と打ちとける

池田市 岡本吉太郎

パイプ役に徹して過せし五十年

責任を上手に部下に回す人

話上手何時の間にやら口車

脇役を上手に使い名画出来

泉佐野市 山本蛙城

梅桜躑躅誤作動なき宇宙

鴛ゆえのニュース二羽目も三羽目も

お涙二世国政なんてこんなもの

最高ですか言うてやりたい堀の中

貝塚市 池田 寿美子

花に酔いひと日の夢に夕暮れる（哲学の道）

娘の肩を借りて目覚めた花疲れ

即興のドラマを背負う日日の風

介護保険ケアの現場は騒がしい

交野市 山川 日出子

老画家が薬屋根写生千枚も

ディカプリオ日本はふしぎ花見酒（4月来日の俳優）

ミニ時間そつと教える砂時計

うたたねの猫にタオルをかける孫

河内長野市 井上 喜 醉

我が家には三代続く左利き

口下手も黙っておれぬ腹の虫

腰すえてとことん飲んだ里の鍋

別荘は浄土と決めて気が楽だ

河内長野市 植村 喜代

世間では連休花見と騒いでる

手の届く春がなかなかつかまれず

来てくれて有難う疲れ残るけど

来たらババ帰ったらババと孫の知恵

岸和田市 井伊 東 吉

照り映える若葉に元氣貰い受け

子や孫の帰り気になるGW

連休前くすり通院済ませとく

意見合い買うこと決めた花水木

岸和田市 原 苑 子

子の名まで借りて抽籤はがき出す

通販のモデル想像スーツ買う

居眠りは無用自前で観る切符

夫は留守朝寝お茶漬けドラマづけ

堺市 黒田 真 砂

水上艇桜満喫クラス会

嫁かぬ娘に想いが残る紫木蓮

娘のローン親馬鹿頭悩ませる

往診の医師のジョークに気が晴れる

吹田市 瀬戸 まさよ

出番待つ花の舞台は五月晴れ

青い麦十七歳のあわれなり

ふつつかな子ですの言を懐かしむ

料亭もうどんのセット昼食事

吹田市 野下 之 男

輝いて暁の寺天背負い（タイ国にて 2句）

長政も母を恋うたか異国の夜

火の山の怒りも判る世紀末

旅の宿静かな妻と海を見る

大東市 児玉 蛙

置き去りにならされカメの歩みなり

いつまでも華でくらせと誕生日

洗濯機わびしくまわる老い二人

滝の音きこえてきそう山河の絵

高槻市 井上照子

採血の足しにジュースをゴクゴクと

日が落ちて生きる理由を考える

思っていた感謝が時に炎え上がる

少年の純な魂魔が遊ぶ

高槻市 江原秀夫

独り居のむなしさを聞く朝烏

祝米寿 百歳の夢ふくらませ

振っている心も痛む愛の鞭

生きている証 地ビール胃に浸みる

豊中市 滝北博史

車椅子の友のガイドで散歩する

孫娘なゼアメリカの大学へ

家のキーも賽銭箱へうつかりと

くやしいがデイサービスで寝るばかり

富田林市 片岡智恵子

夢芝居あの世この世を行ききする

騒音に告白消えた歩道橋

切り株に深いみどりの跡がある

十年満期そんな約束でき兼ねる

寝屋川市 高田博泉

ほかかな医者ですんなり手術受け

先輩のツテでキツパリ辞められぬ

順番が来たのに帰る歯医者なり

ボーナスをそっくり渡して愚痴を聞き

寝屋川市 岸野あやめ

誕生日来るたび嫌だなと思う

老姉妹父似母似と言う法事

風呂敷に包んで母の愛が来る

嘘ひとつ庇うて渦を出られない

寝屋川市 坂上高栄

徘徊は子供探しの思い出か

文楽にうつとり人形になっていた

腕まくり程の威勢の良さでない

大根を選ぶ時間は惜しまない

寝屋川市 太田とし子

私にはまだまだ座る場所がある

前もって言うてはならぬ内緒ごと

長旅に疲れた水が淀みだす

あの世は気楽ノーネクタイで逝くところ

寝屋川市 北岡波留吉

片腕になってと女言うけれど

しごかれて鍛えた腕は無駄がない

過去ある身妻の支えで今日の幸

法話聞き寸暇を惜しみボランティア

羽曳野市 吉川寿美

絵ろうそく継ぎ足し少し生きのびる

花に雨女は愛に鈴を振る

水蜜桃熟れていつかは背く日も

深爪の悔いを抱いて五月闇

羽曳野市 酒井 一 壺

馴れている家の扉に挟まれる
出入口すべてを開けて留守にする
どの子にも心を配る教え方
運命の出会いとなった五番線

東大阪市 谷口 義

枕元でごはんごはんと言う男
直った行きます前のパチンコ店
悪いことしてないのには言い切れぬ
中一日置くとどうでもよくなった

東大阪市 指宿 千枝子

春よ春命あるもの輝けり
草花に慰められる昨日今日
伊豆で買ったアシタバの種まいている
飛行雲やがて形は上り竜

東大阪市 北村 賢子

面影を追えば少女の日にもどる
木の芽風腹いっぱい泳ぐ鯉
バツサリと過去も断ち切る長い髪
明るみに出て慌てだすお役人

枚方市 二宮 山久

定年の椅子はまちかな酒を飲む
母の日へ妻をいたわるブレゼント
人間が大好きだからコップ酒
子供から大人に変わる衣替え

藤井寺市 中島 志洋

深水の美人に見せる藍浴衣
大ジョッキお代りをする赤い爪
綿菓子が目当ての孫と行く夜店
仲人が十人並みと言う器量

藤井寺市 太田 扶美代

越えてきた坂にもあった花畑
渡せなくて食べてしまったチョコレート
心とは裏腹わたくしの笑顔
決断の遅い男のサングラス

松原市 小池 しげお

おおきいと言える夫婦になってきた
金平糖十万円もした入歯
酌ぎ合いは一ぺんずつで父息子
ご予算を聞いて家具屋は出てこない

箕面市 椎江 清芳

盆の僧麦茶半分飲んで立ち
柩には入れてくれない預金帳
鐘乳洞零一つがよく響き
阿呆になるリズムが阿波の盆にある

守口市 井上 桂作

孫叱り親もついでにお説教
まあまあと教育ママは褒め上手
朗らかな孫の笑いに年忘れ
ゆつくりと二匹の亀は散歩中

人間も花も疲れて雨ン中

八尾市 宮西弥生

長谷の花 夢のつづきのまださめぬ

しっかりと躰がほしい子も母も

どなたにも探さないでと花の旅

八尾市 長谷川 春 蘭

恋文にならないように花便り

新緑に孫抱きあげて祖父の天

春愁や机上のみだれほしいまま

野あざみをいとしと見れば棘は見ず

八尾市 高杉 千 歩

オランダ直送母の日のカーネーション

世紀末十七歳を守れない

四分の一の西瓜を持てあまし

留守電にして一日を絵三昧

八尾市 村上 ミツ子

手抜きして後でよけいに手がかかり

ときどきは写経もします赤い爪

足の爪お腹がじやまで切れません

医者通い元氣ですかと聞かないで

八尾市 神 原 まさと

形あるもの減びるが惜しいこと

数字から離れ八年少し呆気

じじの部屋孫の好奇の目がひかる

ガーデニングつもり貯金が咲いてます

絶滅種と烏合の衆とで総選挙

裏のことは裏から見ないとわからない

陰暦のほうがなにやら合う体

喜寿の宴むかし語らぬ東山(長姉 喜寿)

京都市 山海 友 熙

水恋し母なる海も母の顔

高い樹のてっぺんにある夏帽子

庭下駄に父の欠片を見てしまふ

灰皿をきれいに洗う紅い爪

京都府 稲 葉 冬 葉

麗らかに揚羽蝶かな風は初夏

株下落無口が喋る風五月

十分に生きた気がする茜雲

良心の呵責に少し病んでいる

富山市 酒 井 輝

松だけを並べて四季の風を描く

ついてよい嘘でおとなになってくる

追い抜かれそうな気がする急ぎ過ぎ

追突をした方に効く守り札

富山県 増 田 紗 弓

もうひとつの厄年男子十七歳

五百羅漢の輪袈裟へかがむ老いの膝

経済の端を動かすおしゃれかも

虹抱いて抱いて囲みの中にいる

横浜市 清水潮華

美しく老いるテレビの化粧法
旅立ちの靴踏ん切り待っている

遺伝子を思えば我が子叱れない
ぼろぼろになってもお腹空いてくる

横浜市 菊地政勝

定年に一番風呂を妻と決め
円満は我執を捨てた夫婦仲

若返りカネに糸目はつけません
グランドに立つと心が走り出す

横浜市 小野句多留

無位無官趣味の仲間の和に染まり
ゆつくりと愛もち上げる観覧車

年金の杓子定規に生かされる
バーゲンで下着一枚買うてくる

十和田市 阿部進

流行の先端行くは勇氣いる
手作りの幸を貴男に贈ります
本音では生きて行けないバーのママ
里の祖父お酒の味に恵比寿顔

弘前市 福士慕情

一発でかかる車の調子よき
信号の三つ目からは岩木山
四季折りの桜眺めて濠の鴨
まずお茶を一口飲んで出す帳簿

弘前市 中山雅城

アイドルに握手をされた有頂天
イベントの好きな男の胸リボン

カムバック過去を語らず振り向かず
キャリア組居て省庁が競い合う

弘前市 岡本花匠

クラス会写楽の貌が笑い合う
落ち込みを内助はなんなり包む傷

豆を炒る喜怒哀楽の貌弾け
弾まない毬に親の目離せない

弘前市 一戸ツネ

セレモニー火葬場の雲動けない
ねぶたの火揺らすお囃子花浄土

残り火の温さに縋る老い河童
野心の火尽きて静かなデスマスク

二賞選考応募は

八月号の応募用紙で！

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上、出句した人に
応募資格を認める。

② 平成11年9月号から平成12年8月号までの入選句

路郎賞―同人・川柳塔欄の入選句から8句

川柳塔賞―誌友・水煙抄欄の入選句から8句

③ 8句を楷書で書き、8月15日必着のこと

この句 この人

橘 高 薫 風

牙がとれ男だんだん萎えてゆく

井上 勝視

男は格好をつけなければ生きて行けぬところがあるのは、人間も動物も同じだ。狼に牙が抜け、獅子の鬃が瘠せてはしめしがつかぬのである。人も入歯になり、白髪のかさの減る頃は、限界を自覚しはじめる。

作者は唐津の記念大会の私の選で天位を獲得、同人に加わって頂いた。日本の父の典型を思わせる方、これは実感の句であらう。

雲流れ時が流れて石舞台

安藤寿美子

蘇我馬子の墓と言われる石舞台古墳の岩石のたたずまいは、確かに雲の移行の下にしずまる悠久の時を感じさせる。そして王朝時代の華美な宮廷を幻覚させもするのだ。

寿美子さんの器量は大きい。このような句とともに洒脱なユーモア、皮肉の作も得意だが、卑しさのないのは教養のたまものだろう。

モナリザの微笑ブーチン氏の微笑

藤解 静風

謎の微笑と言われるモナリザと、ロシアの

大統領ブーチンの白皙冷徹な表情から洩れた微笑の対照は、効果的に思索の知性をそとる。

それは文芸の醍醐味の一つで、女と男の別、

時代の差も一層佳句に仕立てた要因と思える。

人を殺した後かも知れぬモナリザ、これから殺すかも知れぬブーチン、私の鑑賞である。

作者は私と同じ名、雅号を薫風としたかったが山内静水氏の一字を継ぎ静風と号された。

「藤解けて風に薫る」もふさわしいムードである。私と同じ雅号に改めませんか。

恋文にならないように花便り

長谷川春蘭

半世紀平和の続いた日本は、花の多い和やかな印象の国になった。それで様々な花便りが出来るようだが、恋文とまぎらわしい書き方をすれば年甲斐もなく思われるに違いない。

そこは年の功のけじめである。軽みの句。

平素は温厚で口数も少ないが、挨拶その他の丁寧さは明治生まれそのものの御仁である。

花みずき咲く頃生れみずきちゃん

福田 満州

桜が終れば花みずきの爽やかな季に入る。好い季節に生まれて好い名を付けられた女の子は、きっとやさしい分をわきまえた娘に成長するだろう。リズムが内容に即して良い。

満州さんのやさしさは本社句会や川柳大会の録音テープを作成して下さることで、後々迄残る川柳塔声のミュージアムとなっている。

スポーツもモデルもこなす車椅子

木村貴代子

車椅子の性能の良くなったのと、身障者への社会の理解が行き届いてきたのとで、今やサッカーやバスケットをはじめスポーツにも、フットボールに関わる華麗なモデル界にも、身障者が進出するようになった。この社会性川柳は、文学でのバリアフリーだ。

出陣のねぶたの如く行く砂丘

櫻庭 順風

弘前のねぶたは出陣の高揚、青森のねぶたは凱旋の歓喜であるという。

四月の梨花の吟行会に青森県から十名の仲間をお迎えしたが、まるでねぶたの威勢に通じた快挙だった。その先頭に立たれていたのが順風氏で、風格あるお人柄は鳥取の風にも馴染んだ。砂丘を見はるかす海辺での一行はまさにこの句のように、ねぶたの太鼓、笛の音までが聞こえるたたずまいであった。

自選集

木村あきら

斉藤 効

カアさんの井戸は尽きない水が湧く
四面楚歌 迷路に母の鈴がある
卒寿まで虫が良すぎる不養生
ワラ一本掴み損ねている不覚
一粒の米の重みを噛みしめる

工藤 吟笑

土橋 螢

一人住む老母を気遣う夕茜
限らない哀愁そつと目を押さえ
鬼退治 宝を積んだ船帰る
看護婦の胸見ている間に済む注射
ジャンボクジ逃がして春は程遠い

堀 端三男

藤村 女

こだわりを捨てたら視野がパツと開け
形勢不利ほんとの味方見えて来る
五月晴れプラス思考で生きていこ
平均寿命生きたら天寿全うか
ネクタイは黒一本で足る余生

チェーンソーに小鳥の声が届かない
年輪の歪み苦楽を物語る
今朝もまた宝探しに行く花野
どうみても父はやっぱり牛に似る
山笑うりんごの花を見て笑う
紫の視野に聞こえる子守唄
野の草を踏んで我が身の脆さかな
びっくりしたら幸福が落ちていた
煙草を二本喫うために散歩する
足音をたてないように去ってゆく
星ひとつ流れていとしい人思う
星空を仰いで明日を信じきり
ふるさとの氏神祭の寄附が来る
お揃いのハッピー祭の灯に浮かれ
降り出した雨にまばたく祭の灯

田 辺 灸・六

均等法子供少なくなるばかり
花も葉も萌え老残に活をくれ
哀しみの忘れ葉は孫が持つ
褒賞は毎日もらう妻の酌
納骨も終えて茶漬けの輪に入る

宮 口 笛 生

気晴らしの種の一つに酒がある
水やりの日課乾燥注意報
金魚鉢の金魚元氣になった初夏
限りある命贅沢して暮らし
楽しみはすすく育つ夏野菜

波 多 野 五 楽 庵

津軽賛歌リングの花が咲きました
煩惱の数だけ咲いた彼岸花
狂い咲く椿不幸を受けとめる
臨終をじっと見つめるバラの花
輪廻転生花咲きぬるも散りぬるも

遠 山 可 住

たわいないことやがうれし子ら帰る
素人の無様を釘に笑われる
たばこやめたらと憎つくい孫になり
スーパーで旬の野菜を探して
いい夢の種を枕に敷いて寝る

川 島 諷 云 児

人生の無策へ光陰駆け抜ける
解脱まだ出来ないままに早傘寿
時には軽く時には重くなる絆
図書館で緩んだネジを締め直す
両方に我慢袋が要る同居

野 田 素 身 郎

勇ましい言葉ばかりじゃない軍歌
杖ついてや々と歩ける十メートル
二人目の孫は男だ鯉幟
圧勝へ支持者いささかひょうし抜け
十七歳当時の僕は予科練生

舟 木 与 根 一

所有権 主張している葱坊主
横車 尚むずかしい後退り
三度目は仏もただの太鼓腹
ゴールデンウィークテポドン世話ないか
保険屋が命を高く買いつぎる

芳 地 狸 村

いよやかの郷を煙らす春の雨
どの顔も湯の香に酔っている句会
せせらぎの音にところが温かい
つるつるの肌が魅力の風呂あがり
きらきらと若葉が光る大威徳寺

石川侃流洞

広く浅くどれも底抜け趣味ばかり
ソファ―に沈んで妻の長電話
弔問へ男はみんな口が下手
六五歳から老人だとさ気に喰わぬ
極楽行きの関所地獄の釜が待ち

藤井明朗

老いの楽しみ街の温泉で作句練る
花の道友の笑顔と今日も会う
週末は山の温泉 長生きへ感謝
台風の子報へ避難くりかえし
当選の活気は負けぬ総選挙

榎本吐来

七十歳 亡父亡母偲ぶ日の頻り
算盤を弾いて余生ひた生きる
通帳の動きに夢を託してる
保証人の筆がはためく子の門出
時の移りをこまめに映す街鳥

西村早苗

風鈴はいい音短冊替えてから
七夕も雨で流れた子のやんちゃ
思い出のまんまとんでる毛タンポポ
指先のない手袋で花の首
夏蛸おいでよお話ししましょうよ

小林由多香

ほどほどの疲れ三時の茶がうまい
もどらない景気老舗もゆさぶられ
絡みつくものを探してつる伸びる
骨拾う悲しい竹の長い箸
肩の荷がおりて白髪が目立ちだす

阿萬萬的

オイアレでわかる空気のような妻
まあまあの籤運だろう僕の妻
定年後は妻の強引さに押され
八十路まだプラス思考の夢を持つ
川柳にガードを頼むボケ防止

八木千代

長椅子のあるじが消えたテレビの前
林荒介さんを悼んで
朦朧としながら動く旅支度
浄土への道中を拭くアルコール
地平線柳誌ひとつを携えて
五月十日その朝露地に咲いた花

西田柳宏子

人工孵化親は人間だと信じ
高級は料金だけのアホらしさ
大型化一〇〇エンシヨッフ花盛り
先取りの飴の甘さに鞭忘れ
母の味まだまだ真似て真似られず

田口虹汀

ボートから客を奪ったパチンコ屋

唐津城水野 大久保 小笠原

前進はせずに議員の粗探し

無駄口は言うな国会議員なら

卒寿ともなれば憎まれ口を言う

金井文秋

冬眠から脳細胞がまだ覚めぬ

知恵袋つづくりながら趣味に生き

聞こえてる顔で難聴聞いている

都会では活気の見えぬ星ばかり

やりくりの予算で守る妻の城

恒松町紅

老碌という言い訳を使いだす

腑甲斐ない話戻って来た釣り書

体格がいいから似合う男帯

意気投合歳を忘れて夜が更ける

座ったら牡丹和服の身のこなし

野村太茂津

卯の花の香る恋したことがある

脆く崩れる愛をうすうす知っている

荒れよ乱れよマスコミの太鼓鳴る

慕われて温い返信愛を盛る

手薬煉の甲斐大輪の花開く

越智一水

永らえて春の光を手へのせる

あわてないそれが薬のようにきき

子と孫を送りさんさん春の日よ

争いか恋か蝶々天へ舞い

留守だろか矢車だけが回つとり

黒川紫香

さよならの言葉に悔いが残る見舞(関氏死去)

周囲にはもう年上が居ぬ怖さ

有馬帰りのバスで乗っ取り犯を聞く

万歩計買うて千歩でくたびれる

葉桜に若さを貰うステッキよ

月原宵明

喋りたくタバコ吸いたく喫茶店

鍬の柄の艶に律義を見せる父

絨毯をつつじが敷いた五月晴れ

朝刊を素顔急いで取りに出る

裏をゆく男仮面を幾つ持つ

正本水客

春がすみのなかへ入りたいとも思う

底力みていてくれと汽車にのる

泣きながらほんとのことを言うている

おにぎりの味にうそなどはない

目をとじてみたまえ自分がみえてくる

二 宗 吟 平

弘 津 柳 慶

一本の桜へ車山の列

花見酒一つ覚えの歌を出し

吟詠会合うたマイクに若返り

杖ついていても人並み選挙権

春うらら富士山となる町の山

小 西 雄 々

春のメロディー聞こえて蛙目をさます

病名を伏して花瓶に赤いバラ

鼻欠けた地藏見てきたブーメラ

たて髪が靡く桜土手を行く

手さぐりで妥協の手綱たぐり寄せ

高 杉 鬼 遊

大山の雄つれ去りぬ春あらし(悼 林荒介)

生き急ぐこともなければ青信号

ご先祖と相談をする日取り

難しい理屈はいらぬ馬鹿になる

先生と呼ばれみんなが振り返り

両 川 洋 々

やがて消える虹を信じていたのかい

今日と明日つなぐドラマに酒がある

是々非々の胸に陽気な鬼を飼う

泥舟に僕の余生が積み切れぬ

笛吹けば踊る味方と信じよう

老人会懐かしの歌が次々と
旅に出て本場の味をしみじみと
妻が目で私の発言制せられ
青年が又々刃物で人をさし
そろそろと身辺の整理しておこ

板 尾 岳 人

悲しゆうて伯耆大山雲の中(故 林荒介氏)

戦争が終わったらしい蟬の声

戦争に征ったことがあります

さざれ石 巖となりて神の国

日の丸がとっても似合う夏の空

河 内 天 笑

相談をしたら勇気が萎えてくる

空っぽのわが家へただ今と帰り

恥かいて覚えた技を身につける

按摩機で猫がいびきをかいている

円満の秘訣は同じくらい阿呆

橘 高 薫 風

歩けなくなった入院しかないか

入院をした老人の老花ぶり

四十日ぶりに書棚の本の前(退院)

いっしんに昨日を明日にした男(悼 林荒介兄)

見限ったのは君この世かこの僕か

川柳太平記

(266)

川柳の群像

大野 武 太

東 野 大 八

「軍隊を挟んで南海電車に昭和27年まで勤めたが、多年のサラリーマン生活もしおどきとみて、大阪の十三の塗料店を営む長兄に弟子入りしてその商売のイロハを会得し、ノレン分けて現住所の淀川区加島で独立しての塗料店を開業した。

性来の明るい性格と商売熱心さでお店は繁昌したもの、好事魔多しで働き過ぎが昂じて体調をくずし、古稀になる老齢もあり、息子さんに店を譲って、脱サラ生活にどうやら終止符を打った。

元来腰が低くて、川柳の作句を思いつき、川柳わかやまへ入会の際も『へえ、まいど』という明るい顔でのご挨拶だったので、みんなを明るく笑わせた。

ギターが得意で、よく演歌流しもやって来場者を楽しました。「息子に店を譲ったのな

ら、万事口出し無用でやることだ」と私は余計なことまで口にしたものだが、つきあいは軍隊なみなどのところから、いい弟分が出来たと喜んでいた矢先の不幸に、正直いつてガツクリしたものだ。私から見ればはるかに歳下だし、残念至極のホゾをかんだものだが、あの日あの時の彼の姿が臉から消えないでいる懐かしい男だった」（野村太茂津筆者宛書簡）

「手のとどく次の世代に夢がある 武太
川柳塔誌上でのこの句に出会ってまだどれほどの時間も過ぎていないのに、大事なクラス仲間を失い、そのことをクラスの一人からきいてがっくりと気を落しました。連休初日の雨のドシャ降りの五月三日の憲法記念日のことであります。

几帳面で腰が低く、それでいて自分のお仕

事に誇りを持っていられたので、クラス会でも句会でも随分皆様に愛された方でした。

お家でもとても大切にされて、亡くなられる寸前まで川柳塔への投句を続けていられた。投函はいつも御長男の一朗さまのお役目だったが、一寸ワンマン振りの武太さんの一面が覗かれて嬉しくなりました。

ギター弾く木村好夫のポーズとる

ワタシにも弾けます妻もギターとる

などはほえましいお作の多い方でした。

川柳へ参加されたのはクラス会でお誘いして誌友になられ、56年1月に川柳塔わかやま吟社の同人になられ、太茂津主幹から一字頂いて武太と号されてからは、骨身惜しみますミ二句集を作って配布されたり、大会の合唱用にと「川柳わかやまの唄」を作詩作曲して主幹を感激させたものでした」（「川柳塔」・福本英子悼文）

本名・大野武男・大正12年2月11日和歌山市谷町生れ。円満院釈行徳・享年73。

「川柳わかやまの唄」は「海響」という演題で歌詞はつぎの通り。

一、青い潮に果てしなく

春を育てて幾年月を

川柳わかやま欲びの

浪がひろがる全国へ

二、花も二十歳に咲き誇り

熱い情けの輪がひろがって

みんなくなるる和歌山へ

心ひとつにとけていく

三、明日をみつめて天と地を

結ばば愛がこだまして

川柳わかやま なお炎えて

海の蒼さにつつまれる

以上の歌詞は音譜つきで、本州最南端の潮岬燈台のリアルなカットがついているシャレたものだ。松原寿子（川柳塔わかやま吟社同人）との合作だとも言われているが、ギターに乗ればまことに爽やかな曲である。

親も子も脱サラ小さな塗装店

体臭となった家業を指図する

老骨を鞭打ついまも手放さず

子に残すローンもあると銀行屋

還暦の妻がゆくりついでくる

大正の宿命やつとクサリとれ

以上が武太さんの身辺雑記の句である。

大正12年2月11日の紀元節の日に和歌山市

谷町で生れた生粋の大正っ子である。

いわゆる大正デモクラシーの時代で、軍国

軍閥時代の昭和世代を後に控えた、一種の動乱台頭期の世相であった。われら大正生れの連中がいわばコテンコテンにあしらわれた、

その同情すべき世代の生れであった訳だ。

詳しくいうと、日本における民主主義をか

えりみれば一八八〇年前期を頂点とする「自由民権」と、一九二〇年代にいたる「大正デモクラシー」すなわち民本時代が第二次大戦

前の大きなヤマを作り上げていった次第だ。

大正時代は、藩閥政治から尾を曳いた政党

テロリズムの政治騒動史に明けくた。それ

故に軍閥が誕生していくのだが、他面民間で

は、らいち・ようの青緒社が生れ、築地小劇場

がもてはやされ、その地面を這って、いわゆる

アカと称される労働運動が根を生やし、女

工や女郎たちの哀史がそれらをはかなく点綴

してゆくのである。

日清・日露の両戦役の勝利によって培われ

た軍閥誕生の前夜は、苛酷な兵役鍛練が、や

がて来るべき中国侵略への砲火をはらんで無

気味に天地を掩っていくのである。

東南アジア各地の戦場を苛烈な体験で彷徨

した野村太茂津は、法岸寺竜太なる筆名で、

『点滴』の大冊を刊行した際

次の世紀も人間であれ同胞よ

の一句を巻頭に記しているが、その体験な

り、体臭を大野武太は川柳作句の中でいち早

く嗅ぎとろうとして、太茂津にあやかる「太

の字を川柳道場で獲得している。大正12年生

れの、大正デモクラシーの血がどうやらそっ

させてしまったらしい。いわんや彼は、この

先輩と同じ軍服を纏って苛烈な戦場の風を体

験している人間だからである。彼はその作句

で「大正生れのクサリ」と自嘲もしているこ

とでわかる。

何を隠そう筆者も大正3年生れで、よく三

八銃の手入れをしなが

「大正生れはよくよくの悪運で、その死に

目は土埃の戦場でトンコロの屍を晒すしか

ないんだ」

とよくボヤいたものである。川柳塔わかやま

吟社の主幹も務めた野村太茂津とは一ちが

いの兄さんである。彼が中国や東南アジア各

地でひどい死に目に遭つてのたうち回ってい

る時もこちらは血まみれの隻手の身を敵トー

チカの業火にさらしている時と符合していた

のである。ああ：戦場！とつめく身だ。

大野武太は、それにひきかえ一商家の経営

者として天寿を全うしていった。倅せな人間

とも感じぬでもない。平成9年5月3日死去。

蛸壺のような穴掘る日曜日

子が継いでベイントショップと書替える

ゴム印をかるう昭和を消してゆく

〃

武太

▼次号は「伊藤 定子」

誹風柳多留二四篇研究

19

橋本秀信・粕谷長生

山田昭夫・伊吹和男

大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤要人

135 貧乏をかくさぬ男源左衛門

橋本 謡曲『鉢木』の句。「この上ハ何をか

つゝみ候べき、これこそ佐野源左衛門の尉常世がなれる果てにて候。(中略) かやうにおちぶれては候へども、御覧候へ」と、最明寺入道時頼に名乗る詩句に拠つたもの。

ばろを着て源左エ門のじやうといひ、

明八智 4

人なればとふに出て行きの、馬 一二15

源左エ門サテひんなりとした男 五四32

清・佐藤 賛。

136 あな有やなしやの身でも恋哥よみ

橋本 六歌仙の一人で、絶世の美女とされた

小野小町には、あるべきところに穴がなかつたという俗説は有名。それに、これも同じ六歌仙の美男在原業平(とされる)『伊勢物語』の歌、「名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は在りやなしやと」を文句取した句。肝腎なことは不可能なくせに、恋歌をまよやく詠むものだという句意。小町に業平をからめたのがミソか。

哥で見りやけつしてあなはあるとみへ
穴もないくせに小町は恋哥也
気の知れぬ物は小町の恋哥也

末二16

末二9

一〇五9

清・佐藤 賛。

137 あんちんハ因果な所コへかくされる

橋本 能や浄瑠璃その他芸能で人口に膾炙した、道成寺説話の句。

清姫に追つかかれた安珍は、道成寺の僧によつて、下ろした釣り鐘の中に隠れたが、執念の蛇体となつた清姫のために焼き殺される。よりによつて自力では抜け出せぬ鐘の中に隠れたのは因果なことだという句意。

ソレそこへ来たと釣り鐘おつかふせ

明三梅 4

あのかねへかくしたろうとじやすいなり

安四亀 2

つりかねをくし巻にするをそろしさ

拾二12

清・佐藤 賛。

138 母親に舞をまハせる雪のあさ

橋本 「舞を舞う」という成語を辞書などで調べたが、管見では見つからなかった。そこで、類句の例から、「てんでこ舞い」(極めて多忙で、休む間もなく立ち働くさま、また、あわてふためくさまへ「江戸語の辞典」)と同義の語と考へる。

雪の朝は一般句もあるが、句例では吉原の「居続け」と「朝帰り」の句が多い。この句も参考句にあるような朝帰りの情景と解し

た。雪の日の朝、帰ってきたどら息子を、待ち構えている父親に對しいろいろと苦勞してかばってやる母の姿である。

すり鉢に舞をまわせるいくぢなし 三五

すつぽんをりやうれは母は舞をまい 初八

雪の朝母みのに成り笠になり 明六天一

雪の朝母名代にしかられる 明六義一

雪の朝親父火箸をしやにかまへ 傍三二

清・佐藤 贊。

139 頼政ハ鍬の五器までひろひこみ

橋本 「鍬の五器」について、五器（御器）

には、食物を盛るための蓋つきの器。碗の意

味（『日国』）があるが、『江戸語の辞典』

に「鍬の御器」に「どんぐりのかさ」とあり、

主題句を載せ、「椎の実」とある。また『史

伝』には「椎の実の笠」と注があった。『物

類称呼』には、「どんぐり」の項に、「又ど

んぐりの帯を江戸にてよめのごきといふ」と

ある。カサといふヘタというのは、椎や檜の

実のような堅果の下についている碗状の殻斗

を指し、それが語源となつたものだろう。

ということ、句意は、源頼政が「のぼる

べきたよりなき身は木のもとに椎を拾ひて世

を渡るかな」の和歌を詠んで、四位から三位

に昇進した故事（『源平盛衰記』）を指して

いる。

ひんのよい世渡り椎の実を拾ひ 二七三

ひろい物とは頼政が官位也 玉四

椎の哥から這上る源三位 一六二三〇

首尾よく行と源一位となるところ 安九義四

清・佐藤 贊。

140 たみのかまどをうるをした御ほうらつ

橋本 民の竈は、仁徳天皇の御製とされる

「高き屋に登りて見ればけぶり立つ民の竈は

にぎはひにけり」（『新古今集』巻七賀）の文

句取。竈を潤すは暮らしが豊になる。放埒は、

②酒色に耽ること。放蕩。遊蕩（『日国』）。

御がつくので、身分の高い人の行動を意味し、

この場合は大名の行動を指す。

「御放埒」の句は、『柳多留』に24句。う

ち姫路榊原侯一、素麦鳴尊一のほかは、尾張

宗春と並べた1句があるのみで（例句参照）、

すべて仙台高尾の伊達綱宗である。そこで、

綱宗が伽羅の下駄を豆腐屋へ与えたので豆腐

屋は裕福になつただろうとの想像句と解す

る。

しかし後世の感覚では、吉宗の緊縮政策に

反抗して解放政策をとり、「自由奔放を好み、遊所や芝居小屋を開き、商工業を振興、名古屋を大都市へ成長せしめた」（『国史大辞典』）といわれる徳川宗春こそびつたりだと思ふのだが、やはり無理か。

通ひ車とつきなかつ御放埒 一〇三八

妻こめぬうちハ尊も御放埒 二二一乙六

御ほうらつ春ハべつかう秋ハ伽羅 三六三

民の竈を匂ハせる御放埒 一〇二三五

山田 贊。「かまど」は豆を煮る「かまど」

で、文句取の句ですから、「民のかまど」と

表現したのでしようが、句意としては礎稿後

説が面白い。

佐藤 綱宗でしょう。賛。

141 二度目に八月も親にもすこく成

橋本 後の月（九月十三日）にも登樓した放

蕩息子。八月十五日の名月は気候もよく、ま

だ暖かい感じであつたが、九月（旧暦）とも

なれば、晩秋で肌寒く、月も冴えわたって、

より寂寥を感じさせる。と同時に親父殿の態

度も一段と厳しくなつてきた。この両者を

「凄い」と表現した。先は座敷半の運命か。

親父の目夕部の月にことならず 六五八

清・佐藤 贊。

秀句鑑賞

同人吟 仁部四郎

— 6月号から —

厚底も輪になっている花の下

徳山 みつこ

「川柳塔」には毎回一八〇〇をこえる句がある。そのうちから秀句鑑賞で触れることのできる句は二〇句に及ばない。この欄の担当は二回めだが、ひととおり句を拝見して、改めて緊張するものがあつた。

地方紙の読者文芸で初めて句が活字になったのは昭和五四年で、それ以来二〇年以上も川柳と相對している。作風とでも言うべきものが自分にあるのか、また最近混迷を続けている。「諷刺と笑い」ですと、公民館などの講座で話を書くことはあるが、基準を設けて選句し、鑑賞文を書くのは重い仕事である。句の作者の意に添わぬことはかり書くことになるが、御勘弁をお願いしたい。

腹切りの場面も茶の間お茶と菓子

結城 君子

切腹してもらいたい、例えば政治家はいっぱいいる。なぜあの立場の人かと思う切腹が今日もテレビに映る。晩酌をしながらその画面を批評している。私もその一人。

戦後は町村合併で八万という街にも、『厚底・ガングロ』も珍しくない。文明はあまねく急速に及ぶのだが、彼女らも、家族と花見をしたいと思っっているはずと私は思いたい。弥生から卯月つるりとした素顔

春城 年代

「つるり」という表現をこういうふうに使われると、一撃の強さに白旗を上げることになる。ただただ感心するばかりである。

季節の移りは無情なものであると思つぱかりである。

父の名を水子地蔵の風車

宮野 みつ江

水子地蔵に当事者として全く関係がない人は存外少ないのではないか。当事者の一人であることを公言する人はなお少ない。

この句、「父の名」は作者が女性だからなのか、それともこれまでの日本社会における男の責任を免くものか。

信用を買わされている紳士録

三宅 保州

私も、二度三度と買わされた。定年退職してからは売りに来ない。信用されている証明と思うから買うのだろうが、あつさり言えは虚栄である。世の中つきあひも大事だし、地元の文化連盟の松浦文連報の名刺広告も二度に一度は誘われている。

電話では信じられない靴を履く

福士 慕情

中七の「信じられない」が中高年の男の心情を掬ってくれる。テレビ電話の時代になつても靴を履くにちがいない。

とても切実な絆とでも言うべきものが切れかけているとすれば……

向こう三軒花で会話が始まった

増田 紗弓

私が住んでいる団地は、県の公社の分譲で三〇年で一〇〇世帯ほどにふくらんだ。

財力の程度はほぼ同じで出発したが、全面改築のところもある。付かず離れずのおつきあいが、いつしかモットーになっているが、この句の情景がないというものでもない。家族のことで情報を交換することもないわけではない。花の話はだれも拒否しないし、家族まで話が伸びなくてもいいことである。

席順がひとつ上がつて標準語

高田 博泉

私が四〇年近く棲息していた高校教員の社会は、階級が少なかった。それでも、やはり勤め人の社会だから席順は大事であった。宴会の際が特に大事である。細心の注意が言葉遣いに必要である。

作者はどのような「席順」を経験したのだろうか。思わず微笑を誘う句である。

死亡欄今日は天寿の人ばかり

栗林 光夫

定年後一〇年を経ずに死ぬ人が意外に多いそうである。私のかつての同僚には、二、三年という人がかなりいる。

三〇歳代、四〇歳代で死んで、喪主が、父や母という例が案外死亡欄で目につく。事情を詮索すべきことではないが、悲しい。

美人いろいろ妻はトクベツな美人

宮崎 シマ子

まさにそのとおり。全く異議なし。
逆あがり三回みせて塾へ行く

嵯峨根 保子

「三回」とは大サービスでもあるし、自信を見せたところ。大方の子はこの句のとおりであろうが、コースが狂うかという心配は親にはいつまでもある。

男対男つまらぬ話する

川上 大輪

一七歳と言えば、高校二年生から三年生だが、「つまらぬ話」をしているだろうか。天下国家を論ずるような話はともかく、文学や哲学は彼等にとって全く「つまらぬ話」であるだろうか。

大人の男にとっては、地位や名誉や富の話が「つまる話」だろうか。

「つまる話」の例を作者に訊ねてみたい。

背中をゾクリとなでられた句。

わるく言えばモナリザの顔小賢しい

光井 玲子

わるく言わなくても、そのとおり。

この句を読んで、改めて画集を開いてみて作者の眼に感心した。絶対的信仰を捧げている対象の一つに、モナリザがあったということだが、ものを見る角度は難しい。

熨斗袋均等割りの進学期

山門 幸夫

「均等割り」という言葉は、なかなか厄介な意味がある。住民税、町内会等の負担金等々と考えると面倒になる。

この句は、そこらあたりは承知のうえで活用した。配る相手が多いという嬉しさを秘めてのことである。

反抗期閉じた心で逃げ回り

鶴田 遠野

やや単調と評される句かとも思う。

ところが、反抗期の年齢の区分が、例えば常用の国語辞典では、「児童の……」とあり、「児童」は学校用語では小学生を指すことを思うと、句を読み直すことになる。六〇歳だって反抗期かもしれない時代である。

作者の発想を超えて問題を提起した句かとも思われる。

卒業生口尖らせる肖像画

太田 幸枝

青雲の志、と言えば古い表現になるかもしれないが、「口尖らせ」はそのように見たい。不平不満の表現とは見たくないのは、私の感傷であろうか。

自画像であればとさえ思ふ。

○

惚け防止街のと真ん中を歩く

三宅 不朽

お若いと褒めて責任押しつける

清水 潮華

公園で見る先生のババの顔

高島 啓子

日本の危機があふれる投書欄

森井 菁居

水煙抄

河内天笑選

鳥取市 山宮愛恵

ただいまあ花と金魚に迎えられ
音出してひとりの空気動かせる
お世辞かてうれし素直にいただこう
川柳をつかみどっこい起き上る
片足でとんでみせてる跳ねている

高知県 桑名孝雄

ガーガーと農政論をぶつ蛙
湯豆腐が奴に代る夏の陣
ワープロであらあかしことは書けぬ
一弦琴テレビも妻と同じ曲
凶悪犯また人権という砦

札幌市 三浦強一

割箸の袋も旅のコレクション
檜山にペアで買っとく指定席
米びつに幸せがある戦中派
血管に溜まる産業廃棄物
財産はないが臓器は元気です

堺市 和田つづや

還暦は未だ遊びたい歳であり
雨の日は雨愛おしむ歳となる
コロコロと鍋にお多福豆を剥く
寒暖を問わず渋茶が好きになり
賽銭をはずむ程には信じない

鳥取県 山下節子

裏方で出世もないが無理もせず
ストレスが内臓までも支配する
この噂根も葉もないが面白い
満開の花けむたかろバーベキュー
春色にイメージチェンジ身が軽い

東大阪市 田中美弥子

後悔が阿呆な私を眠らせぬ
折紙の騙し船より下手な嘘
許してはいるが忘れていない嘘
嘘ひとつ許して深くなる絆
転覆を子等が支えた夫婦船

吹田市 穴吹尚士

大阪市 中澤伽羅

六十の冷や水と知るジャズダンス

ご好意の裏をすぐ読む悪い癖

職安の辺りは低く雲が垂れ

キリストも大安の日は忙しい

車椅子一人で出掛けられぬ街

富田林市 中井アキ

逢いにゆく靴も帽子も赤にする

筋目にはしつかり釘を打っておく

古里がふくらんでくる藤あやめ

ひかえめなネクタイが持つ自尊心

カーテンを閉めて噂をやり過ごす

横浜 北沢街湖

兎小屋からお出掛けのルイビトン

懲りもせずパンフレットに乗せられる

ナイーブな心に刺さる売り言葉

デジタル化書棚で眠る広辞苑

考えてみよう少年法のこと

倉吉市 猪川由美子

フリージア活けてシャネルの代りさせ

コウノトリ機嫌直して御所へ飛べ

愛溜めてハートにカビが生えてきた

後手後手の警察ミスに馴れてきた

多臓器移植 魂の数足りません

花たと咲かせ暮らしに張りが出る

のりのいいお方とすぐにお友達

おしゃべりをしていらいらは溜めません

筈はすぎ豆ごはん炊いている

読めるけど書けない漢字ばかり増え

鳥取市 有沢せつ子

味噌汁の匂い平和な朝がある

三世代同居を友にうらやまれ

穫れたての苺頂きたいご縁

歩くのが一番いいという薬

近所では三猿とおし丸く住む

富田林市 大橋鐘造

嘘を言う時の手の位置定まらず

この川も昔は桃が流れてた

誘われて見たいと思う朧月

嘘と欲一杯盛った白い皿

ブライドが邪魔して輪から外される

大阪府 澤田和重

靴下の穴が貧乏臭くする

間違えた読経に誰も気づかない

一笑に付した噂が気にかかり

水臭いなどと本音を探られる

知った顔見つけて酒の量が増え

衣替えマネキン腕を外される
二世帯同居ストレス捨てに出かけます
十聞いて一か二しか覚えな
冗談と言いつつ刺のある言葉
春雨に片袖濡れてみたくなり

八尾市 中島春江

率直な悪魔の声が心地よい
ばたばたと動けた時が花でした
システムキッチン磨き上手の料理下手
控え目にしているつもりの子の自慢
食欲にストレスためる血糖値

八尾市 山本宏至

突風に鳥かと思うゴミが舞う
詰め過ぎた脳から記憶漏れている
窓際よりも座り心地のよい酒場
点滴のリズム雨漏り思い出す
ノイローゼ病氣探して医者はいしご

八尾市 奥田明

大笑いしてお薬を飲み忘れ
ワレモノと書かれて届く夫婦碗
老夫婦リュックサックを二つ買い
不景気に暮しの無駄が透けてくる
雨宿りのはずのボトルを空にする

八尾市 田中トシエ

ミニスカート太股隠せ乳出すな
歩くのよ太った貴女細くなる
戦争の長い道草まだ癒えず
吹きおろしたらふく吸って鯉のぼり
ノックさん一直線に谷底へ

八尾市 高橋明子

のど仏あたりで止まる物忘れ
傷のある小指他人に伏せておく
道端のペンペン草は嘆かない
追伸に軽いジョークを忘れない
振り向かぬ意地をくすぐる向い風

大阪市 一本勇太

言葉とはちがう心が顔に出る
少子化へベットみたいに子を育て
被害者を裸にさせるマスメディア
反り合わぬ靴に太もも身が入る
下手な字が妙に生きてる絵の手紙

大阪市 大川道子

八十路来てまだ懐かしい亡母の背
戦前派山ほど物を貯める癖
へえおおきに お蔭さんでとええ言葉
どうしても嘘はつけない喉仏
ギターならフリオの好きなお婆ちゃん

大阪市 亀井円女

大阪市 中村忠敬

妻が留守名物女將の店へ行こ
休肝日年に二三度実行す

漫才師賞を貰つて泣いている

心地よい眠りを誘う深夜便

青シートあまりの多さに胸痛む

堺市 梶本哲平

悔いのない人生なんてあるもんか

しくじりのあとわれなりの理屈つけ

いちにちのうちに悔いのふたつみつ

宝山寺まいとし坂がきつうなり

五萬圓奉納石碑苔がむし

堺市 村上玄也

自販機に汚れた札を戻される

卒業をして取り敢えずフリーター

変り身の早い仲間に先越され

汗をかきメガネ曇らせうどん食う

本当の事だと念を押した嘘

堺市 喜多美波

お抹茶で一休みする緋毛氈

検査値がまん中並ぶ安堵感

パソコンに食わず嫌いの意地を張り

新緑の葉っぱの艶に見惚れてる

桜にも世継ぎが育つクローン化

羽曳野市 永田章司

明日香野に古代の匠よみがえる

風向きで居場所を変える風見鶏

逆風に存在感を際立たせ

初孫に団地に無理な鯉のぼり

カープ首位五月の空に鯉が舞う

羽曳野市 山本たけし

母を捨て古里も捨てホームレス

二度三度繰り返し読む父の遺書

マンションの寸土に可憐クロッカス

犬掻きで乱世渡つて来た親父

主治医には内緒で含む花見酒

河内長野市 大西文次

これからは余生寝ようと起きようと

お布施代けちった酒に悪酔いし

お金などなくても笑顔なら出来る

習い初めの手話で楽しい待合せ

割り切れれば後はどうにかなる話

河内長野市 杉谷カズエ

披露宴お色直しの紅い傘

パン皿をくれるシールの点を貼り

生活に遠い陶器にあこがれる

曾孫来て泣いてる寝てる食べている

ロボットにされて長男が良い

岸和田市 不破 仁 緑

開いても散つても一句欲しくなる
雑草を抜けば花芽が顔を見せ
鉛筆は削れないのに他人は刺す
トラ連敗やっぱり珍事だったかな
リストラの風にしょんぼり鯉のぼり

岸和田市 村垣 鹿太郎

立読みの続き明日も本屋さん
この元氣高齢者とは言わないで
非力だが少しの援助できる幸
夏めいて医者も白衣の袖まくり
アルバムに大正ロマン笑つてる

大阪狭山市 矢野 梓

参考に失敗談も聞いておく
ご無沙汰を詫びて選挙を言つてくる
タイガース勝つて寝息も軽くなり
娘のえくぼ疲れのみえる金曜日
油物避けてあつさり冷や奴

寝屋川市 井上 すみれ

新聞の声の欄から見る世間
寄せ植えの互いに愛でて競いあい
花いっぱい人イッパイの連休日
衣替えみどりとなつて山静か
天寿あなたはエライハイセイコー

東大阪市 今岡 貞人

靴下の穴に気付いたのは他人
湯が溢れ心があふれ歌あふれ
三山を眠くさせてる春かすみ
たくさんの方情を着て冬を越す
言い負けた背中に寺の鐘が鳴る

富田林市 中崎 深雪

ありがとうばかり言う母やるせない
同窓会初恋の人そつと見る
老いたけど物欲だけはいつまでも
新緑みて料理のヒントもらつてる
歩いていると心の霧が晴れてゆき

和泉市 横山 捷也

定年の余暇に懐追いつかぬ
丁寧語夫に本音見透かされ
眉上げて入園式で誓う子等
紅引いてみても変身出来ぬ妻
公園に座席指定のイスがある

泉佐野市 稲葉 洋

名を名乗れ無言電話の無札者
一合の酒で自失をした不覚
自問する介護保険証手にした夜
何言うか病んでは居れぬ老いひとり
新世紀よりも当座の耐暑法

豊中市 江見 清

おごるのに注文俺より高いもの

次の日にふっと笑えるいい話

傾いた会社にも恩辞められぬ

つまらない話抜け出す酔ったふり

お茶漬をかけこみ今日をしめくくる

三重県 尾崎 勤

挨拶にくすぐり入れる如才なさ

良妻と評判になる光る靴

宴会がダブリ困っている笑顔

駅弁を土産に日帰りの仕事

耳ピアスしてこだわりは自然食

和歌山市 吉村 さち子

若い氣でいるのに脳は味方せず

重い荷へ優しい嫁の手がのびる

特売の列にブライド捨てた顔

悩みごと聞くコーヒーの店で会う

寝たきりにさせぬ鬼にもなってみる

和歌山市 武本 碧

煩惱の数だけ重い日々の足

春財布忘れず入れる五円玉

神様のいたずら赤い糸縫れ

あつさりとおんぶに抱っこされようか

母逝ってふる里の星遠くなる

和歌山県 坂東 和代

幅広にうつる鏡よ試着室

作品展 額と落款立派すぎ

みみずまで輸入をするという時代

猛犬と書かれてポチは顔かしげ

記念写真 杖を後にハイチーズ

和歌山県 森下 順子

凶悪事件の実況放送夜明けまで

リストラもどこふく風と公務員

みかん畑を蕨畑にしてしまう

百円シヨップママも子供も生きいきと

週刊誌は美容院でと決めている

和歌山県 村中 悦男

つい本音出した心にさいなまれ

線香をそなえたくなる無縁墓

美しく老いたく思う敬老会

熱っぽく語る魅力の友に会う

過労死をするかもなどと妻おどし

尼崎市 清水 久美子

夏めいてジベタリアンがたむろする

証明書代りの免許書き替える

ライバルへ回転レシーブして躲す

母の日の母にエステをしてあげる

無口だが人を見る目に長けている

川西市 西内朋月

芸妓はん化粧くずさぬ技を持ち

ドーランの乗らぬ素人エキストラ

ぐうたらな男の方が持てている

男気を出してまたまた怒られる

警察はやはり味方と信じよう

兵庫県 山本泰子

ひとり合点時々のがはずれます

風邪熱に持つて行かれた思考力

深夜便足拍子とる越後獅子

故里は儲かりまっかで日が暮れる

ミスマツチでも童謡が大好きで

伊丹市 檜谷郁子

逝ったとは思えぬ夫の日記帳

日記読み話出来るは幸せか

明日咲く蕾に思い打ちあける

短夜は昨日の疵が未だ癒えぬ

五月雨の憂さを流すか四万十よ

神戸市 船津とみ子

更地の草の緑いとしいなと思う

甘えたらあかんしっかり杖握る

脳こうそくに負けないように食べている

食後は何時も仕合わせやあなむあみだ

生きている朝の目覚めのありがたさ

岡山市 大森純子

電子辞書まず愛の字を出してみる

列島の膿かも知れぬ有珠マグマ

ノックしただけで終ったお茶お花

仏像の絵てがみできた頼みごと

助っ人の誤診が続くタイガース

倉敷市 撰 喜子

船乗りの夫に振るう腕がなる

親友に本音吐いたら目がさめた

月謝払う塾の宿題先にする

昨日まで本屋があつたのに更地

年のわりに若いと言われ有頂天

倉敷市 家守政子

薫風に蝶も私も舞うている

飯の味に惚れて街から嫁が来る

ササゲ蒔くいたちごつこの鳩が食う

電池が切れるまで畑仕事草を引く

竹の子が畑に生えて「こんにちは」

鳥取市 近藤秋星

働きものの燕に今朝も起こされる

余生とは寂しきものよ誰も来ず

似ていない父に飲むとこだけが似る

入浴介助愛しい人に身を任せ

燃え尽きた残骸今の我なりき

鳥取市 福永ひかり

鳥取県 高尾京

見かけとは違う心臓見てしまふ

百点のつもりについた五十点

ほどほどが今を乗り切るキーワード

本心を今は明かせぬもどかしさ

ご無沙汰が続いて遠くなつて行く

鳥取市 山口千代子

上京をする度富士に手を合やす

八幡宮に詣でて仰ぐ大銀杏

横浜の銀杏並木を散歩する

横浜の波止場に赤い靴履いて

健康の二文字拝む老いの日日

鳥取市 録沢風花

過労死にならないようなスケジュール

波立てぬように小舟を遊ばせる

野心などとくに捨てた猫の鈴

雷鳴の轟き神の一喝か

斎場の白さに心また冷える

鳥取県 山岡久枝

豪華より気楽な舟が暮しよい

喜びを伝えるペンがよく動く

日が長くゆっくり昼寝して畑へ

大祭りエブロンはずず暇がない

花開き老いも生き生き弾みつく

荒みゆく人の心にまどわされ

むご過ぎる被害の御魂安かれと

教育も政治も原点見つめたい

鈍痛の足ゆっくりと動かし

鵝無事に育つて虹のかけはしに

鳥取県 澤裕子

土壇場で違う横顔見てしまふ

事勿れ主義で相打ち避けている

自立の芽摘んだ過保護に気がつかず

教訓も生きず重なる医療ミス

夏本番イメージ変える彩を着る

倉吉市 牧野芳光

藁束を隣へ借りに行く離農

銀行の便所昔のままでった

軽トラに乗って神楽がやって来た

湯治場のお国訛りに囲まれる

サウナ風呂我慢くらべになっている

出雲市 佐藤治代

笑う日も泣く日も支え合う両手

白いもの交じって古希へ手が届く

氣遣つてくれる夫へ感謝状

命ある限りを走る一行詩

旅ずきな私の足が重くなる

出雲市 伊藤 玲子

下駄箱の隅で蛇の目は骨董品
また生えた草の勢いには負ける
山椒が匂い献立一つふえ
救急車サイレン程に速度出ず
病院へおしほりが来て朝動く

出雲市 加藤 スズコ

老骨を抱いてステイック振る日和
帰る子の日取り数えて風を入れ
日の丸がゆれて帰省の子の笑顔
出雲さん古代ロマンの夢に沸く
トップ記事大柱根に活気呼ぶ

出雲市 青山 久子

湧いて出たような人出の開店日
いいのです息子は嫁にさしあげる
朝刊が重いチラシをしょってくる
鈍行に乗ってしみじみ見る山河
サングラスかけ約束の花の下

松江市 銭山 昌枝

惜別の黒い涙が止まらない
人並みにカードを持ってオロオロし
太い眉つい信用をしてしまう
過労死の電子レンジを光らせる
電話も無い手紙も来ない子の出世

安来市 原 煩惱児

故郷の山に詩があり歌がある
山菜をたっぷり漬ける過疎の知恵
銘水を沸かし新茶を舌にのせ
菜園の小さな夢を追っている
故郷の山の清水は手で掬い

島根県 武島 ちよえ

カタカナで覚え切れない花の店
日本かと思う茶髪とすれちがい
四角四面通して夫喜寿迎え
満点の人と仲良くしたくない
嬉しい日今日は梅酒に酔っている

島根県 福岡 博利

うれしくて風の向きなど気にならぬ
子報には関係のない僕の風
この柱まだ寄りかかる人が居る
飛びたいが膝がソッポを向いている
しわ少しおさえてファッション派手にする

横浜市 長島 亜希子

渋滞の成田 上海より遠い(中国旅行)
中国の道路横断生命がけ
杉花粉ないが黄砂に悩まされ
楊貴妃も使った水で顔洗う
想い出の茶碗 景德鎮で買う

横浜 平 達 也

待った春テレビで我慢花見です
老後こそせめて明るく朗らかに
意思あれど無念五体はままならず
腰痛が天気教えた今朝の雨
病む人で溢れる病院仲間たち

横浜 伊 藤 ふ み

楽々と四国遍路のバスツアー
母の日に枯れない花のプレゼント
フルムーンそれぞれに持つ旅鞆
タケノコが朝に夕餉に膳に乗る
庭の草むしり冷静取り戻す

横浜 保 田 絹 子

道草を食って処世に長けている
ケイタイにベースメーカー怯えてる
齧られて短くなった父の脛
本題を逸れた講義が面白い
見回してそつと撫でてる泣きどころ

横浜 芦 田 鈴 美

両親を泣かせて宴幕になり
脇役に回り胃袋軽くなる
私のマグマが出口探してる
日めくりの一日ずつに追われてる
咳ばらいして留守電へメッセージ

横浜 巖 田 かず枝

CTというまな板で鯉になる
母の日は手抜き文句を言わせない
検査する度に病気が増えている
神様に試練ばかりを与えられ
更年期ですと片付けられている

横浜 川 島 良 子

正直に生きるわたしの自尊心
寿命だと諦めるしかないいのち
キーボードまるでショパンを弾くように
姉の死を無駄にはしない医療過誤
ローン終え家もわたしも歳をとる

横浜 田 中 笑 子

自分史も時間がたつとぼやけだす
こつくりが出てくる午後の骨休め
一杯のお酒に愚痴が溢れだす
嫁来たら隠居どころか動かされ
おごらない気持ち他人をなごませる

浜松市 岡 本 ま ち

愚痴こぼす蛇口を少し開けておく
破れ鍋にとじ蓋今日も元気です
路わらび到来物の昨日きょう
同窓会間近にひかえ美顔術
ローン終え家も身体も軋みだす

八王子市 井上 京一郎

不謹慎だけど喪服がよく似合う

まあいいさ妻の記憶に妥協する

渋滞の先でどうでもいい工事

振り向いて見るファッションの大胆さ

カワイイとだけしか言えぬ感嘆詞

愛媛県 黒田 茂代

鳴き過ぎて声を失くしたホトトギス

帰る家あるから旅が面白い

わたしはわたしでしかない自然体

電源を切って節約少しだけ

お道よう 好きな言葉で送られる

愛媛県 中居 善信

けたけたと笑う女に気を許す

腕まくりしてる女の瘦せた腕

採算を言えば米など作れない

妬かないで貴方が思う程でなし

てのひらの温み信じたのが不覚

愛媛県 安野 案山子

雑草の粘りへ唸る草刈機

我がままを正当化する茶番劇

常識の尺度が分かりにくくなる

人間の痛みに疎い若い牙

ダンサーがアップテンポになる見せ場

今治市 渡邊 伊津志

純粹な愛は孤独に耐え切れず

教育の柱になっている部活

夢を抱く身に海碧く海広し

海鳴りはロシヤのうめきかも知れぬ

不条理に泳がされてる雑魚の群れ

今治市 野村 清美

自転車を下ミノ倒しに風が去る

いとしくて蕾に迷う花鉢

追伸に思いのままを書きしるす

好きな花水やり過ぎた悔いがある

眠られぬ天井低く話しかけ

香川県 清川 玲子

うち面がよくて家中恙なし

能面の裏側に夜叉飼っている

独り身は自由でいいとやせがまん

あの事件あっても人気あるカレー

あの笑い心からではなさそうだ

香川県 松村 輝夫

長生きの秘訣手綱は妻が持ち

物干にソックスが咲く子沢山

苦勞したほど慶びに味がある

此れ位と見縊る怖い大惨事

酒の量減らし長生き信じ切る

香川 原 賢

背伸びしたツケがまわってくる余生
寂しくて誘惑の糸引いてみる
寝て起きて食べてるだけの蝸牛
不器用な不治の手で割る寒卵
追い風にのってダルマの目を入れる

高知 近 功

孫いで元の二人の長い夜
出発点忘れた夫婦呆け始め
老眼に焼きつくようなミニの膝
切れたねじ妻が巻いたら動きだし
少子化のグラフとなった鯉のぼり

高知 百 幸

寺参り登る砂利道足を噛む
白百合に呼び止められて立ちどまる
正座からあぐらになつてうちとける
雑草も居心地の良い場所で伸び
金婚へ大波小波越えて着き

鳴門 八 芳 水

冬眠の蛇逃げまどう野火のあと
手料理に愛という名の隠し味
童顔の片鱗さがす同期会
役終えて春爛漫に身を委ね
国境を越えて酸性雨の呪縛

宇部 中 田 忠 夫

胡蝶ランよそんなに僕を見ちゃ困る
一日でも長生きしたいから食べる
携帯を猫も杓子も持ち歩き
あの方とコインランドでまた出会い
いい月と褒めてその氣に乗らぬ妻

宇部 高 山 清 子

長電話お茶がいるかと言う夫
福耳と言われてもある悩みごと
悔しさを握りつぶした掌が痛い
老人会花見て咲いた恋の花
同窓会くすぶる火種あおる友

唐津 岩 崎 實

墨を磨る緑の風を部屋に入れ
留守の間にしてお部屋のお掃除
植木市回れば欲しい土地と苗
大方は文具を買ったお小遣い
唐津城展望よりもしれだれ藤

北九 岡 田 幸 生

Uターン職場の恋に背かれる
貧しくも詩が満ちてた子育て期
モナリザに負けない妻のよい笑顔
少しづつ力を抜いて丸くなる
出世する度に息子が遠くなる

大阪市 熊代 藍

還暦の春よ今こそ好奇心
敵陣にのりこむような初出社

一病を持った夫婦のおもいやり
花活ける来る人もない春の日に

大阪市 平井 露芳

一日分の散歩しました通り抜け
漢方薬三つ呑んだら胃がもたれ
ネクタイも背広も要らぬ自由人
三国人成程辞書にのっている

大阪市 三浦 千津子

隙だらけの守りを何故か攻めにくい
満開の桜にポーズ取りにくし
蒔き終えて目印とする種袋
どうしよう温めた言葉花と散る

大阪市 中井 正秀

早朝はF1のよう飛ばしてる
我が人生波乱万丈喜寿近し
空財布無口な我にまた戻る
仏さん寒い暑いはおっしゃらぬ

大阪市 尾崎 黄紅

菜の花の頃の恋です黄色好き
正直な兎の方に賭けてみる
糸切れた風は自由か不自由か
一番よく撮れているのは兵の頃

大阪市 奥村 五月

東大出 人生捨ててホームレス
寸志では立呑みさえも足が出る
ハンバーガー好きな子供で骨がない
カラフルな薬お供に旅カバン

大阪市 中村 叡子

少年よもっと素敵な夢を抱け
鉢植えのお葱三つ葉を重宝し
運動をしない夫をプールまで
伸びなくていいのに老いの爪と髭

大阪市 榎本 舞夢

彼が来る精一ぱいのお洒落して
下寺の町並ロマン詰まってる
狡休みした日は電話よくかかり
新緑にせめて障子を張り替える

堺市 大橋 錦

選ばれてまさかの欄に句を見つけ
チャレンジをする気のない泣き相撲(稚児すもう)
初夏の風お誘い数多身は一つ
五月晴れ網戸を入れて深呼吸

堺市 斎藤 さくら

あいまいに見えても本音突いている
腹の中菩薩と鬼が渦を巻く
川柳でお腹の中をガラス張り
五十路からストレス捨てにカルチャーへ

堺市 田中 紫

ここだけの話に耳が寄ってくる
ばあちゃんが姿見前にムード出し
紫陽花の匂い集めて深呼吸吸
いちご盛る三時に子等は仲直り

吹田市 木村 無 禄

学も無く一芸も無く妻子あり
新郎に落第生は居りません
臍の緒を残して母は黄泉の国
鎮守様いずこにおわす此の団地

吹田市 須磨 活 恵

落ちこばれていろいろ知った人間味
蓋をした欲が鎌首かしげだす
財産はなくとも夢はポケットに
冗談が癪にさわった日は無口

吹田市 木下 敏 子

若葉風薫るひとりの日をめくる
人並に排便できて五月晴れ
恥ずかしいこと福祉課で打ちあける
頼むことないが毎日掌を合わす

高槻市 執行 稲 子

試着室で魔法かけます迷い癖
卒寿なおうつとりさせる八千代舞
リハビリに指の反応見る小筆
人並に坂を下れる足愛し

高槻市 左右田 泰 雄

電話借り十四玉をチョンと置く
几帳面そんなタイプのカードマン
上品な渋さですねと言うお世辞
じいちゃんの名前とられて抱くひ孫

高槻市 西谷 治三郎

長電話金かかるけど安定剤
蛸壺に入ってしまったノックさん
粗大ゴミ毎日ちゃんと三度食う
良かったなあ過去形増える七十路

高槻市 生田 義 一

熟年の夫婦行き交う山参道
披露宴昨日の敵は今日の友
ハイチーズ入園式の晴れ姿
小鳥舞う花のトンネルくぐり抜け

高槻市 乙倉 武 史

少子化の過保護が子供駄目にする
すぐ切れるマグマ抱いてる十七歳
有難いもつたいたい祖母が近く
紙おむつ世話に成りたくない話

八尾市 井尻 民

待つ駅にノーネクタイの五月晴れ
率直な父の意見にさからえず
肩パッドは少しあなたの待つ駅へ
古希まぢか薄墨色で描く恋

誕生会新緑映える大広間

八尾市 鷺 見 章

ツバメ飛ぶ窓外かすむ信貴生駒

カーネーション活けて初夏の色となる

ガーデニング寮の廊下は花ざかり

八尾市 平 川 幸 枝

朝一番カラスがゴミの品定め

コレクター他人はゴミと思っても

カラオケへ天衣無縫の声を張り

夢枕「おい」と呼ばれて一周忌

河内長野市 水 谷 正 子

住吉さん卯の花咲くという便り

兄ちゃんの断髪式は見たくない

家の孫今年十七気にかかる

よそ様にまいた笑顔を家で消す

河内長野市 印 藤 智 子

目に若葉淡いグリーン服を着る

出会いより別れの多い歳となる

母の日は品物よりも甘いもの

故郷も様変わりして道たずね

羽曳野市 川 口 信 子

おばあさん昼寝小さい足の裏

ハッとした夢でよかったほっとした

孫が来てすべてのペース総崩れ

生きている証拠のような大いびき

法治国家も放置国家となりました

ダンボール暮らし嘗ては社の上司

ガイドさん頭痛のたねは酔っぱらい

捨てた大ゴミ拾う資源のリサイクル

寝屋川市 岡 本 勲

朝ドラに合わせて飯を食う二人

赤信号についてもお酒やめられず

足腰の痛みお年と笑う医者

女くれば男出ていく露天風呂

交野市 森 本 益 弘

霊園の花見墓石が邪魔になる

雷をおそれぬ妻が隣に寝

アレソレで分かる話をする夫婦

タイガース勝った今夜は眠れそう

松原市 和 気 慶 一

左利きを悩ませている改札機

ハイキング古稀には恐い下り坂

下着までペアルックのハネムーン

遺伝子に誘われ今日も赤のれん

藤井寺市 岸 本 寿 代

おしのびの温泉旅行肝ひやす

手作りよりお金がいいと現代っ子

花を買うちよっと嬉しい事あつて

冷蔵庫掃除をすれば三分

岸和田市 亀井皎月

旧中会 来ぬは逝つたと聞くつらさ(旧中金山口県旅 4句)

クラス会 山口県下ひた走る

秋芳洞 規模の偉大と驚きと

津和野路の観光タクシー荒稼ぎ(雨天にて)

岸和田市 木村正剛

喜んでばかりおれない長寿国

次世紀はドナーカードに託します

リストラに大黒柱やせ細る

安眠の蒲団はがれる日曜日

富田林市 山原昭水

七夕さん次女の婿さん頼みます

水墨画よりも硯を自慢する

仲直りしたらお腹が減ってくる

また来てね女将がきつく手を握り

泉佐野市 備後三代子

ただいまと母娘大きな紙袋

目前に合体雀急降下

外人が蕎麦に見事な箸さばき

子の家にあやかることのむずかしさ

大阪府 吉本智子

2DKの五月人形威張ること

虎の子の冒険誘うゼロ金利

買った家我より先に老いるとは

草刈ればすみれ姫君こんには

伊丹市 延寿庵野鶴

機密漏れ慌ててソフト替える国

不意の客妻が慌てず腕振るい

カブトガニ太古の謎を秘めて生き

散歩道いい話聞きリズムカル

尼崎市 野瀬昌子

わからない話眠った振りをする

魅力ある話につられ行く旅行

始まりは道を教えてあげてから

一つずつ無駄チエックして母の知恵

尼崎市 軸丸勝巳

ベランダに花壇 日課が一つ増え

バスの窓心の和む花の帯

洗濯機働きぶりを音でみせ

年子産む朱鷺に上げたい感謝状

尼崎市 松下比ろ志

不況風武者人形の渋い顔

威張ってる人に似合わず円く寝る

ネクタイをきっちり締めて定年日

余生というドラマを綴るマイウエイ

神戸市 木村忠義

ほとんどが正反對な妻と僕

自動車という忘れ物してしまう

九十で介護サービス不要とは

肥やしだと思えば万事苦にならぬ

姫路市 北条てる代

ライバルと想つてたのは自分だけ

振り向けばたった一人の縄電車

今日の罪沈めて飲んだ赤ワイン

自我通し首を折られたネギ坊主

姫路市 勝間タツエ

さみしき無視運んでくれる朝ごはん

無造作に束ねた髪が若さ見せ

み仏に一日を謝す経をあけ

病院で見せる下着へ気をつかう

姫路市 服部一典

かりそめの恋にやぶれた鬼も居る

五つさばよんでくれている縄のれん

悦びを伝える妻のない雀

いつもいい子で三猿の大人達

三田市 久保田千代

晴天を仰ぎ今日もと活入れる

ある程度流され生きて楽になり

激動を生きた証の顔の皺

じゃあまたね言いつつ続く長電話

兵庫県 広瀬房江

夕桜空しいままに日が沈む

老人会口紅少し拭いて行こ

御近所と出会って高い方を買

若いわネ言いつつ化粧透視する

兵庫県 徳平毬子

気楽さもお金も欲しい若夫婦

不況風何処吹く風と海外へ

新緑と共に萌えたい退院後

手術日はやっぱり頼り神仏

兵庫県 安達厚

桜前線待つて湯宿の予約する

どうあろうと平均寿命生きてやる

若ければ結婚したい娘と出会う

父の皺一味違うものをもち

綾部市 藤田芳郎

多趣味だと褒めて飽き性買わされる

忘れ物取りに行ったら笑われた

やり残しばかりだ素晴らしいことだ

力にはなれぬが旨い酒がある

京都府 丹後屋肇

八十八夜お呼びのかかる赤榨

歯に衣をさせぬ波長の会った仲

また凡打ベンチで浮かぬ四番打者

膝の孫吾が自画像がまん丸い

京都府 前上英一

波風を鎮める策を練るビール

妻の目に叱られている電話口

優しさの向こうに罨が見えかくれ

夫婦だなたまたま同じこと思う

京都市 三宅満子

夏近し水着のためのダイエット

連休の金とヒマとが折り合わず

筍と木の芽の仲にあやかろう

同窓会あこがれの人老けはった

檀原市 居谷真理子

一緒には死ねぬが同じ風邪をひく

ヘヤーサロン小さく座る半白髪

はめられて一人になって舞いあがる

三人産みそり合わぬ子の世話になる

檀原市 西本保夫

むかしなら十七歳は銃をとる

十七で少年ですと許されぬ

似たものの夫婦放っておけばよい

世話やきがいらぬ取りこし苦労する

田辺市 大峠可動

落ち馴れた男に欠ける虹の彩

藤ゆらり糸千本の暖簾かな

人生の貯蓄体操一二三

挽歌ひたひたビタミン飲んでジャコ食うて

和歌山市 木村親路

医療ミス不思議な世界見た私

エリートよスピード落せ段差あり

梅雨の傘少し派手目の色にする

見学をさばり試食の列にいる

和歌山市 前岡健三郎

奥の院空海祀る人の波

焼き立てのパンが自慢の店が増え

きよろきよろの子にはらはらの入園日

縄文の土器と一緒に古代鏡

和歌山市 上地登美代

つかい棒といっしょに転ぶミニトマト

何度でも甘い言葉に騙される

三日坊主で終わってしまうダイエット

生命線マジックペンで書き延ばす

米子市 足立由美子

老いたのかお寺まいりも好きになり

もやもやを消してもらいに寺に行く

残りものの中で見つけた福がある

さわやかな声が届いていたポスト

米子市 小塩智加恵

住人の無い隣家に咲くつつじ

助手席の妻は能弁嫁のこと

見合いの日恰幅よい夫前に出す

電話から会ってみたいと思う声

米子市 猪森スミエ

クリニック出てさわやかに深呼吸吸

気ままです手の鳴る方は振り向かず

跳ね返る活気頂戴鯉のぼり

胃の隅をほんわか撫でる旬の味

米子市 森脇麗

視力○庭の緑で目を洗う

気分転換ビートのきいたジャズを聴く

活気ある街の匂いを嗅ぎに行く

連休は自家菜園で汗流す

鳥取市 福島庸二

逆風も受け止めようで追い風に

大切に取っていた物今やごみ

意地っぱり妥協の線がゆれ動く

知りつくしお互い気まま通る仲

鳥取市 田中瞳子

癒える日を流れる雲に問いかける

またおいでお世辞言ったら来ちゃったよ

冷や奴愛は薬味に盛ってある

長居する客に立てたい簪なし

鳥取県 山内芳江

辛せが逃げる愚痴などもうよそう

我を通す苦労知らずに苦労する

大家族人も羨む仲の良さ

噂よりこの目で耳で確かめる

鳥取県 鳥羽直市

隣との違い気にする癖がある

健康と趣味の余生に乾杯だ

冷凍に季節の味を奪われる

妻という助け舟あり生きている

鳥取県 西垣美知子

貧しさを忘れる汗を吉とする

さりげなく握った土に春匂う

野苺に偶然出合う散歩道

背伸びなどしない気ままな軽い足

鳥取県 河本照子

還暦を迎え親子の旅適う

富士山を東に西に見る旅路

大島の椿で癒す船の酔い

小さな自分を思い知る旅に

松江市 山根邦代

鯛だけはお飾りにしてお食い初め

職退いてふるさと恋し友恋し

母達者見習うことの多いこと

久々に昔気質の人に会う

松江市 小川注湖

気分良し鏡の中の顔も良し

無人市良心も売る品の良さ

一品に込めるサービス客が知る

美人には気品ただよ匂いあり

益田市 岡田たけを

流れに添ってどんどん下る物忘れ

深刻な話へ口ははさめない

力瘤萎えて昔が薄れだす

コップ酒重ねて話くだくなる

出雲市 城 多喜

背が縮み物干竿に届かない
相槌は打つが納得していない
年金の中でまごとしています
鍋焦げた事はだれにも喋らない

出雲市 榎 ミツエ

五月晴れ嬉しくなつて友さそつ
若草に園児飛びはね蝶も舞う
青い空大病院へへりが飛ぶ
二千年事無き願う七十坂

出雲市 岡 あきら

風向きを読むのに長けている徳利
つかいの欲しいかたちで豆の蔓
採りたての緑が皿をよろこばす
三本の柱が語る大社

島根県 毛利 幸

リフォームでバリアフリーに衣替え
山歩き新芽の香りぐいと吸い
不景気で百円ショップ大繁盛
ホールインワンへ年甲斐もなくはしやぎ

島根県 持田 多輝子

本心を開ければ火の粉かぶる破目
ダルマの目入れてうれしい一騎打ち
結論をさせてレール踏みはずし
失言を冗談だったとうそぶかれ

島根県 多々納 テル子

お受験へ養殖されている幼児
生花展名前を先に見て回る
神仏の灯を消して今日も無事
百歳の桜凜凜しく花盛り

八幡市 衆野 和俊

教会に集いて神の聖さ知る
米寿の師今日が最後と救い説く
一輪挿しテーブル毎に別の顔
結婚の記念日忘れ妻の囁

宇部市 藤本 一規

少年が人の命を軽くする
秀才が平気で人を傷つける
フアインダー越しに社会を覗いてる
新緑の芽吹き心の深呼吸吸

香川県 瀧井 勝

子宝に恵まれすぎた親の修羅
軽症の患者煩い話好き
雑草の一途な花に銜いなし
主病み菜園草に占められる

今治市 塩路 よしみ

目立とうと精一杯の枇杷の花
留学へ孫の決意に乾杯だ
価値観を替えて茶髪についてゆく
五欲みな捨てれば楽になるだろう

今治市 中村好恵

妻の手で残り少ない髪を刈る

春蝶の案内で行く遍路笠

包丁を研ぎキッチンに風入れる

生命線 感情線も土まみれ

松山市 山之内 八重美

ひとりごとと言って落ち着く腹の虫

窓越しのおぼろ月夜へ湧く慕情

茶柱に縁起かついだ旅靴

言葉を交わす余裕もできた快復期

横浜市 布山嘉信

お別れの牛に家族の御飯あげ

不祥事のキャリア現場の汗知らず

れんげ草下校の子等を誘ってる

定年離婚対岸の火が身にかかる

横浜市 鈴江純子

連休に体力気力底をつく

下り坂アツと言う間の事でした

老いの坂転がらぬよう手を繋ぐ

温暖化いれて収穫予想たて

横浜市 近藤道子

絵心はないが感動する景色

素朴だが母の作ったものが好き

削られた山を淋しく見て帰る

飽きのない四季の富士山見て暮らす

横浜市 秋元和可

同世代ばかり真昼の映画館

連休の穴場狙った人で混み

日向ぼこ今日も待ってる指定席

みんな留守障子張り替え背をのばす

横浜市 金森徳三

ばくだつてあるさこの頃まだら呆け

NHK抜けて友から酒届く

休肝日明けて今夜が待ちどしい

ガングロも茶髪も背負う国のツケ

横浜市 山梨雅子

留守電のピーを嫌って何時も切り

子の背丈またのびている春休み

ずかずかと姑の意見入りこみ

ブティックのお似合いですは信じない

横浜市 荒井広和

人並で足りず欲かくヤジロベ

少子化の愚を散る花に諭される

タンポポの胞子マザコン叱咤する

ユニットの家に住んでる核家族

東京都 清原悦子

神田川散歩コースを孫と行く

針穴に全神経を通して

初恋が美化されているいつまでも

さり気なく持つブランドが重たくて

東京都 井上 つよし

空缶で昨日の憂さを踏み潰す

もうすぐがそのうちになり未だ出来ぬ

食べて喋って妻が女になるツアー

すり切れたズボンが似合うまだ若い

静岡県 大村 正雄

何となく怖くなるよな新世紀

エンジン进行を止めて代田の昼御飯

相席でのど飴貰う春の旅

紫外線強くて春の帽子買う

静岡県 増田 扶美

退職し汗光らせて土に生き

太陽が元気のもとと畑の笑み

一夜漬け茄子輝いて朝動く

指広げ鉄線垣で呼んでいる

静岡県 中西 雅

ラベンダーに囲まれ星になった夫

論されること多くなる昨日今日

残りの集めた料理無国籍

筆を替えまた替えてみる筆不精

富山市

お洒落して出掛ける嫁にちと妬ける

根気バワー朝のみそ汁から貰う

どの子にも一つ見つけた光るもの

ラストまであなたの側がいいのです

松見 たえ

日立市 加藤 権悟

ニアミスをコックピットは知っていた

大ボラでエンマを煙にまいてやり

足並が揃うと恐い蟻の群れ

GW日本列島亀になる

新潟県 高野 不二

孫の話で取りもどす夫婦仲

此の町も介護施設は立派だな

大観を買えと気安う来る電話

金持に見られたらしいメール来る

秋田県 湊 修水

秋田の春 梅桃桜ともに咲く

愛犬も花見のお供衣装を着て

花冷えにしだれ桜の綾に酔う

花堤下手なカラオケ聞きながら

青森県 富士 トキ

時々わたしの手料理食べに来て

三姉妹老人ホーム見学に

春嵐花の命のあわれさよ

玄関のつばめも見送る娘の門出

青森県 諏訪 夕香

東本願寺へ分骨別れかな

井上八千代継承 都をどりをたんと観る

天気晴朗 大津で遊ぶミシガン船

柳々さん水煙抄を読んでいる

五月晴れ話相手が欲しくなり
大阪市 星 野 きらら

未亡人子授けの湯と言われても
秘めごとはラップで包み冷凍庫

大阪市 辻 川 咲

夢一つ雲に託して今日も生き
母の日に思わぬ人が贈り物
道端の名のない花も生きてます

堺市 藤 井 一二三

満開の風情へ風の有るかなし
風向きを悟って今日はせちがわず
四国遍路名も無い墓のここかしこ

堺市 荻 野 像 山

女房は喪服が似合うまだ死ねん
父逝って庭の雑草活気づく
洗い機の中でも皿にある序列

豊中市 み き わきみ

たよりの医者が俺より若くして逝った
酒煙草止めさせた医者今いない
死んだのに税の納付書だけは来た

吹田市 後 藤 志津香

既製服ボタン落して五つ買う
藤の香に酔うてその場に座り込む
ひめゆりのセーラー服に身を重ね

身の内の母がそろりと顔を出す
吹田市 大 谷 昌 子

息ひそめあんこうのようあなた待つ
不満顔消し去りたくて厚化粧

泉佐野市 大 工 静 子

故里はもう知らぬ家知らぬ人
車中でも礼儀正しい智弁の子
同じ椅子同じ姿勢で今日も暮れ

河内長野市 木 太 久 正 一

ライラック自慢の花が今年また
手際よく網戸張替え初夏の風
鶯の囀る能勢に堂掃除

枚方市 二 宮 紫 鳳

ほどのほどの幸せでよし夫婦酒
酒の量増して停年間近なり
プレゼントくれた息子の高いびき

四条畷市 吉 岡 修

力んでる出鼻に一丁猫だまし
ライバルを出会いがしらに目で斬った
はた目には辛そうにない堀の中

尼崎市 尾 宮 弘 治

清貧の自讃を子等に笑われる
老いるほど口が若やく妻である
家計簿を見るる父母には近寄らぬ

尼崎市 森 安 夢之助

迷路脱出やつと笑いを取り戻す

口笛を吹いても記憶もどらない

すれ違う話まとめた名幹事

尼崎市 河 津 正 治

女房はモデル気分の旅仕度

ピリオドを打ちたい駒の探り合い

点滴が余生の時間引き延ばす

篠山市 谷 田 多美子

ささやかな幸せ夫とちよこ二杯

連休にお誘いあちらこちらから

人に酔い陽気に酔って淡路博

篠山市 円 増 純 子

輪に溶けるためここだけの話聞く

二人なら怖い吊橋でも渡る

夢の橋渡って花博やって来た

和歌山市 土 屋 起世子

足萎えた母にもさくら春告げる

冷えきった介護保険はおことわり

尽くされる方にも疲れ見えてきた

海南市 堂 上 泰 子

合併劇リストラ恐い五十代

花婿の候補銀行マンを避け

初燕 私も花のブラウスを

和歌山市 福 重 美 子

インターネット便利な裏の怖い顔

山里の星降る空に囲まれる

一言で変る毒にも薬にも

奈良県 渡 辺 富 子

ライバルもドリンク剤を飲んでいる

ときどきは十七歳の部屋のぞく

化粧水うす水色に変えて夏

京都市 勝 山 美千代

位牌出来亡夫と並んだ五十回忌

貼り変えた障子年忌を待つばかり

鉢植えのトマトの花にもらう夢

滋賀県 中 宗 明

あいさつが長く熱燗ぬるくなり

フルコースメニューだけ見て我慢する

休肝日誘惑逃げる縄のれん

奈良市 田 中 賢 治

金星にしたたる汗は無口なり

晴れ間から引上げを待つ消費税

聞く耳は投票済んで遠くなり

岡山市 清 水 金太郎

母いない子には淋しい母の日か

孫旅行土産なにより無事な顔

せまい日本悪い事件が多過ぎる

岡山県 国米 きくゑ
ふところで温めつづけている切符

皆送り今日の私になる化粧
再出発ちびた靴でも光らせる

倉吉市 大下 智子

身の程を知っているから妥協する

時々気ままに心休ませる

大粒のいちごショートで気を晴らす

鳥取市 田村 邦昭

豪雪に誘惑されて春が来ぬ

古里の荷物に母が詰まってる

逆境を男の意地でもちこたえ

鳥取市 横田 春名

白旗をうまく振り合う夫婦仲

風薫り病も癒えた便りくる

一輪車に乗れたんよベルが鳴る

鳥取市 河田 のり代

ペンの先秘密ばかりを書きたがる

孫を見る固いガマ口ほほえんだ

また風邪かお医者と縁が深くなる

鳥取市 西尾 敬之介

春風の吹くにゆらゆら身を任せ

赤子泣き春宵の夢破られる

投げた句が見捨てられてく惨めにも

鳥取県 鳥羽 玲子
一日のドラマを綴る娘の電話

熟睡のゆとりキッチンよくはずむ

庭の石腰をおろして見よと言う

鳥取県 西沖 彰雄

独り居に慣れて世間が少し見え

OB会床を背にする序列あり

親の夢詰めて重たいランドセル

鳥取県 橋谷 静江

フレッシュな風を求めて花回廊

幸せは夫婦健康保つだけ

ふたりとも起き抜けに出るドッコイシヨ

鳥取県 竹森 富久江

温暖な地へ恵まれた種をまく

床の間の柱が舅面をする

乗り越えた壁がいつの間にか消えた

鳥取県 藤山 弘子

独りには蛙の声も子守歌

ピチピチのおたまじゃくしもよく育ち

休日気ままに車走らせる

出雲市 川島 和歌子

宿題の進まぬ春の日が暮れる

青葉陰帽子を脱いで風入れる

うっかりと見過している予定表

松江市 松浦 登志子

どうしても自分の顔を若く描く

木の芽つむ母はいつでもひとりごと

冷蔵庫趣味と嗜好をつめてある

島根県 菅田 かつ子

筍がすすく伸びて頼もしい

過疎の道蕨パンザイして迎え

下手な字をポストぼとりと飲み込んだ

福岡県 岩崎 和女

善人が冷や汗をかく小さな嘘

さわやかな風に押される万歩計

それぞれのサイズで仲の良いおでん

野田市 那賀島 雅子

生きてゆくことに耐えてる古い椅子

かくしごとなにも無いのにサングラス

下がり眉たまに寂しい顔にする

横浜市 生坂 サト子

カタカナ語 御を付けられて悪びれず

弱点の技集中の猛稽古

和やかな人と見込んで道を聞く

横浜市 吉田 裕峰

禁句だと約束したがどっこいしょ

目覚ましの前に目覚めるゴルフの日

あでやかな衣裳でダンス軽やかに

横浜市 三村 八重子

検針と五月の風に語尾をあけ

顔を見てティッシュ配りが手を落す

大阪市 櫛田 秀策

ストーカー呼ばわりされてノイローゼ

公園にいつも来る女こわいです

大阪市 伊藤 博仁

もうあかんジェーシービーの世話になろ

あの野良め水かけてからよく睨む

大阪市 小泉 ひさ乃

子の便り消した言葉を透かし見る

患って初めて逢えた遠き孫

枚方市 大昇 隆広

いい人の腹を覗けばがらんどろ

忙しい世悠久の頃なつかしむ

門真市 矢阪 英雄

痙攣の顔面化粧拒否をする

涙腺が緩めば理屈抜きに敗け

和歌山県 中村 君枝

酒飲みの蚊だろう夫の血を好む

なあんにもなかった頃の家族愛

宝塚市 飯西 ミサヲ

ひと呼吸おくれた返事見のがさず

明日は旅 時計も脳もおくれぐせ

待ちわびた友の足音眠気覚め
出不精になった私を誘う友

川西市 田中喜俊
兵庫県 黒崎美紗子

ひやかしの夜店歩いて人に酔い
音のする花火の方へ急ぐ足

倉敷市 森本文子

腹の底笑える友と蕎麦を食む
胃薬を飲み皮下脂肪溜めている

鳥取市 谷岡清子

葉桜に酸素いたたく深呼吸
春菊の美しい花生き残り

鳥取市 岡田信恵

信じてた友の裏切り恐かった
リハビリに出口が見えた一人だち

鳥取県 平井栄翁

隣から夕餉の匂いだけ貰う
腹立ちを妻の抹茶に鎮められ

鳥取県 加藤公子

人形がママの口ぐせ聞かされる
びしびしとやられて たじたじの亭主

鳥取県 岡嶋かね子

もう一度教育勅語腹に入れ
むずかしい安楽死さえ許されず

頭では計算出来ぬ有珠山だ
好きな人なら冥土まで二人旅

倉吉市 岡久子
熊本市 北川一進

叱られるのも覚悟恋愛夢中です
懐かしい話がはずむ同期会

愛媛県 宮本末子

佇めば怒り鎮まる大牡丹
雪解けの水が甘茶に薬師堂

千葉県 大川晩翠

何のその未だ未だいける男坂
花簪こうべを垂れる日本髪

大阪川柳の会

とき 8月2日(水) 17時開場 ところ 3サンケイ
ビル本館3階322号室 題と選者 ちらほら・
木野由紀子△風・大森一甲△隙・玉置重人△握る
・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費800
円 18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

鶴彬川柳大賞

〈現代を鋭く風刺した新感覚の川柳〉2句▲B5
判用紙に住所・氏名・年齢・職業・性別・電話番号
明記▲投句料 11000円▲締切 8月2日必
着▲応募先 〒929-1215 石川県河北郡高
松町高松ク40 高松町社会福祉センター 鶴彬大賞係

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(114)

橘 高 薫 風

(前号から続く)

さて川柳も確に文字芸術である限りは文学である。その発生を江戸時代にみ、其角門の慶紀逸が寛延三年に出した「武玉川」初篇をもって川柳の契機となり、而して柄井川柳が、前者の雑俳の前句を篇したのを、今度は附句を独立せしめて「柳樽」を出してより以来、連綿として続いて来たところの日本生粋の文学として確立されてはいるのである。それ故に吾々が一度び「武玉川」や「柳樽」を勉強する時は、それは文学的に非常に意義あるものに相違はないけれど、僕はこのような文学的な価値を求める事は、京大のプロフェッサーとか一部のアカデミーの好尚家にまかせて置けば可いので、吾々はそれよりは実際問題として文学に於ける文学する精神、即ち川柳をして川柳する精神、所謂猿真似小器用にて、チョクツと物をヒネって書くというのではなく、川柳そのものに身も心も投げ入れようとする全的な精神を作者が持つ時に始めて文学的な価値を体得する——觀賞し吟味し研究

するのでなしに——ことになるのである。

斯る態度を堅持する場合、丁稚が丁稚のままで書き、商人官吏、会社員、医者、軍人のままでそれぞれに書く事にはならないで、川柳する場合は、各々その立場を忘れ川柳家としての矜持と誇りをもって川柳しなければならぬ。例えば小説家が小説を書く事により小説家であり、画家が画を描く事によって、音楽家が音楽することによって、画家であり音楽家である事は、小説家は小説に、画家は絵画に音楽家は音楽によって生活の絶対価値を認める如く、川柳家は川柳する事によって生活の絶対価値を獲得しなければならぬ。それは決して商人の趣味や音楽でない。万

一商人であるとしたら、商人は二義的な生活の方便であって、先ず川柳家である事に一義的な絶対的生活を求めなければならないものだ。吾々は斯くする事によって、巷間の川柳を衆愚から別離し、所謂詩人の手に戻すべきであったのである。即ち川柳家は、川柳家である事によって川柳の自律性がある。牧師が

牧師である事によって牧師の存在がある如く、牧師は決して茶坊主であってはいけぬのだ。以上述べた川柳家の内部革命を提唱すると同時に、僕は柳壇の外部的な運動に就て、即ち、対文壇への進出、挑戦に対する柳友の猛省を促すものである。

一体、川柳家協会の設立に対する全国柳誌の非難、攻撃の馬鹿げた騒ぎはどうした事だ。どれもこれもケツの穴の小さい小兒病的、田舎大名の鮎侍位の豪ぶりようでは決して耳も傾けられないじゃないか。

「真面目な批評ならいくらでも受ける」という路郎の態度は川柳家にしては一寸珍らしい出来物である。欠点だらけは寧ろ路郎の最も躍如とした人間らしきであって、師の句はそれ故に一等芸術的なのである。政治家で事業家で、人触りのよい常識家は大家に成すまで涼しい顔をしているが、句は衆知の如く非常に詰らない。人間が出来て一分のスキ間のないといった世情にたけた、いわば世情に狎れあつた奴には真の芸術家は居らぬものである。路郎はよく突飛な事をして柳人輩を驚かす。その事柄の良否は別として、とに角、驚かすという事はアリストテレスの「詩学」以来の芸術の根本義であって、師の芸術家としての天性的な素質を物語るものである。

愛染帖

波多野五楽庵選

出雲市 園山多賀子

バラの棘終生置い切れますか

三田市 北野 哲男

いい町だゆつくり歩くとバスがない

松江市 川本 畔

やさしさに野芹が含み笑います

青森県 諏訪 夕香

ねぶた囃子聞こえてますか津軽夏

西宮市 奥田みつ子

新世紀カラスよ白くなるなかれ

八尾市 村上 剛治

結局はわが家が旅の目的地

和歌山市 山口三千子

ふところの狭い男と距離をおく

富田林市 池 森子

わが命ひとつを握む春の底

今治市 野村 京子

火と契り水と契って母の章

東京都 播本 充子

反り返る男のシッポ踏んでやる

鳥取市 近藤 秋星

ふるさとの母に逢が伸び過ぎた

八尾市 生嶋ますみ

ケセラセラ息子は嫁にあげました

大和高田市 鍛原 千里

まだ女許容範囲の赤い爪

鳥取県 岩崎みさ江

刺してみたものの淋しい鬼あざみ

鳥取県 土橋 睦子

岡山県 福原 悦子

春愁の中で信じた子を送る

富田林市 片岡智恵子

いつかきつと崩れる砂の山を積み

尼崎市 長浜 澄子

表面を繕い足も手も出ない

鳥取県 石谷美恵子

赤は赤無口な妻が譲らない

熊本県 高野 宵草

本を読みながら歩ける良い町だ

和歌山市 福井 桂香

造反のカード味方に感づかれ

河内長野市 加島 由一

八百万の神を信じて無神論

鳥取県 土橋 螢

日本語も英語も脳の一部分

宇都部市 平田 実男

この顔に免じる顔にまだなれず

黒石市 相馬 一花

異花授粉嫌でひらりと体かわす

青森県 西谷 大吾

牛でよし余生をしかと噛みくだく

倉吉市 松本よしえ

頑張って鴉がうたのけいこする

横浜市中 近藤 道子

わだつみの傷を撫で合う戦中派

横浜市中 清水 潮華

常識がいくつも有った仲違い

綾部市 藤田 芳郎

和歌山市 川上 大輪

手のひらを結んで開いて何も無し
トンネルを抜けても闇はまだ続く

八尾市 吉村 一風

決断は信号青になった時
簪目に椿ぼたりと坐りこむ

米子市 木村富美子

妥協案すっかり胸に抱いて出る
白の真ん中で君が代聴いている

和歌山市 木本 朱夏

頬杖について音無き春の昼
薔薇の芯神が宿っていません

鳥取市 夏目 健一

入りたい穴には恥が詰まってた
夫婦とは寂しき縁(えに)かもしれぬ

和歌山市 吉村さち子

首縦に振れば納まる輪の軋み
髪染める明日も光っていたいから

逆引きの辞典で探す合言葉

大阪市 小林 周信

和歌山市 玉置 当代
肩すかしくらって湧いてきた鬨志

岡山県 山本 玉恵
時ときはゴシゴシ洗う胸の傷

倉吉市 山本 玲子
決断は踏切りまでにつけておく

大阪府 澤田 和重
生涯を縛る指輪を贈られる

大阪市 北 勝美
率直にひとりよがりの一行詩

京都市 都倉 求芽
だんだんに時代おくれの知恵袋

鳥取市 上田 宣子
わたくしの鮮度は足袋の白にある

羽曳野市 徳山みつこ
太陽を少し敬遠して女

鳥取市 徳田ひろこ
字余りの話に眠くなってくる

和泉市 横山 捷也
出向の片道切符渡される

西宮市 牧渕富喜子
景色から書くスタイルが崩せない

鳥取県 さえきやえ
仏さまらずかな雨です生きてます

弘前市 蒔苗 果林
強がりの痩せアスパラに励まされ

米子市 光井 玲子
しみじみと灯を分け合って二人住む

愛媛県 黒田 茂代
蟻の道掃くわたくしの嗜虐性

枚方市 寺川 弘一
ドミノ倒しの真ん中辺をキープする

弘前市 斉藤 劼
花びらをしっとり抱いている大地

奈良市 米田 恭昌
くたびれたまま吊るされているスーツ

藤井寺市 太田扶美代
意味もなく男を急かすカレンダー

和歌山市 西山 幸
種を明かして軽い自分を取り戻す

吹田市 石原 靖巳
源流に行けば答がありそう

和歌山市 古久保和子
ニンゲンをじっと見ている壁の穴

池田市 藤井 計光
八人目の敵がちよつかいかけてくる

鳥取市 岸本 孝子
夢を描く白いページがうまらない

鳥取市 岸本 宏章
夜が明けてみればほとぼり冷めていた

弘前市 高橋 岳水
合わす掌の中に私の夢を置く

鳥取県 田村きみ子
うなずいておこう敵にも味方にも

大阪市 三浦千津子
後継がぬ子を翻す旗がない

岡山県 矢内寿恵子
年毎に夢盛る皿がよく割れる

西宮市 西口いわゑ
時を経ていい人だったなど思い

和歌山市 上地登美代
青春ヘタイルスリップした出会い

和歌山県 中後 清史
休みたい日もあるだろう母の鈴

唐津市 樋口 輝夫
挨拶で浅学菲才と言ったはず

唐津市 井上 勝視
しがみが少しゆるんだ介護法

唐津市 田口 虹汀
幾つになってもホワイトデーはやって来る

松原市 玉置 重人
ユーモアを知ってる真夜中のトイレ

大阪市 一本 勇太
生きて罪汚れが落ちぬ五指十指

唐津市 仁部 四郎
平凡な道にも畏はありました

八尾市 宮崎シマ子
紙コップ小さな情け借りたまま

富田林市 大橋 鐘造
うたかたの此の世に軽く腰をかけ

泉佐野市 稲葉 洋
失恋も死別も胸に閉じて老い

横浜市 小野句多留
草もちは女の彩で姦しい

和歌山市 青枝 鉄治
雑踏の真ん中辺で浮く孤独

弘前市 櫻庭 順風
緑青の湧くほど生きて忘れて

弘前市 相馬 銀波
この雨にお礼私の茄子トマト

香川県 松村 輝夫
ソックスを脱いで我が家の顔になる

弘前市 高瀬 霜石
惚れやすいわたしは危険人物だ

今治市 越智 一水
ブルドーザー土筆あろうがあるまいが

松原市 小池しげお
おしほりで顔拭く隙のない男

鳥取県 小西 雄々
割れ物のように百歳抱きかかえ

枚方市 海老池 洋
そう言えば水も輪廻を繰り返す

倉敷市 小野 克枝
まん丸く耐えることだけ知った石

鳥取県 林 露杖
風下に回り匂いを嗅ぎ分ける

鳥根県 伊藤 寿美
小細工は嫌い直球だけ投げる

寝屋川市 堀江 光子
再会に当りさわりのない話題

富田林市 藤田 泰子
本心を裏切った日の泣き寝入り

羽曳野市 永田 章司
幸せの裏側にある退屈さ

鳥取市 録沢 風花
念仏を唱えて歩く世紀末

羽曳野市 吉川 寿美
生き死にの重さ軽さよ花筏

札幌市 三浦 強一
ばあちゃんのファッションがある古行李

横浜市 菱田 満秋
介護する方がお先に参りそう

尼崎市 春城 年代
とつぜんに行く手塞がる不幸ごと

米子市 木村 春枝
故郷は皆善人の顔をして

横浜市 川島 良子
ポックリと逝く日のためのジム通い

倉吉市 米田 幸子
紫にやがて私も黄昏れる

八尾市 高杉 千歩
休診の札で祭日だと分り

大阪市 稲本 凡子
赤とつがらし家族会議が進まない

鳥取市 美田 旋風
少子化もネットも用はなさそう

枚方市 前 たもつ
言い訳を大人の顔で聞いてやる

東京都 後藤 早智
何気なく掛けた情けに揺すぶられ

和泉市 中川 楓
老人介護甘い話をちりばめる

唐津市 宗 水笑
マスコミに打ち勝つ打者が出て来ない

池田市 栗田 久子
無機質な不安に揺れる十七歳

岡山県 小林 妻子
太陽も西から出るか分からない

豊中市 田中 正坊
新人の理髪マニュアルどおりなり

堺市 和田つづや
神仏よりも修羅場を来た自信

唐津市 久保 正剣
致死量を逆手に取った風邪薬

寝屋川市 籠島 恵子
うぬばれかいつもだれかが追ってくる

尼崎市 春城武庫坊
下駄を履く夏がゆっくりしのびよる

鳥取市 武田 帆雀
平脈に許し給うた酒二勺

川崎市 和泉あかり
二度寝して中途半端な朝が来る

大阪市 川原 章久
靴底の厚さをこぼす足の裏

藤井寺市 高田美代子
牽制球が飛んで来そうで動けない

藤井寺市 中島 志洋
野次馬をがっかりさせた仲直り

今治市 塩路よしみ
敗者復活靴の先まで光らせる

今治市 月原 宵明
本当の彩と出合った眼の手術

今治市 野村 清美
美しく人を騙した万華鏡

愛知県 早川 盛夫
少年の何故に答が出てこない

横浜市 三村八重子
遠目には愛でられている千枚田

高槻市 傍島 克治
協力口先だった票の数

秀句鑑賞

中山雅城

和田つづや

スランプを抜け出せぬまま春になる

黒田茂代

弱虫を叱咤しながら立ち向かう

多々納
テル子

後先を考えると、弱虫になるのは当然、平和の為ならそうも言っておれない。

一周忌あなた今頃どのあたり

山宮愛惠

「どのあたり」に労りがあり佳句です。「替鐘の届くあたりにいらっしやる」のでは。

国米 きくらぎ

大胆な表現に躍動感があり、母体と胎児の健全さと逞しさが見えてくる。周囲の期待と激励がそうさせている。

ベランダに布団が乾く陽の匂い

湊
修
水

ふとんでも日光浴がしたくなる。真夏の太陽の匂いを知らない鍵っ子は気の毒だ。

どんぐりの群れに生きてる安堵感

上地登美代

素朴で常識を弁えている人々の群には安らぎがある。

土いじる妻キラキラと春の庭

森本益弘

人も土も、春の日差しを浴びて互いにやがて咲く花を待ち、キラキラ輝いている。

会社より大きい椅子が家にある

吉岡修

帰宅すれば一家の大黒柱、ご苦労さんと椅子が出迎える。笑える句である。

穏やかな母もストレス溜めていた

斎藤 さくら

核家族になって、むしろストレスがたまるのかも知れません。息子たちが聞いてやれば直ぐにも解消されるストレスでしょう。

川島良子

めめめそしてはおれぬ、立ち直るんだと
自分に言い聞かせて行動する。

この世にはうまく作った凸と凹

櫛田秀策

凸と凹は日本語でしたか、知りませんでした。筆遣いを教えてくださいませんか。

残り火をゆっくり趣味で燃やしたい

鳥羽直市

余生を、川柳で真つ赤に燃やしましょう
仲間と一緒に。

有珠山の泣くに泣けない牛の世話

高橋明子

人ごとではすまされない。国内で最近地震の多いこと、大事にならねばと。

借金を断り妙に味気ない

鳥羽玲子

断つたのは正解かも知れぬが、とても後味の悪いこと。その後が妙にかかる。

演歌きく耳から涙もろくなり

佐藤治代

懐かしのメロディーに、涙ぼろぼろ
割り勘でふる里語る縄のれん

内田 美也子

割勘に対等さが出て自慢話に花が咲く。

尚香のむ

宮西弥生選

人間の子供が育たなくなつた
 どん底をひとつ抱いてる一行詩
 介護士の笑顔どこから湧くのか
 進歩する医学死ぬのもむずかしい
 まな板のくぼみは涙知っている
 価値観の違いを敵の目で見てる
 千の橋渡り答はまだ出ない
 残り火の朱が褪せてもまだ女
 消しゴムで消せる嘘なら許せます
 続くものあり足跡は汚されぬ
 これ以上笑うときとボロが出る
 やわらかい方言貰う無人駅
 みぞおちの小さな濁り大切に
 ジャンケンのグーしか出せぬ貧しい掌
 引退という字が妙にひっかかる
 頭の高い猫がわたしに指図する
 寂聴さんに会えて得したような今日
 家捨てて紙人形は鳥となり

和歌山市 福井 桂香
 富田林市 池 森子
 八尾市 宮崎シマ子
 横浜市 川島 良子
 富田林市 中井 アキ
 大和高田市 鍛原 千里
 倉敷市 小野 克枝
 吹田市 山本希久子
 横浜市 田中 笑子
 岡山県 矢内寿恵子
 藤井寺市 太田扶美代
 鳥取県 土橋 睦子
 八尾市 高橋 夕花
 羽曳野市 吉川 寿美
 藤井寺市 高田美代子
 和歌山市 木本 朱夏
 和歌山市 福本 英子
 鳥取市 徳田ひろこ

糸口を見つけてからは順調だ
 大輪の花にもきつと孤独感
 夢の中でも千羽に遠い鶴を折る
 曇り後晴の予定で今日も起き
 花ごよみ命乞いなどせぬさくら
 あるがままあるがままにと歯を磨く
 御堂筋頭の中の古い地図
 ツノ生えるには訳がある綿帽子
 やさしさを拾い集めた無人駅
 前かがみ祈る姿と相對し
 今日よりも骨ある風に逢う明日
 家計簿は三日坊主で恙なし
 終止符を打てば花束届くはず
 私には造花に見える花の街
 かなしみを越えて先代萩が咲く
 化粧して自分自身をあざむく気
 雨の日は雨の風情に万歩計
 和解するつもりで朝の靴磨く
 あいらしいおんなになれぬまま老いる
 花開く夢あたためる種子袋
 こう言えばこう言うだろう言ってみる
 好きな色あるから流行は追わぬ
 理想の枠小さくすると満ちてくる
 できるならわたしの末期見たいもの
 気にしなくなれば噂が風化する

米子市 足立由美子
 今治市 塩路よしみ
 和歌山市 西山 幸
 大阪市 稲本 凡子
 米子市 白根 ふみ
 西宮市 奥田みつ子
 富田林市 藤田 泰子
 鳥取県 岩崎みさ江
 松江市 川本 畔
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 羽曳野市 西村りつえ
 堺市 志田 千代
 和歌山市 桜井 千秀
 鳥取市 坂田和歌子
 鳥取県 さえきやえ
 寝屋川市 堀江 光子
 横浜市 秋元 和可
 岡山県 福原 悦子
 香芝市 大内 朝子
 熊本市 永田 俊子
 川崎市 和泉あかり
 八尾市 村上ミツ子
 富田林市 片岡智恵子
 横浜市 保田 絹子
 大阪市 板東 倫子

五月晴れくるりとむいた茹で卵
 虹を追ひ大切なもの見落しぬ
 八方美人に生きて蹟くことばかり
 驕らない中途半端に救われる
 いい事があるから結婚勧めます
 歩けあるけと緑の枝が声かける
 あきらめた頃に情けの蕾つく
 あいまいにごまかすことも芸のうち
 三猿をかざして丸く円く生き
 遮断機の向こうも急ぐ顔並ぶ
 爪真つ赤に染め性格も変わりたい
 渡り鳥の見事な群れを見送りぬ
 赤飯が炊けた喜び分けに行く
 黒髪に逆らうように染めたがる
 もう山は眺めるだけのものになる
 笑つても二人諍うてもふたり
 ライオンキング誘う人が見当らぬ
 二千年黄色い雨が降って来る
 尾氈骨打って正気をとり返す
 散る時の芍薬真似が出来たなら
 何時履こうフェラガモの靴貰うたが
 手抜きした罰は自分で遣り直し
 バラ銭をカンパ済まないと思う
 ほどほどを知らぬ女の肩パッド
 中国の旅だ急かさず焦らない

森	西宮市	森	西宮市	西口いわゑ
玉置	和歌山市	当代	和歌山市	澄子
長浜	尼崎市	公子	和歌山市	渡部さと美
牧渕富喜子	大阪市	岸野あやめ	西宮市	園山多賀子
生嶋ますみ	出雲市	賢子	八尾市	北村
年代	東大阪市	木村富美子	八尾市	喜代
孝子	尼崎市	喜代	鳥取市	黒田
千歩	米子市	能子	八尾市	高杉
千春	鳥取市	風花	鳥取市	録沢
神夏磯典子	米子市	千春	米子市	澤田
門谷たず子	大阪市	本間満津子	大阪市	充子
京子	西宮市	京子	今治市	野村
長島亜希子	横浜市	長島亜希子	横浜市	

無職でも朝の七時はブルーマウンテン
 くびれ腰美が美を誘う新体操
 よこしまな心を論す仏の灯
 ひとことをやさしく包むオブラート
 どの星も瞬く亡母でありそうに
 自慢話優しく聞くは母ひとり
 二年目の衣類は捨てるヤングママ
 余命とはまだ実感を遠くいる
 コンパクトふいに私をつき落とす
 自分励ます口紅を変えてみる
 忘れること覚えることもあり楽し
 少しでも光りたいから紅をさす

小塩智加恵	米子市	井尻	八尾市	武本	和歌山市	西原	鳥取市	平松かすみ	寝屋川市	伊丹市	大塚	津守	柳伸	愛媛県	徳山みつこ	和泉市	田村きみ子	鳥取県	松見	富山市
-------	-----	----	-----	----	------	----	-----	-------	------	-----	----	----	----	-----	-------	-----	-------	-----	----	-----

桂香さんの句―「人間の子供が育たなくなった」、何と摩訶不思議な事であろうか。森羅万象、命あるものがすべて育つ大宇宙で、人間の子供だけ生きる目標を無くさせたのは何であろうか。
 「親はなくても子は育つ」は死語になってしまったのか。社会問題として今では大きな波紋を起している。悲しい事です。森さんの句―喜びより苦しみを抱えているのが人間かも知れない。如何にしてその火も水も抜けるかは人間の英知かも知れない。それでも生きなければならぬ根性が「一行詩」であろうか。思い患うことせずに弾みにして生きろという事を、作者は切切と言っている。シマ子さんの句―同感です。この頃の介護士さんは笑顔に徹している。どこから湧くのかと聞きたくなります。良子さんの句―生体移植で再び生命が蘇り人間が続けられる今日です。喜んでよいのか、悲しんでよいのか、先ずは生命の限り生きられるだけ生きたいです。

角

大谷幸次郎選



会えばすぐ角突き合った若かった
なわ張りのは四つ角までの三輪車
角ばかり使い消ゴム丸くなる
触角をのばした友にさぐられる
道聞けば茶髪角まで連れてくれ
角つこに無口な僕の指定席
角番に勝った基石が軽くなる
角立てずハイと言わせる年の功
取敢えず握手しながら角かくす
死角から味方の礫飛んで来る
躰いた数だけ角が取れてくる
角番の力士に地元おちつかず
直角に歩きつづけた父の靴
角のない鬼が凶器を持っている
父ちゃんの顔が四角なクレヨン画
いろ紙の角をあわせている祈り
そこまでは言わずにおこう角が立つ
三角のお揚げに詰まる母の味
真四角な方で楷書がよく似合う
角隠し取るとやっぱりあった角
タイムカード押すと四角い顔になる
銀行がつぎつぎ消える街の角

充子 度 倫子 善信 雅城 尚士 笑子 彩子 重人 凡々子 ひかる ちかし 愛論 朝子 省子 仁緑 孝雄 正剣 勇太 慶一

街角を曲って仮面やつと脱ぎ
脈のある話か角度変えて見る
年の功話にやつと角が取れ
角の立つ言葉をついた寒い背な
トンネルを抜ける角がとれた
気ばかりは老母を見送る曲り角
ちちははの心に角が見当たらず
角の立つ話丸めた稚児の笑み
角立てず余生これから温かい
角一つ違えて迷う都市砂漠
死神も女神も潜む交差点
お世辞など抜きで四角に生きている
角帽の学徒の兄はまだ十九
もう一度さよならをさす曲り角
親の目の死角で悪の芽が伸びる
佳
角番の危機を脱してうまい酒
霊柩車角を曲って行つたきり
うなぎ屋の角を曲がると腹が減る
お遍路が石段の角丸うする
人間としては誰でも互角です
人
毎日が角番朝の靴を締め
標識はない人生の曲り角
地
天
曲がり角過ぎて心に歌も出る
軸
角のある石で素直に流されぬ

俊路 倣子 喬水 清史 剛治 恭昌 健一 秀策 英子 霜石 さち子 権悟 満秋 宏章 雄々 妻子 大輪 水笑 保州 一風 晴翠 福田登美

恵まれた大地休耕田ばかり
くろくろと恵みの雨が地を濡らす
菜園の恵み行き交う垣根越し
子宝に恵まれ暖簾分けが出来
願いたつぷり恵万という名の孫がいる
ライバルの恵みと知った日のショック
傍らの不幸があつて恵み知る
陽の恵み蟻もわたしも生きている
恵まれぬ子らを案じるパンの耳
ブレーンに恵まれ今も名が残る
恵まれた顔でゆつたり天下る
恵まれて妻と欠伸をうつし合う
ふるりの恵みを今も忘れない
恵まれ過ぎた国に溢れりする驕り
恵まれた国に溢れりする驕り
深呼吸天の恵みを一人じめ
生かされて自然の恵み忘れない
平穏の恵みに誰も気が付かぬ
恵まれた友を攫った診断書
叱咤してくれる人あり恵まれる
恵まれた暮し足元見失う
道草の恵み戴く石仏

恵

み

伊藤寿美選



大吾 よしえ 晴翠 虹汀 みつこ 雄々 栄呼 たず子 鉄治 サト子 重人 しげお 風花 (南) 寿美 あずま (伊) 玲子 庸佑 英子 時弘 寿恵子 ツネ

タンボボが風の恵みをじつと待つ
遺伝子の恵みをもらうガン治療
ドナーからの恵みで命蘇る

陽の恵み風の恵みを忘れそう
恵まれた今も忘れぬ敗戦日

恵まれたコースを進む七光り
新婚二年愛の恵みの母子手帳

悪友万歳毒にも薬にもなれる
連投の肘に恵みの雨が降り

陽の恵みこぼれ種にも差をつけぬ
恵まれて育つモヤシの細いこと

種蒔いて慈雨の恵みに掌を合わす
子宝に恵まれ脛をなでている

種を蒔く天地の恵み信じつつ
天と地の恵みうっかり忘れがち

住
恵みの雨恋する人と傘の中
ひと雨の恵みに花が咲き揃う

いやされる恵みいだく花の寺
試歩の杖少しのばした陽の恵み

年輪を重ねて神の恵み知る
人

恩恵に皮一枚が残される
地

無縁仏へ桜は花の布団着せ
天

あたたかみ残して席をゆずられる
軸

連休の無い地下足袋に雨が降る
塩路よし

正 旋
風 子
美代子

志 洋
柳 弘
霜 石
輝 夫
宏 章
慕 情
多賀子
修 島
剛 治

た え
螢 子
朝 子
あらた
ちかし

大 輪
俊 子

隠す

楠見章子選

奥の手を持つているから恐くない
隠すには太い尻尾をもて余し
子が見てる涙を早く隠さねば
手品師に二重帳簿をつけさせる
座布団の下に本音は隠している
母親を泣かせた父の隠し芸
誰も気づかないカスミ草の本音
コゲ鍋をムクロのように隠している
男運隠して鍋焼いている
見付かって喜んでいくかくれんぼ
隠してるらしい目玉が落ちつかぬ
春風が上手に隠している孤独
ドラキュラのとても柔和な昼の貌
氷山の一角ですよそんなこと
葉隠れの恋を教えてあげようか

たもつ
シマ子
勇 太
さち子
充 子
たず子
鉄 治
修 島

み ね
彩 子
玲 子
狸 村
満 秋
風 花
隆 盛
度 子
保 州
あずき
典 子
みつこ
政 良
正 剣

英 子
タミ
勝 巳
弘 一
妻 子

玄 也
靖 巳
大 輪
桂 香

しげお
アキ
千 代
雄 々
ミツ子
重 人
扶美代
霜 石
螢 碧

地
岳 水

天
金 森 徳三

軸

上役のポケット鉛も隠れてる

不祥事を隠す身内の首が寄り

忍び逢い傘が一本ほくなる

温い部屋隠すところない鬼の面

自画像を隠して若い街に出る

貧しいが逃げも隠れもせぬくらし

へそくりはここにいますと額の裏

欠点を隠したあとが続かない

隠すほど所得があつて苦勞する

妻の目をつまく隠した盗み酒

背伸びして棚に隠した古い傷

寂しさを隠して軽いジョーク吐く

押し入れへ物放り込む不意の客

隠すことのスリル知らないヌーティスト

生年月日隠し通せる筈がない

遺産分けもう本心は隠さない

スキヤンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

スキャンダル仮名に興味そえられる

初歩教室

題 — シーズン

吐田公一

シーズンとはあることをするのに適当な季節、時節、旬のことをいい、春夏秋冬を使えば自ずとシーズンを意味する。これは幅広い用語であり、これを敷衍すれば句に拡がりが出る。つまりそのシーズンならではの行事・味覚・趣味・スポーツ等考えれば限りないほどの拡がりを持つ。

今回はそうした応用のつもりで出題したのであるがあらにはからんやシーズンの言葉そのものを用いた句が多かった。

題は必ず辞書で調べて応用のほども考えて欲しい。ただ注意すべきはその言葉の範疇を超えた解釈はひとりよがりとなり、この辺のニュアンスがむずかしい所以。

添削句

○風光り萌える季節を深呼吸

構えすぎの感じのする句

▽新緑を肺の奥まで染み込ませ

像山

○シーズンを山菜で知る過疎の村 無 緑
原句もいいが

▽山菜の旬楽しめる過疎の村

○あるのかい何か良い事シーズンで 秀 策
一見投げやりの句。できるだけ前向きな句を創るように心掛けられたい。

▽恵まれた四季を楽しむ夫婦旅

○年金はシーズン外し旅をする

年金はと、もつてきたのが失敗

▽シーズンを外しゆとりの老いの旅

○遣り繰りにシーズン活かし熟す母 輝 夫

下五が遊離している。

▽遣り繰りに句を活かした母の腕

○シーズンも近いし音頭喉ならし 修

音頭とあるからこのシーズンを祭とすれば、句が生きてきたのでは――

▽音頭とる祭へ老いの喉ならし

○シーズンのひとかたまりの名産品 敬之介

名産品を具体化すれば、鳥取の方だから

▽もぎたての梨が盛られた観光地

○シーズンに冷えた西瓜は夏の味 郁 子

夏の味とあればシーズンの語は不要

▽夏の味冷えた西瓜と冷むぎと

○肌露出事件の多くなる季節

肌露出事件の多くなる季節 春 江

この場合は事件とするよりはっきりと痴漢とした方がよいのでは――

○シーズンを過ぎて静かな観光地 藍
シーズンが（一語一語を吟味して）

○シーズンは本業がシーズンのものかも知れないが、通常は

▽シーズンは終りバイトもまた終る

○シーズンにドラマを見せる甲子園 タツエ

同じ内容だが

▽甲子園ドラマを見せる春と夏

○竹の子のシーズン競い競さぐる 美恵子

説明句。もつ少し奥行きのある句を

▽句の香が漂う老母の木ノ芽和え

○梅雨上がりが梅の恋しいビヤシーズン 純

梅雨明けでビヤが恋しくなったというだけ

の内容では句に味わいがない。

▽ビヤシーズン赤い気炎があちこちで

○山菜の便りに燃えてシーズンだ 茂 代

山菜とあればシーズンの語を省いてもいい。

▽山菜を宅急便でくれた友

○シーズンは終り高張る雛の箱 敏 子

雛といえは節句。シーズンの語は不要

▽雛飾り終って広い奥座敷

○孫たちが入学シーズン悩ませる トヨ子

悩む内容を具体的に。進学校のこととか、

金のこととか

▽孫たちの入学に悩むのし袋

○今年こそ入選したい絵画展 舞夢

原句はシーズン(季節)が詠まれている。

▽芸術の秋へ今年の自信作

○シーズンくれば律義にとんで来る花粉 慶一

上七をシーズンでとすれば上五に

○夕焼けとそよ吹く風と大ジョッキ 尚士

人間が詠まれている。折角大ジョッキと

持つて来られたのだから、夏の外廻りの苦

しさを表わすように考えては

▽夏バテへ氣勢を上げる大ジョッキ

○強者もシーズンオフはパパになる 純子

このような場合は待ちわびる姿を

▽シーズンオフのパパを待つてる子もママも

○シーズンオフユニフォーム脱いだ素顔見え 満子

六八五で語呂が悪い。前後を入れ代えたり、

工夫を凝らす必要がある。

▽ユニホーム脱いでシーズンオフの顔

○日本晴れ元氣印を山が呼ぶ つよし

上五は不要。中七も要一考

▽夏休みキャンプへ子等を山が呼ぶ

○春が来て野球シーズン気もそぞろ 宗明

上五に気もそぞろになる原因を詠めば

▽母校出るつきつき春の甲子園

○京竹ノ子さすがシーズン母の味 トシエ

中七の内容がいま一つ

▽朝掘りの筍料理母の味

○ガーデンング季節はずれの花元氣 サト子

下五がなおざりだったよう

▽ガーデンング季節はずれの花盛り

○桜満開むしろに座り花見酒 一步

当り前のことを詠んだだけ。説明句

▽いにしへの歌に酔つて花見酒

○シーズン待ちかねている釣天狗 煩惱児

シーズン在具体化して欲しかった。

▽鮎解禁わんさと並ぶ釣天狗

○安くなり季節外れの服を買つ 晩翠

上五が安直な表現。使い古されているが

▽バーゲンでシーズンオフの服を買つ

○桜咲くシーズン過ぎた無常感 ひさ乃

上五中七下五がバラバラの感が否めない。

▽ああ無常桜も見ずに逝つた母

佳句

ナイターシーズンビールの泡で氣勢あげ

魚釣りシーズンお出でとカナダから 泰雄

シーズンに孫に教える鮎の宿 志津香

冬ざれやシーズンオフの甲子園 賢治

行楽のシーズン妻と庭いじり てる代

ウインドーに一足早い海辺見る 好勝

シーズンを外して遊ぶ歳となり 章司

今シーズン一味違つたらに燃え 圭二

シーズンに命をかけた初燕 セツ子

健康の秘訣笑いと旬を食う 幸枝

結婚シーズン忙しく走るのし袋 トキ

GWも遊ぶ暇なし塾かばん 四三郎

積雪の中から球児は夢を追つ 賢

雪月花四季あいまいな輸入花 君江

野菜花シーズン知らぬまま育ち 梓

シーズンとなつて水着がはしき出す あきら

シーズンオフ手足のばして露天風呂 たえ

シーズンへうずうずしてるお洒落 芳江

きゅうりなすトマトに季なく味もなく 美弥子

刈入れの時には揃う核家族 喜子

食卓に笑い集まる初鱈 勤

人生にシーズンオフはないと父 宏子

定年後シーズンオフの風の中 紫

海水浴泳げぬ母も連れ出され 五月

(ユーモアのある句)

シーズンオフリフト名残りの風に揺れ 彌玲子

(名残りの風が効いている)

解禁の鮎に無人の駅が混み 彌玲子

(無人駅の着眼点に敬服)

シーズンが終ると値札赤くなる 智加恵

(下八数字が言い得て妙)

想い出の場所はシーズンオフがいい 和可

(着想表現共によい)

私の句

苦しみがやつと終つた花粉症



嘘のない嘘

―母・麻生霞乃のこと―

西村 梨里

娘である私が母を褒めるのはおかしいが、母は名文を書く。年中忙しがっている私は母を訪ねるでもなく、便りをする訳でもない。

（返事是要らないよ）の前置きで時折、母の片便りが届く。窓をさす月の光、虫の声や、せせらぎの音を聞きながら眠りにつく等々。

大邸宅の中の離れ屋を想わせるような文章である。家はマッチ箱、すぐ側には溝のような川があるが、坂道なので結構流れは速く音を立てている。秋になると、そんじょそこらの草むらで虫が鳴く。大邸宅を想像するのは読む人の勝手であるが、本人は思ったままを書いているだけで何一つ嘘はない。

母は何でも楽しんでしまふ。私が実家に居た頃、雑誌が出来てきて発送に忙しい時でも母の手はゆつくりである。

「遅いなア、私が三つする間に一つやね。」

「私はなア、楽しんで仕事してるねん。」

と相変わらず同じテンポである。あの雷のような父と永年一緒に暮らしていても喧嘩にはならない。

夕立は小気味よし君が叱咤も 霞乃

母は六歳で生母と死別し、父親との二人暮らしだった。そして、まだ肩上げの取れない頃から父の河盛芦村と共に川柳会に顔を出していた。芦村は明治天皇が堺へ行幸された時に行在所をした河盛家の分家の長男で、母親の眼鏡に適った何でもよく出来る御典医の娘を嫁に迎えていた。ところが、本家に嫁いでいた姉が不縁になって戻ってきたことから、母親は娘可愛さに、事毎によく出来た嫁に当たるようになったらしい。

芦村は財産を捨てて妻子と共に家を出たのであった。そんな事があつたからか、旧家と金持ちは大嫌いで、新しい考えの人であつ

た。霞乃には子供の頃から英語を習わせ、英語のために当時英国人が校長をしていたブール高等女学校に通わせ、卒業後も続いて英語専科に学んだ。永年のミッシェンスクールでの生活で、キリスト教が身についていたから何事があつても、生活のことを心配しない。それよりも川柳しかない路郎が必死になって川柳の文学的向上を世間に認めさせようとしている情熱に、文句なしに協力する気持であつたと思つた。

高給取りであつた父が「専門家なき世界は発展せず」と言つて職業を捨てて川柳一筋に生きる決心をしたとき、そんな大きな家庭の変化にも一切口出しした様子もなかった。母は体裁をかまう人ではなかったから、男物の一番安い格子縞の浴衣を買つて女の子も男の子もみんなそれを着せていたそうだ。小さい時は何を着てもわからへんからなんて笑いながら私に言ったことがある。成る程、私もそんなことは覚えていない。然しこれは女としては他人様の手前、余程の勇気が要るだろうと思うが、何だか面白がついているみたいである。母は何事があつても悠然としていたの。うちは貧乏だなんて思つたこともなかった。今思うとそれらしい句もないではない。

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンのこと

霞乃

蟹気楼と思ふ財布も人も樹も

霞乃

此癖を捨てたら形見何もし

〃

とは言ふ、他人事みたいで深刻さはない。母が眉を八の字によせているのを見たことはない。一番困っていたのは私が小学生の頃だったかと思うが、そんな事情も知らずに大きくなったと思う。なかつたらないままというのが母の方針で決して見栄を張らない。お茶がなければ水を呑んだらいいという感じで来客があつても近所でお茶を借りて来るような才覚?のある人ではないから父も内心びくびくものだったかも知れない。調味料がない時もあつたけれど食べないという日はなかつたから何と言つても父は大変だったろうと思う。

職業を捨てた時、ハワイの丁氏から経済援助の申入れがあつたが断つたそうである。それでは専門家を宣言した以上、父の面目が立たなかつたのかも知れない。一年目に(我生きてあり)と言つた。これは父の口から来客相手の話で聞いている。私は今になつて父の大変さは並や大抵のことではなかつたであらうことを思うとき、それ程川柳が大切ならなぜ妻子を捨てなかつたのかと思うと、それだけで泪が出てしまふ。世の中には妻子を捨てても好きな事をする人はいくらでもいる。父は一歳と三ヶ月で母親と死別し、母親の顔も

知らずに里子に出されて育つた淋しさが身にしみていたのだと思う。どうしてもそのどちらをも捨てることの出来なかつた苦しさ、それは父の生涯のうちで一番苦しい時代であり誰にも成し得ないことを成し得た喜びの中から「川柳は人間陶治の詩」であると言わたのではないだろうか。そして、この人間陶治の詩の境地を他にも勧めたい、広めたいと願つていたのではないか、これこそが父の大きな大きな夢だったのだと思う。

その後、日支事変の頃から堺の湊へ引越して数年間はこの地に住んでいたが、母には縁の深い堺であつたのに、全く無関心であつた。本家の前に新築されたと言ふ行在所も見えないまま、第二次大戦の空襲で焼失したそうである。戦後は世間一般と同様、誰もがそれなりの苦勞もあつたが、昭和三十年代は裕福とは言えないまでも、生活は落着いていたから、今も昔の物語である。

思えば母の一生は河盛家を振出しに有為転変であつたと思うが、母は何を言われても

「いいよ。地下鉄で新聞敷いて寝るから」なんて半ば本気のような冗談を言ふ。ケセラセラ(なるようになる)メエファーズ(仕方がない)とか(女賢しゅうして牛売り損なう)等好きな言葉なのか、よく言つていた。

交渉に邪魔な正直者を連れ

霞乃

母は自分の性格も何も彼もよく知つていたが変えようとはしなかつた。晩年はこんな事も言つていた。「人が生まれたり死んだりするのは地球が新陳代謝をしているのだ。私は何も出来ない人間だけど、地球の新陳代謝のお手伝いをしてるだけだと思つている」と。誰が言い出すともなく、母の米寿のお祝いをしよつというこゝで、兄弟姉妹が生駒に集まつた。

その翌年の誕生日に私が訪ねた時は一人前のお寿司を残さずに食べた。それから丁度一ヶ月目に兄は近所の囲碁倶楽部に行き、兄嫁は母に食べさせるイチゴを洗いに階下へ降りている間に、独り静かに息を引き取つた。

母は勉強家でもの知りだったが、もの知り顔はしない。怒つた事もない。我慢をしているわけでもない。世間知らずで皮肉を言われているかも知れない。生まれたまんまのそのまんま、まるで隠れん坊でもするように、「さよなら」とも言わずに去つてしまつた。母らしい最期であつた。何もしない人のようであつて、思えば女には珍しく偉大な人であつたと思う。この母があつてこそその麻生路郎であつたと思う。枕許にはいつものように小さな机の上に辞書が置かれてあつた。

私の川柳

川柳は
十七音字中心だと
路郎は言った

桑原道夫

麻生路郎は、川柳をこのように定義した。
「川柳とは人間及び自然の性情を素材とし、
その素材の組合わせによる内容を、平言俗語
で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人
間陶冶の詩である」(『新川柳講座』昭和二十
三年六月十日発行)。「川柳とは何か」(昭和
三十年十一月十五日発行)では、この定義の
あとに、「大たいこの程度のものであると言
うワクを示したに過ぎない」と述べているが、
私がここで注目したいのは、「十七音字中心」
ということばである。路郎は、川柳を五七五
の十七音だと限定しなかった。「句はその人
のころである。十七音字はその人の姿であ
る。リズムはその人の呼吸である」(『新川柳
評釋』昭和十三年十月十五日発行)のことば
どおりに、「十七音字中心」の川柳の可能性を
追求した。この小文は、そのことを、路郎句
集『旅人』(昭和二十八年十一月三十日発行・
一一一〇句収録)の中に、十七音以外の句が

どれだけあるかを調べることによって再確認
しようとするものである。
まずは、左の表を見ていただきたい。

七 七	下五		中七		上五				音数
	下七	下六	中六	中八	上十一	上九	上八	上七	上六
31	5	4	2	14	1	2	6	55	91
	9		16		155				計
	3.3		5.9		57.6				%

七 七				その他			
六八	六九	七八	八七	二十	二十一	二十二	二十四
4	1	3	2	7	8	11	13
41				48			
15.2				17.8			

一番上の欄の、上五・中七・下五は、その
部分が定型外の音数になっていて、その他の
部分は定型のもの。例えば、

日あたりのいいうちだが／物足りなさに
／変りない

上五が十一音になっているが、中七・下五は
定型である。(／は、分かち書きであること
を示す。以下同じ)

子よ／妻よ／ばらばらになれば浄土なり
中七が八音になっているが、上五・下五は定
型。

ああ僕も／汽車を下りに／ゆくところ
なし

下五が七音になっているが、上五・中七は定
型。

一番下の欄の％は、十七音以外の句、二六
九句に対する割合を示す。例えば、上五の部
分が定型外の句は、一五五句あり、十七音以外
の句の五七・六％を占めているということ。
七七型の句が路郎作品に多いのは、周知の
とおりである。

二階を降りてどこへ行く身ぞ
『旅人』冒頭の有名な句。今回の分類では、
発想が七七型でも、全体の音数が十六音以上
のものは、その他に入れた。例えば、

空は晴れたり／蛙の平泳ぎ

発想は七七型だが十六音なので、その他の音
数十六の中に入れている。

集中で最も音数の多い句、二十四音の句は

次の二句。

あなたにプラスにならぬのなら／考へる
わと／女

分かち書きによって音数を見ると、十四・七・
三の形。

てんでこてんでこ／妻の櫛をけ／見て
いる雀

同様に音数を見ると、八・九・七の形。

『旅人』の中で十七音以外の句が二六九句。
収録句数が一一〇句。二四・二％、四句に

一句が十七音以外の句なのである。実は、私
の勉強不足で読みの定めがたい句が数句あつ
た。例えば、

船は行く行く戀人の顔小さし

下五を「カオチイサシ」と読むのか、「カオ
チサシ」と読むのか、判断できなかった。そ
のような句は数には入れなかったため、十七
音以外の句の割合が低くなることはない。

今回このような調査をしようと思ったそも
そのきっかけは、上五は崩してもよいが、

中七・下五は守らなければならない、という
考えが昔から川柳界に根強くあつて、それに
対する疑念を長年抱いていたことにある。む

やみに崩すのはよくないのはわかるが、絶対
守らなければならないなどという意見に対し
ては、何を根拠にそうおっしゃるのかと、反

発を感じていた。むしろ、中七や下五の字余
りの効果を積極的に考えるべきではないかと
思っていた。例えば、路郎の最晩年の句。

死はゆらく文楽人形に死はゆらく

中七の部分が九音になっているが、ゆつたり
とした文楽人形の動きの背後に死を垣間見た
この句に、リズムの上からもびつたりと合っ
ているのではないか。あるいは、『旅人』の
次の句

木綿着ておごそかな父になりおほせ
父として／エスカレーターの／先に立ち

自嘲している父の暗鬱な気分が中八によく表
れている。

路郎作品に十七音以外の句が多いことは感
じていたが、これほど多いとは予想していな
かった。同時代の他の作家に比べてどうなの
か調べてみると、十七音以外の句が多いと
断定するのは早計かもしれないが、路郎の、
川柳は十七音字中心の詩だという考えが終生
変わらなかったのは確かだ。『旅人』の中には
十七音の句でも五七五の発想とは違う自在な
リズムの句があることを付け加えておく。

最後に、辞世の句を挙げておく。内容の切
れ目で音数を見ると、十二・八の二十音。こ
れも十七音以外の句であつた。

雲の峰という手もありさらばさらばです

本社 六月句会

六月七日(水)午後五時半

アウイーナ大阪

日中は真夏のような陽差したが、雨期に近いことは確かな六月句会には、百名の参加があり、定刻開催された。まもなく小出智子さんの忌が巡る月でもある。

はじめに五月十日逝去された参与・林荒介氏の御冥福を祈り一分間の黙祷を捧げる。

お話は紀の川で産湯を使ったという紀州っ子の木本朱夏さん。明るく澆刺とした口調で今、何故自分が川柳をしているのか、きつかけ等について話す。幼い頃より読書好きであった。詩、短歌、俳句をかじった挙句、川柳に行き着く。十年余り前、和歌山放送の一時間番組のパーソナリティーとして、川柳の話をも存分にした貴重な体験もある。川柳の人間に対する愛と、出合いの喜びを知り、仕事のカタワラ旅と川柳を楽しんでいると言っ。

月間賞は西出楓楽さん(大阪市)に輝く。

(司会)遠野(記名)月子・澄子

(受付)美代子・寿美・森子

席題「あじさい」 西口 いわゑ 選

七彩の想いがめぐるあじさい忌
雨を待つあじさいはまだ薄化粧
亡き人と重ねあじさい思はれる
あじさいに花のこころを聞いてみる
忌はめぐりあじさい色の師を偲ぶ
点滴の妻へあじさい咲く話
小学校のあじさい蛙ひきたてる
むらさきのあじさいだった雨の朝
あじさいも私も女盛りなり
あじさいの切手で届く母のふみ
あじさいに化ける極意を聞てみる
あじさいの雫にぬれる花の道
絵手紙のあじさいもする七変化
あじさいが咲くと差しくなる蛇の目
あじさいと海峡わたる人を恋う
病み上りあじさい色に身を包み
めぐりきた忌に手向けたいあじさいを
あじさいの蕾に雨を待つ鼓動
訳のあるひととあじさい美しい
あじさいと地蔵があそぶ矢田の寺
あじさいはおんな四十の艶で咲く
あじさいに挨拶をして今日嫁ぐ
いくたびの愛に応えたあじさいか
あじさいの花の心にみるあなた
あじさいが記憶のなかで映えている
あじさいのような妹だから好き
あじさいの花にうつり気見せられる

美代子 倫子 房子 洞庵 柳弘 正一 茜 哲夫 昭子 雅文 修 一歩 楓楽 澄子 文 春 たす子 重人 朝子 保子 天笑 千里 美智子 寿子 紫香 笛生

知ってるかい君あじさいの花言葉
あじさいの咲く頃会うと言う便り
あじさいの雨に流れた恋ひとつ
あじさいの彩に騙されないように
あじさいに聞いてもらった悩みごと
佳
あじさいで愛の深さは計れない
あじさい一度真つ赤に咲き給え
あじさいはきつと女だぬれて咲く
あじさい忌あなたの花が咲いている
酔ったふりしてあじさいの側にいる
人
あじさい思いまだ返せぬ恩がある
地
あじさいも僕も自分の彩で咲く
天
あじさいの絵手紙初夏を連れて来る
軸
あじさいのおしゃれ上手をお手本に
兼題「ほどほど」 川上大輪選
ほどほどにせんとしまいにぼろがでる
ほどほどにせんといのちを奪われる
ほどほどなんて今日は駄目です酔うつま
ほどほどにしときなはれや盗み酒
ほどほどに盗伏せるむつかしさ
身を守るほどほどの嘘考える
ほどほどのお湯につかって出世せず
付き合いはほどほど腹を読んでから
三男 稚代 房子 諷云児 天笑 勇太 大輪 修 靖巳 一步 千里 金太 正坊 剛治 螢 かりん 利武 隆盛 睦子 文 金太

燃えているのにはほとんどで聞く相手
 はほとんどのどこにコヒー館がある
 レシビよりほど良い母の目分量
 はほとんどにしとくうんざりせぬうちに
 はほとんどにしとこわしたしも還暦や
 はどのお布施お経が知っている
 はどに鱗をまとい生き延びる
 はどどの遺産へみんな寄って来る
 はどどの財布で破目がはずせない
 はどどの期待にしと蛙の子
 子に持たす夢重過ぎず軽すぎず
 はどどの暮らし溺れていませんんか
 はどどの忘れ上手な句読点
 はどどの縁談一度のつてみよ
 はどどの愛がついて倦怠期
 はどどの毒にすこし馴らされる
 義理欠かぬ程度に老いののし袋
 はどどのに残り火燃えている余生
 はどどの盛ったごはんは残さない
 その辺でいだろう祖父の助け舟
 三代ほどよい距離をわきまえる
 はどどのにしとこ傷つく人が出る
 手を打ってわが人生はこれくらい
 はどどのにせんと親かてキレまっせ
 はどどの出来ぬ男の向こう傷
 はどどのお世辞へ砂糖入れわすれ

佳 紫香 いわゑ 澄子 美代子 天笑 しげお 希久子 弥生 典子 洞庵 楓楽 千里 稚代 メ女 夕花 たず子 勇太 メ女 冬葉 正雄 洋 三男 鬼遊 セツ子 修 岳人 諷云児 寿子

ほとんどに見える眼鏡と掛け替える
 はどどのほどに時々立ち止まる
 はどどのを忘れたパンが焦げている
 人
 はどどのと言つから困る匙加減
 地
 はどどの幸せでいい鯛買つ
 天
 はどどの生命線に感謝する
 軸
 仏壇のメロンも丁度食べ頃だ
 兼題「ペール」 大内朝子選
 結婚のペールが父を遠ざける
 ペール一枚隔ててきついことを言う
 神の国のペールはあの日脱いだ筈
 木棺のペールはがせば神獸鏡
 霧のペールに我を忘れたアダマイブ
 ジンクスのペールを外す日の勇氣
 道頓堀の逢瀬ペールに霧が降る
 隠すからマルサがペール剥ぎにくる
 何時もいつも良い子になっているペール
 うそ一つペールに包み紅を塗る
 戒壇を巡り心のペールとれ
 整形は凄美人にしたペール
 だんだんとペールを脱いだ倦怠期
 片恋をペールに包み抱いている
 揚貴妃もクレオパトラも持つペール
 ジューンブライド過去は見せたくないペール

泰子 茜 正坊 シマ子 利昭 螢 剛治 三男 半蔵門 澄子 茜 一二三 隆盛 夕花 愛論 英子 雅文 昭子 寿美子 雅文 美代子

核というペールで日本守れるか
 ブライドが高くペールが外せない
 偽りのペールを剥がす向い風
 時代錯誤ペールはがれている総理
 自我かくすペールは少し厚くなる
 淡いペールで尼僧の過去が包まれる
 下手くそな嘘はペールから透ける
 最初からペールはずしたお付き合い
 頃合をはかりゆつくりペール脱ぐ
 ペール剥ぐように女房が強くなる
 まだ未練あるからペールかぶつとく
 同居した嫁がぼつぼつ脱ぐペール
 ペールの中の現実には厳しいぞ
 夜のペール下りてひとりの羽たむ
 ペール外すと世間の裏がよく見える
 生きてゆくペールと仮面使い分け
 佳
 虹色のペールの中に明日がある
 そして夏ペールを脱いでゆく女
 美しく拒むペールをかけながら
 ライバルのペールに覗き見た鎧
 情熱にペールかけると炎えてくる
 人
 善人にされてペールが外せない
 地
 花嫁のペールは明日を疑わぬ
 天
 告知からペールを脱いだ家族たち

金太 義 澄子 澁吉 萬的 鹿太 月子 伽羅 つづや 義 希久子 あやめ 文 諷云児 楓楽 泰子 弥生 森子 恭昌 瑠美子 諷云児 楓楽 弥生

たのしげなベール 余生のふと淋し

兼題「切る」 玉置重人選

胃袋を切った女とお茶を飲む
 絆バサリ傷口はすぐ乾く
 末席から切るには惜しい意見出る
 携帯を切って自由になりました
 切腹をさせたい首相の軽い口
 社の機密あとかたもなくシュレッダー
 縁切り寺に棲んでいるのは元スター
 紫陽花の一輪を切る手が白い
 値切るときは大阪弁に決めてある
 薔薇を切る赤い殺意を捨てたくて
 世相切るペン斜めから後から
 指切りをしたので夫婦になりました
 切り口は刃にあらずペンだった
 手切れ金動いて愛が過去形に
 正解は切り取り線の向う側
 縁が切れても葬式だけは言うてくる
 酒が出て話短くちよん切られ
 CTスキャン我が身のほどを知らされる
 女から切り捨てられる有難さ
 賞味期限切れた男がそばに居る
 ふつ切れたらしい煙草を吸いはじめ
 紙で指切つてうぬばから覚める
 キップ切るパンチの音が懐かしい
 怖いこと起らぬように縁を切る
 鮮やかな切り口 只者ではないぞ

螢 充子 庸佑 義 半蔵門 雅文 金太 三郎 義 森子 希久子 岳人 房子 遠野 アキ 保子 正雄 澄子 天笑 シマ子 寿子 勇太 一步 英子 寿美

竹光に切られた振りをしてあげる
 かすかな期待 封切る女文字
 慰謝料を値切る男が竹を踏む
 沢庵の切り口変る嫁が来た

世相切る言葉ばかりが溜まり出す
 息切れがしない程度に駆けている
 切り捨てた苦のシッポがついてくる
 悪人が切られないからまだ未完
 派出し切れれば活路が見えてくる

佳

再起する男は過去を切り捨てる
 介護する覚悟へ髪も爪も切る
 割り切ってみると頭が下げられる
 切り返すジョークに負けたなと思う
 見得を切り寂しい僕になつて

人

この枝を切ればみんなに陽が当たる
 切り札の賞味期限が切れている
 明日というひとりがりを切り捨てる

天

切れすぎる男敬遠されている
 軸

兼題「保険」 川島 諷云児選

生きていたしるしに満期保険金
 早よ死なな損やと思わせる保険
 保険屋がまっ先にくるボヤ騒ぎ
 賞味期限過ぎて保険に断られ

美代子 正坊 勇太 弘一 みつ子 文 寿美子 紫香 楓楽 鹿太 朝子 しげお 一風 ダン吉 みつ子 しげお 風 剛治 度 風

保険金前借りにして生きてます

怪しいぞ妻が保険屋呼んでいる

親不幸詫びつつ貰う保険金

介護保険やっぱお金貯めておこ

無事羽田かけた保険が惜しくなる

約款がややこしいから掛けてない

ガン保険 癌にならなきゃ損ですか

健康は宝と気付く保険証

健忘症に掛ける保険はおまへんか

拘留所で男泣きする保険詐欺

わか山を全国区にした保険詐欺

死んでから呉れる保険に用はない

遺言で生命保険に入らない

相続に早くも揉めている保険

証書出し妻が笑っている保険

どうしよう保険会社が潰れてる

介護保険制度も人もまだ未熟

親の夢学資保険にでんこ盛る

葬式代だけは保険で賄える

受取りの欄に迷いのある保険

保険とは人を狂わすものとなり

人間の弱さいろいろある保険

高額な保険で命ねらわれる

我が輩はノラ猫である保険ない

こつこつと終身掛けてこれっぽち

有難う亡妻の保険で生きてます

うれしくて哀しい満期の涙金

妻がこの頃 保険保険と言ひ過ぎる

長生きをしたくて保険やめにする

鬼遊 紫香 周信 ますみ みつ子 金太 あやめ 正坊 武庫坊 利武 三男 鹿太 三男 澄子 丹吉 伽羅 正一 隆盛 勇太 瑠美子 萬的 笛生 哲男 英子 アキ 泰子 洞庵 セツ子

裏切るかも知れぬ被保険者の首よ
保険屋はよく知っている僕のこと

佳

保険満期のちの補償ゼロになる
どっちもが元気で興味ない保険
長いこと掛けた保険がこれだけか
保険ゼロ僕は殺されないだろう
夫より先に死ねない保険金

人

保険屋が来ると吐きけがして困る

地

怖い怖い高額保険御免だよ

天

満期までに死なんと損をする保険

軸

眼科 歯科 外科と保険証いそがしい

兼題「冗談」

橘高薫風選

神様も冗談が好き万馬券

本当になった冗談夢のよう

冗談として失言に拘泥らず

冗談でしよう百まで生きて欲しいなど

冗談でしよう私のことをブスなんて

冗談を言わぬと体気遣われ

冗談で神国などと言っていない

冗談がいつまで続くゼロ金利

冗談にハイと答えるお人好し

冗談が思わぬ人の癪に触れ
冗談はすぐアドリブで返される

森子

天笑

いわゑ

月子

金太

シマ子

義

瑠美子

笛生

しげお

照子

満津子

たず子

シマ子

利昭

英子

重人

鹿太

房子

冗談の球に当たって即死する

冗談じゃないなお医者さんの眼がこわい

冗談じゃないわと嫁が口火切る

冗談で和氣藹藹と合戦中

冗談と聞くか皮肉と聞くかだが

とびきりのジョークデートにとっておく

冗談で女を泣かす羽目になり

冗談で女を泣かす羽目になり

冗談ですごめん私は亭主持ち

建前と本音攪拌したジョーク

冗談にしてしまわねば負けになる

生きている事が冗談かも知れぬ

結末は冗談にして生き残り

冗談の傑作だろう歩道橋

セクハラをジョークジョークで切り抜ける

冗談を恩師が言ったクラス会

冗談に言ったら夫皿洗う

冗談とバラが大好きだった亡夫

冗談で懐工合探られる

冗談に好きだ好きだと酒を注ぐ

冗談へ真紅のバラを届けられ

冗談をじつと聞いているペルシャ猫

冗談はよせよ心臓止まるから

冗談はよしてこれから寝るところ

冗談で貸したお金と違います

冗談を中途半端にしてしまふ
冗談が本気になって走り出す

隆盛

倫子

あやめ

哲男

洋

天笑

笛生

修

章久

正雄

しげお

つづや

冬葉

鹿太

正坊

一二三

シマ子

アキ

泰子

高栄

かすみ

雅文

大輪

月子

義

半蔵門
いわゑ

冗談のようにほくろがついている

冗談で言ったメロンが届くなり

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

五月晴れ仁王にジョーク通じそう

第18回 夜市川柳大会

とき 7月29日(土) 午前10時開場

ところ 堺市総合福祉会館5F

お話 川柳塔社理事 八十田洞庵氏

「ドア」

「耳」

「崩れる」

「期待」

「星」

「掘る」

「猫」

「田舎」

「咲く」

「ルール」

◎各題2句・締切正午・欠席投句拝辞
会費 2000円 三才佳句に呈賞

京都 田中 笑風 共選

宝塚 嵯峨根保子 選

西宮 門谷たず子 選

和歌山 古久保和子 選

三田 北野 哲男 選

東広島 高橋 鬼焼 選

堺 河内 天笑 選

堺 小島 蘭幸 選

奈良 大内 朝子 選

八王子 播本 充子 選

鳥取 新家 完司 選

人

地

天

軸

西出 楓楽

瑠美子

義

（清記・希久子）



岸和田川柳会

宝クジ買って今年の運試し
 当らぬと思つていても宝くじ
 最後まで希望もつてるアミダクジ
 籤運が悪く女神も逃げてゐる
 サッカーくじ子供を出しに荒稼ぎ
 どの顔も夢を見ているくじ売場
 今年また花はわたしを裏切らぬ
 端数まで割勘が合う主婦の宴
 大きくて計算できぬ国子算
 三掛けの歳のつもりで生きて春
 計算の下手なお方が儲けてる
 ロボットで良かったらしい新総理
 合格に父さん別の苦を背負つ
 合格にママが泣いてる幼稚園
 甲種合格から自分史の扉開く
 三浪が元の子になる合格日
 入学金高い方には受かつてた
 冴えわたる突撃ラッパ耳の奥
 師の鉄腕の冴え見せ花菖蒲

敏腕の刑事に冴える第六感
追伸に優しさ残る冴えた筆
雲龍の襖に潜む古刹冴え
真剣の凄み殺陣師のわざが冴え
荒っぽいが円空仏のノミの冴え

苗代で蛙せわしいプロボーズ
枯草の中で呼んでる夕蛙
清流の風に河鹿の美声きく
独居には蛙の声も子守歌
雨模様蛙の声で急ぎ足
ふる里は蛙の声で目が覚める
蛙の子は蛙で欲しい老いの農
タ立へ蛙の歌がなつかしい
合唱の好きな蛙で仲がよい
春のメロディー聞こえて蛙目をさます

アサガオを今朝も数える夏の庭
石庭の空間にある小宇宙
雑草の新芽をよける庭簾
亀石の出土古代を語る庭
表札の女の名前消えている
表札は亡父のままなり老母が住む
正直に生きた表札五十年
ローマ字の表札孫が先に読む
教科書を開いたまでは覚えてた
女人高野風に心を開かれる

北窓を開けて男よ飛び立とう
忘れたい過去の扉をまた開く
せめてもの慰み一矢ライバルに
せめてもの救いは事故もかすり傷
済まないとせめて一言いうて欲し

川柳若葉の会 宮崎

花活ける春の言葉が欲しいから
絵手紙のスマイルに友のくらしふり
京料理何より木の芽効いている
大学を出してのれんにそっぽ向き
物欲は消えぬわたしはまだ女
やっこさ食える年金はやあやし
この溝を跳べたら拍手喝采を
今日も幸せ白い御飯が食べられる
新刊の帯の文字から心澄む

どの顔も魔法の解けた終電車
ハイウエーの響き。先祖眠れるか
責任は自分で持てる一輪車
子は外車父はベグルで二度の職
操縦の過信車輪が軋み出す
火の車隠す老舗の店構え
懲りもせず前車の轍を踏むトツプ
移りゆく車窓に溶ける国説り

湖正庸 文頂猪 愛ば論
風博佑 秋郎は

宮崎シマ子報

保州報

美子 章子 桂香 鉄治 三千子 さち子 利治 栄之進

才能を培っている無名塾

逆縁の名を彫る石のさむい貌

少年Aがまかり通っている矛盾

顔と名の記憶の線が切れている

有り難や残念賞に名が出てる

肩の力抜いて饒舌国説り

夜遊びになると風切る肩と顔

肩書きをお風呂で脱いだおとさん

リフォームの肩に昔がきて止まる

肩で風切った昔の余波が来た

誠実が肩書きだった父傭ぶ

いい人である一生は肩が凝る

肩書きを外せば不精髭伸びる

上げ底の話してから肩が凝り

一升ビン君の撫で肩なら愛す

肩肘を張って寂しいやつこ風

スタートはマのおなかで聞くシヨパン

どنگりの群が温くて飛び出せぬ

母と子のスタートだろう母子手帳

スタートで出遅れ努力あとを押す

スタートの雑魚も夢見たトップの座

城北川柳会

川久保陸子報

ダイオキシン煙突高くしてすむの

一雨に冬木の梢さわき出す

老いてなお男女の仲を囁かれ

ショッキン事件児童の銃乱射

梅さくら私も元気に咲いてます

我が命天にまかせて楽に生き

昭枝

朱夏

町子

次根

正圃

健三郎

豊太郎

かず子

公子

マリ子

和代

伸二

当代

佳世子

和子

正一

碧

登美代

千秀

起世子

嘉平

登美子

高栄

政子

達子

とし子

東雲

青春の十年国に預けてた

露天風呂シルバーの夢おとらせる

変化球投げたい亡夫は夢の中

土産より元気が欲しい老いの旅

声出して笑えば胸のつかえ取れ

春来たて告げるくき煮が神戸から

雨の音帰りのおそい子を案じ

幸せは本音話せる人が居る

遺産分けうすらぐ絆ともつれ糸

強がりと言っても老母の丸い背な

ああこんなところにも青いテント村

春の足音蕾はいのちふくらます

酸欠で蛤口を開けてくる

尻尾切るトカゲのように生きられぬ

栄転の辞令家族を引き離す

幾重にも古文書包む油紙

ここだけの話が春の風に乗る

飄飄と流れる川に迷いなし

あいまに出来ぬ気性がうとまれる

丸く研ぐ米のいのちは我が命

笑い袋沢山持って世を渡る

涙出るほどに笑った日の家族

見え透いた虚栄を包む熨斗袋

リストラのシヨック隠して縄のれん

高槻川柳サークル卯の花 川島颯云児報

面影を抱きしめて見る月の冴え

面影を追えば哀しい螢気楼

面影を追えば乱れてくる夕陽

ただし

トヨ子

寿美子

はじめ

みえ

あい子

久留美

道子

春蘭

志華子

あやめ

一枝

昭子

朝子

藤子

史風

千歩

陸子

倫子

千里

典子

順三

白峰

公一

泰雄

重人

澄子

小町だと言われた頃もある白髪

勘ぐりは止そう彼女を信じよう

勘のよい妻のテリトリから逃げる

まっすぐに歩いていきますばくの勘

決断に母の一言はすい父

土壇場で私を迷わす春の闇

すがりたいところ迷わす自尊心

襟足の艶に迷ったところおとこ

迷いからさましてくれた父の檄

銀輪の風で青春ひき戻す

自転車車の幅が小さくなる

自転車車ルンルン渋滞ご免やす

自転車車を杖に八十路の母達者

うつとりと鏡の中にいるわたし

ナツメロをうつとりと聞く余生かな

佳句地十選 (6月号から)

岸本宏章

残り火を他人フー吹きにくる

考古学やがて原人にも会える

赤いバラ買つてわたしに喝入れる

氣立ていい嫁で魚が捌けない

正解がいくつもあつた母の胸

すぐ頭下げて夫を掌にのせる

川底を流れて丸い石となる

俗っぽい話はよそう花の下

包丁のリズムどうやら晴らしい

自分史の本音へ迷う削除キー

慶太

吉之助

節子

五月

活恵

賢子

朝子

庸佑

満寿蔵

晴美

柳宏子

スミ子

秀夫

義一

典子

静風

楓楽

和枝

絢子

さと美

正坊

克子

純子

千歩

楊貴妃をつつとり見上げる通り抜け
うつとりとさせて踊った玉三郎
風呂上りうつとりさせる若い肌
うつとりと見とれているがゼロの数
権利無く義務だけ背負う定年後
俺の余生占うように桜散る
肩書がついて家庭が遠くなる
口下手だが手紙はうまく書いてくる
涙もろくなつたとい鬼が申します
人間は時に悲しい嘘をつく
花ばさみ春のリズムで喋りだす
三寒四温花はためらいながら咲く

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

稲子 紫香 よ志子 あやめ 治三郎 波留吉 武庫坊 鹿太 靖巳 風云児
まさる 文仙 かおり あきら 治延 吟笑 マツエ 寿々女 坊太郎 八重子 輝夫 勝 放任 ひかり よしみ

墓掃除孫の話もして帰る
炎天下一つの雲が傘となり
話聴くだけの会議へ顔を出す
早い者勝ちに女の目が光る
味噌豆が煮えて話題は亡母のこと
塀の裏負けずと育つ草がある
垣根越し噂話に花が咲く

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

チカエ 正雪 く子 はつ恵 貞月 なみ子 いさむ
實 とき 晴翠 水笑 輝夫 勝視 幸夫 高明 虹汀 四郎 正剣

山坂を越えたあつんの呼吸なり
唸る程お金廻って来て欲しい
縁があり母の娘になりました
おおきにと妻に言う時決めてある
あどけない笑顔がうんだヒット曲
笑う遺影遺産は俺の臓器だけ
神様がくれた笑顔の孫を抱く
おでん屋の縁でそれから無二の友
幸せは夕餉を囲むいい笑顔
焦点がぼやけて唸り声上がり
知りつくす妻の笑顔に裁かれる
いい女いい笑顔して春迎え
熱くなるムードおきにおぼろ月
唸つてるとしか思えん君の唄
咲いて散る桜も僕の縁だろう
一行の詩が万人を唸らせる
年金が生きているかと八十路
庭下駄のどこまで行つた臘月
すばらしい笑顔月桂冠のせる
夕食の皿に笑顔が盛つてある
面接の笑顔作っているトイレ
旗色の悪き唸って許している
ライバルにまだ届かない棒グラフ
若者を唸らす無茶な年金法

竹原川柳会

時広

柳昌 かよこ 芳香 川童 美花 章久 青道 一風 鉄心 比呂志 希久志 敏 朝子 まつお ダン吉 一歩 三十四 本蔭棒 醉虎 笑風 金太 柳宏子 重人 柳弘 柳幸 年子

— 109 —

京都塔の会

都倉

求芽報

執着の色のこす五色豆

ありきたりの挨拶でよい春の雲

お互いに知らないことがあり夫婦

有珠山の怒りは神の言葉として聞こう

すんなりと高価な物を買うてはる

蘇州夜曲がせつなさせる遠い春

広辞苑夜けて暇を弄ぶ

うららかな陽差し背に受け植える茄子

うららかな小川にめだかもつけない

絵手紙がうららかな春つれてくる

幸せ速くてもつららかにしていよう

ひき出しをいっぱい持った友がいい

わが友は皆どんぐりの背くらべ

友情のぬくさにふれるレモンティー

けんかした友と逢いたい途中下車

花束を贈って友と讃え合う

落ち込んだ友を励ます肩叩く

鯖の背の青さに病んだアレルギー

アレルギー本心少し隠そうか

母の部屋の匂いに弱いアレルギー

日の丸にシミ消え去らぬアレルギー

得手だったそろばん今も使ってる

算数は得手 商いはとんと下手

得手不得手補い合つて来た夫婦

すみません得手な料理はありません

得手はなし働き蜂で生きてます

人付き合い不得手で生きた半世紀

春蘭

ただし

庸佑

美穂

達子

年代

武庫坊

ルイ子

求芽

正坊

礫

宏子

吉之助

百合子

メ女

美智子

紫香

英一

葉子

豊次

典子

高栄

柳宏子

益子

幸代

満子

得手勝手通した父の大きな手

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

銀行を国がリハビリするらしい

独身の蝶々が一羽飛んでいる

正念場三下り半をつきつける

リハビリへ励む我が子の杖になる

リハビリで戻つた足を抱きしめる

正念場膝がふるえておさまらぬ

春爛漫じつとなんかはおしておれぬ

正念場峠越えれば幸がある

じつと耐え男大きな花咲かす

宙返りしたくなるよな春日和

正念場に天狗の鼻は折れ易い

爪弾きしわい男は損をする

入れ歯でもしわい文章噛みしめる

リハビリの辛さお前となら耐える

正念場命をかけて嘘をつく

月よ動くな僕が梢を渉るまで

正念場おがむ頼むと人任せ

正念場まずは小便してかかり

リハビリで死んだ手足を呼び戻す

期待して大器晩成じつと待つ

人脈の太さ正念場で生きる

正念場越えて男の眼が温い

一人立ち出来てリハビリ目に見える

リハビリに耐え抜き太い樹に育つ

正念場男は退路断つておく

実印を持って乗り込む正念場

芳子

洋々

鐘旭

日の出

徹子

茂登子

喬水

一瑤

三津子

一京

健一

忠良

益子

行男

鬼桜

彰夫

のり代

茶人

(栄)昌子

悦子

美雪

由美子

初江

(出)昌子

康博

穀

点滴準備ナースの手元じつと見る

川柳は胸のリハビリかも知れぬ

旗を振るあなたへじつとしておれぬ

リハビリの杖とすすがる妻の肩

川柳ささやま社

酒井

もれない橋を渡っている最中

人混みが好きで一杯ひっかける

休んだらあした怖いノンキャリア

ゆつくりと休みがほしい花便り

お休みがいるのは五臓六腑かも

黒髪の前まで休み雨の午後

装った気楽な背なが泣いている

思い出の皿と暮して半世紀

分け合った苗でご近所同じ花

リストラで休みたくない休み来る

気楽だと言った仮面が外せない

一周忌好きに生きますすみません

本気の気休めもらう嫁の声

うぶみ川柳会

上田

ちよつとだけ派手を残した仏様

死に神が来るまで派手にする演技

四角から溢れ出てくる赤い花

幸せをくらべてすこし派手を着る

野に咲いて派手さ加減を心得る

本当の派手さは空と海にある

身の丈に見合う派手さよ犬ふぐり

庇われて居るとも知らずうろづいて

宗明

春名

美恵子

孝男

靖子報

純子

恵美

多美子

美智子

八重子

とみ子

つや子

かほる

君代

毬子

房江

可住

靖子

宣子報

登美枝

華子

和歌子

螢

葉士人

健一

ひろこ

ふり捨てたひとに庇われ生きてゐる
 両方を庇い切れない傘である
 野良犬が僕を庇ってくれた朝
 庇うにも限度と友も背をむける
 なんとなく派手な噂は春風か
 そのうちきつと値が出る鬻餽
 病む人に言えぬ言葉がきつとある
 読みかけのまんまできつと死ぬだろう
 きつと咲く花もわたしはいま無口
 横文字にシルバー頭脳くたびれる
 そよ風に字を書くように柳ゆれ
 頭文字隠したつもり字が喋り
 一字一字迫りながらも読むマンガ
 ローマ字が国境線を塗り潰す
 あちこちに介護の文字が目にとまり
 老母からの金釘文字は風邪ひくな
 一枚の鉄の扉のおかけさま

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

天雀 芳江 一夫 天人 静生 雄人 美ツ千 美子 良男 くに お 雅女 あづま 黙光 也恵 孝男 宣子

妖しげな証拠を月に握られる
 どれひとつ同じ形はない葉っぱ
 若葉萌ゆばんやりしてはいられない
 さくらんぼ葉かげで頬を赤らめる
 天命を果たし病葉土になる
 散る桜そろそろ準備しておこう
 そろそろと自立を思う柏餅
 少年の闇にそろそろでは遅い
 背中押す風がそろそろ吹く頃だ
 そろそろと行くが河口が見えてくる
 喜劇にもそろそろ飽いてきたピエロ
 興味本位に補っているトップ記事
 痛かった頃がなつかしい傷もある
 芽が出そう配っておいだチョコレート
 核家族いずれ無縁の墓地を買う
 有珠山も妻も噴火で近寄れぬ
 花筏逢いたき人の許へ行け
 枝豆がおいしくなつて出る頃だ
 旬のものを食べて人間らしくなり
 そのうちに忘れてくれるのも他人

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

晴美 正坊 いわゑ 義子 諷云児 ルイ子 澄子 富喜子 比ろ志 武庫坊 鹿太 萬的 求芽 周信 無禄 五月 昌子 トミエ 千代 しげお

ほのぼのと喜びを知る退院日
 肩パッドとれてはつとする女
 通学路また賑やかに休み明け
 子雀が羽ふるわせた餌をねだる
 十七歳が居ますほのぼのなど出来ぬ
 どぶ川の底から鍵が光つてる
 完全犯罪鍵の指紋を消し忘れ
 ど忘れの母の笑顔が憎めない
 ごめんねが素直に言えず肩を揉む
 鍵穴で思案している善と悪
 ど忘れもええと今聞きすぐ忘れ
 孫に似たガイド老人会のバス

川柳塔鹿野みか月

土橋

哲嗣 美智子 六浦 弘治 夢之助 正治 満寿蔵 澄子 十四郎 柳宏子 紫香 螢報 完司 八重子 野草 宣人 諷風 隆風 かつ乃 幸枝 武子 弘子 睦子 くに子 みどり 八重

大地びしびし噴火する地が裂ける
びしびしとやり過ぎすべて仇になる
健康法びしびしやってああしんど
ひと筋の愛はびしびし鞭になる
人形が眼差し変えて待つっている
リカちゃんもウルトラマンも眠っている
人形がじっと話を聞いている
ブランドを人形さんに着せ替える
議席からあくびしているお人形
首たてに振る人形が多すぎる
お巡りさんの人形に最敬礼
人形の代りにされたひとりっこ
人形になってみんなと住む宇宙
人形に息吹きかけたのは風か
離人形よいのちが惜しくなってきた

川柳会裂花

石上

悦子報

お供えは手作りおはぎ墓も微笑み
待っていた甘いおはぎで腹摩る
今年からおはぎ届かぬ義母は近く
童心にもどり仲よくなる夫婦
事故多発旅はやっぱり鈍行で
茶わん酒うつも怒りも飲んで
パチンコへ銭を運んでいる蟻よ
まむし酒効いて家内に噛みついた
母の影が消えたわ軽い鳥になって
太りすぎ食うは食べるは春あさる
うっかりと花に触つてアチチチ
聞かぬふり過ぎた昔の事だから

富久江 実満 節子 汲香 茂 みさ子 久枝 和子 喜与志 小 鹿 はお 孔美子 きみ子 ひろこ 蟹

犬ふぐり地に満天の星を置き
少し素直になろうなろうという甘さ
湯気立っているうちというおもてなし
日本の桜に武士はもういない
岬には人差し指が立っている
いい皺で母がやさしい顔になる
やさしさを嫁にもらって日々好日
病名をやさしい嘘で包みこむ
タクト振るのもやさしい顔をして
頬の風やさしいうちに旅に出る
千円も一万円も紙である
紙オムツ介護するものされるもの
終章を綴じる紙縫りを堅く編む
紙コップ短い縁だと思つ
いい声で良く鳴く鳥を選びます
介護保険よりもポックリ寺がよい
選別をされてひよこは鳴くばかり
簡単に選んでくれた僕の服

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

春を未だ遊びたりない陽が沈む
マージャンの目つきはすでに遊びこえ
豪快な社長に遊び仕込まれる
遊び人と宣伝したらよくもてる
五月賞馬券はさんざん紙吹雪
上司の悪口さんざん言つた縄のれん
伝言板さんざん待った字が怒り
さんざんに期待持たせて左遷とは

高 栄 きみ子 ただし 忠良 和歌子 章久 真砂 美恵子 千 梢 求 芽 幸 子 園和枝 陸 子 東 雲 節 子 よしえ 芳 光 森 子 たもつ 柳宏子 弘 直 のぼる 勝 美 東 雲 とみを 千 里

さんざんに遊んでいっぱい友出来る
さんざんに泣かされた人介護する
さんざんにこき使われて首かいな
指太く太く一家の黒い爪
さくら色ついでいいです君の爪
マニキュアの爪に火花が散っている
リベンジの女小さな爪を研ぐ
縁側で春一杯で爪を切る
ぬか床に脈々通う母の味
カルチャーへ褒めてくれはるから通う
水たまり選つて通園にぎやかに
これ以上通うと噂たてられる
血の通う返事納得して帰る
通学の鞆が重いおもしろ子よ
風の中ただ率直に生きる輩
率直に言い合う群に溶けている
諦観へ通う八十路の寺参り
率直な悪魔の声が心地よい
率直な子の目この子は大丈夫
率直に話せる上司飲み仲間
率直に詫げる少女の眼がきれい

はまゆう川柳会

中後 清史報

草餅に母の温みと野の香り
被災地に歓声上がる杵の音
健やかな育ちを祈る力餅
紅白の餅を配って喜尊尊寿
まんべんに拾ってほしい厄の餅
再起への意欲を燃やす退院日

弥 生 弘 一 幸 生 欣 之 太 郎 祥 一 春 蘭 ますみ 剛 治 己代一 度 三 男 ダン吉 洋 昌 子 信 博 宏 柳 伸 一 風 太 一

人知れず燃やし続ける片思い
燃やすには惜しい遺品を納めおく
一すじに燃える眼に魅せられる
転職に勇気を燃やす太っ腹
嫁入りの荷物喪服も持たず母
喪服脱ぎ行く末思いめぐらせる
今の子に芋とち餅は分かるまい
幾つもの涙が染みている喪服

南大阪川柳会

吉川

寿美報

生米子 国彰 修也 美佐子 サト美 佳子 雄造 清史

駆け出しのタクシー客が道教え
新人にわが駆け出しの頃を見る
物怖じをせぬ駆け出しのフリーター
駆け出しがスクープ追った勇み足
知ったかぶり又駆け出しの勇み足
駆け出しに長雨ばかりがつきささる
駆け出しの頃に出逢った今の妻
駆け出しとわかって変えるレジの列
春や春わしたは秋にダツシユする
インターネットそんな記号があったのか
甘え上手シャープをつけた鼻濁音
変換キー叩けば春になる記号
峻険へ地図の記号に救われる
一連の事件記号が謎を呼ぶ
いつの日か記号が増える宇宙基地
クレヨン画未はゴッホかピカソかも
水平線ブルーに染めるクレヨン画
指示通り携帯電話角曲る
携帯に指図されてる宮仕え

東雲 柳宏子 柳伸 寿美 章久 なぎさ 真砂 道子 和歌子 朝子 重人 憲太郎 正博 日出子 千里 雅文 幸子 志華子

徳依足が掛って重い腰
携帯の手帳こまめに拾うメモ
どじょう胸の腰ユーモアとソーモスと
逃げ腰を覗かせている口の先
署名簿を積まれてやつと腰を上げ
旅鞆携帯スリッパ忘れない
お日さまを黒く塗った子卒業す
駆け出しも即職力と期待され
クレヨンの色が足りない花畑
アンデスの象形文字に謎がある
石垣の記号は藩の代名詞

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

庸佑 久峰 楓楽 たもつ 文秋 寂子 修 直子 遠野 萬的 清成

ドナーカード誰かに続くこの命
死んだっていいなあの手が握れたら
犯人がそしらぬ顔でいる現場
文明の進歩きよろきよろあとを追う
地獄かくりの出来るカードを持つている
ジョーカーを引いても眉は動かさぬ
妻の手に何時も離婚といふカード
独り占うカードへ外は夜の雨
丸暗記するほど読んだラブレター
愛してる愛していいない揺れている
百万本の薔薇より庭のばらの恋
君の掌に戻る夢だく恋手毬
恋人のままでいようよさくらんば
恋解けて樹々はみどりを深くする
反対が娘の恋を加速さす
子が巣立つ夫婦の恋もよう一度

佐代子 愿 英子 富美子 大輪 武春 良一 萬的 鉄治 優子 桂香 寿子 圓公子 めぐみ 和重 よしこ

恋に溺れた息子へ投げる花筏
八十と九十の恋が道をゆく
老化防止にしようちゅうしてる淡い恋
恋心抱いて余生を生き延びる
恋蜜園の彼方に消えたり
けちん坊で恋の相手が見つからぬ
遠くから見るときめいたあれは恋
ピラミッド現場の声が届かない
精魂を込めた現場の技の牙え
事故現場見て来た舌がよく回り
香水で現場攪乱しておく
監視カメラの前できよろきよろしてやろう
議事堂の中きよろきよると政治揺れ
きよろきよると手の鳴る方を見る野心

サークル檸檬

小林

一夫報

こんなにやくのような男で疎まれる
京都まで来てこんなにやくのフルコース
こんなにやく問答七つの孫とおじいさん
母さんの腕がこんなにやくに華にする
持ち味が似てる私とこんなにやくと
こんなにやくは矢印どおり歩かない
こんなにやくが好きで男で無味無臭
コンニャクのような人先着だった
告白へ糸こんなにやくがからみ出す
すまんすまん言うて土足であがり込む
携帯電話あふれて約束が溜まる
慢心から振り子の幅が狭くなる
情報に隣の子供持つてくる

泰子 あき子 三男 さち子 稚代 豊太 紀美女 射月芳 和子 柳宏子 克子 保州 千寿子 高夫 正坊 房子 みつ子 いわゑ 靖巳 義遠 雅子 智恵子 あずき 希久子 澄子 哲夫

一本道なのに迷つてばかりいる

楓 楽

大原川柳社

矢内寿恵子報

千鳥足肩貸す方も千鳥足

はじ芽

危うい噴火前かも妻無口

あすなろ

身の危険恐れず底う母の愛

絹 子

老いの坂趣味にのめりしむ日の疲れ

静 子

合格へ家族揉みみの応援歌

昭 子

セーラー服揺る女の仲間入り

ひでの

危うく見てはおれない老婆心

たづ子

先頭で父は危うさ見せられず

はるみ

一合をあなたと酔つて春の宵

みさえ

生真面目にいそしんで来た腕の冴え

南 花

いそしんで生きた証の私小説

あやこ

いそしんで八十路を生きた素晴らしさ

さちこ

かと言って危うい橋は渡られず

玉 恵

巢立つ子へ危険は覚悟発車ベル

辰 江

授かった命危うさ耐えて生き

悦 子

雪山遭難危いことが好きだった

妻 子

いそしんで母古里を守り抜く

喜美子

慢心が危うく一段踏み外し

巴 子

世渡りは危ない橋があり怖い

こふゆ

危うくて母背水の陣を敷く

敏 子

火傷より火中の栗にある魅力

地佳平

吹けばまだ炎える火種が危なすぎ

寿恵子

川柳高知

川竹 松風報

幸せが伸びる寿命に追いつけず

幸 泉

背も腰も伸ばしのはばして母の袂

てるみ

たつぷりと保険を掛けて生き伸びる

愛 宏

決断を迫る未来はすぐに来る

哲 史

幼子の笑顔に未来つなぐ夢

和 江

未来より過去が重たい戦中派

美 々

貪欲に生きる未来に夢がある

千恵子

諸行無常土に還つてゐる未来

孝 雄

一寸の先は闇だと言う未来

幸 二

バラ色の夢見て嫁ぐ娘の未来

松 風

断層の数へ未来を聞いてみる

朱 坊

楽家悩みは顔に出してない

暖 功

孫帰り過疎の茶の間に灯がともる

京 子

その道に明るく裏も読んでいる

快 風

さよならを明るく言える訳がない

節 節

三世代同居明るい笑い声

節 節

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

言い勝つて帰る夜道に月が冴え

萬 的

名月を巡るように憎い雲

庸 佑

美しい月と別れてから気づく

求 芽

黒塀を月夜に走る猫の恋

一 笛

三日月が何所か佗しい春の宵

知香子

涙を秘めた亡母の微笑を知っている

きく子

あどけないスマイル和解にふみ切らせ

女 子

身を粉にして練り上げた家の蔵

ただし

練りに練り直して直して選に洩れ

見 清

象は鼻振つて構想練つてゐる

喜美子

練り過ぎて嘘がポタポタこぼれ出す

靖 巳

仲間みなおんなじ策を練っている

紫 香

灰皿を一ぱいにして練つた策

しげお

天井に呪文かけられ寝てしまふ

慶 子

天井を見るほかはない手術台

楓云児

謎深しとかく女というのは

正 三郎

老人の虫干し公園のベンチ

正 坊

騙されていると知りつつ親子

英 子

挨拶がいいねと孫をはめてくれ

寿美子

短目の遣り取りで済む老夫婦

周 信

血圧計はかりなおしているマンガ

重 人

友垣のはなびらがまた一つ散り

緑 骨

外孫の電話で母の日と気づく

石 舟

かわはら川柳会

上田 俊路報

サークルで明るく生きる未来まで

一 薫

チャイルドにかけた未来に児はもがき

寿 子

ふるりの未来をになう子がおらぬ

余更子

梅の香に地球の未来あずけたい

悦 子

河原つ子未来にひびく太鼓打つ

静 子

アニメから貰う未来を開く鍵

泰 良

児の大書未来に夢が光つてゐる

正 子

春日和愛の巣探すツバメ二羽

登 生

嫁探し孫抱く夢に今日も暮れ

ふじ子

同窓会往時の姿探し合つ

聴 路

名をなして捨てたブランド探してる

俊 路

岩美川柳会

石谷美恵子報

答弁に唸る質問出て来る

単 車

葬儀社の社長医学部出身だ

大 漁

算術は達者赤ひげにはなれず

忠 良

五月病寮生活が馴じまない

腰痛に医者は歳だと軽く言う

花冷えの蔭で唸って見たけれど

救急車唸る命が刻まれる

ビリビリときたよ惚け止め効きそう

月光のソナタ猫が恋をする

打楽器は嫌いだが唄は大好き

足の裏医師も気づかぬ金もつけ

仕事柄楽器の修理しています

うめばしが十個わたしの医療箱

うちの子はビリビリ育てあかんたれ

やんわりと急所を突いて唸らせる

可愛げのない医者にある人間味

絹糸が唸るすいれんの雨雨

ビリビリと人の情けを切る女

美しい指を魔法にする楽器

少子化の空から消えた鯉のぼり

楽器などいらぬ手拍子あればよい

スランプも抜けた五月の風に乗り

連休が明けてけだるい朝が来る

医者要らずアロエ信じる亡母といふ

川柳藤井寺

高田美代子報

歴史にはのらない亡父の靴の跡

舞踏会歴史になった黒揚羽

我が家にも照る日曇る日今がある

屋久杉の歴史に勝てる筈がない

次々と暴く歴史の遺跡出る

ご先祖様昔のようにいきません

蟹郎

徹

螢

静生

孝男

季芳

一夫

圭一郎

かつみ

洋

喬水

一京

一瑤

和歌子

きみ子

睦子

公乃

節子

裕子

たぬ

美恵子

六点

瑠美子

喜代子

重人

恒雄

栄一

落城の歴史を語る石の苔

千疊に明日香の歴史風の彩

耳なりのするような歴史が今もある

木の椅子がかたかたと鳴る歴史だ

意地悪が好き美しい人なのに

満天の星に明日の台詞など

席ゆずる少女の瞳美しい

美しい嘘で通してする看護

美しくなれると書いてあるお風呂

美しく洗って神様に還す

錯覚も誤解も詰めた化粧品

決心がつかぬ男の菜種梅雨

決心が切り取り線でまだ迷う

禁煙を百の賀状に書いて出す

決心がつかず迷路の中にいる

気忙しく決心促す風の音

取れるだけ取って別れる肚括り

会費一万出る決心を鈍らせる

決心も挫折も知っている故郷

タイエットの決心揺らぐ桜餅

決めました桜の花が咲いた日に

決心をしてから時計早くなる

決心をせよと背中を風が押す

追い風が促すように吹いてくる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

叩くほどの杭がとほしい日本です

叩かれた事のない子の親が泣き

叩かれて立派に出来たひとりだち

志洋

マサ子

終一

美代子

一簡

アキ

敦子

絹歌

利武

扶美代

和樹

大八

鐘造

かつみ

よしえ

雅枝

史郎

正一

婦美枝

桂子

昌子

悦子

昭子

葉

はるみ

恵美子

好栄

ちよえ

雲走る終りの見えぬ立話

立ち話レジはお客がまつてるぞ

立ち話好きな人です回り道

サイレンが鳴つても佳境立ち話

灰色の服脱ぎ捨てて新世紀

あばらやの屋根を叩いて通り雨

翠洋会

児玉

ふるさとの風にもらった元気で

奥座敷に通されてから失語症

春風と共に舞いたい浮かれた

腹割ってしゃべると風も味方する

喰べに行く話びつたり歩が揃う

少年の非行世相が軋む鬱

奥行きが浅くて嘘が宙に浮く

戻る娘に里の白い眼白い風

風力を巧みに生かす村起し

したいことまだまだあつて風をよけ

そよ風に甘い告白してしまふ

グローブにびつたり入る指示の球

格式がいまも厳然奥座敷

風に竹つ男帆のむき考え

晩春の風タンポポを旅させる

嫁姑二三歩ずつ風立てず

びつたりと計算合つて金足らん

占いのびつたりなんて信じない

悩むのはよそう五月の風が吹く

風のたより嬉しい話聞いている

D51も軋みはじめた古希の坂

はるみ

かつ子

聖子

博利

清泉

白汀

蛙報

千枝子

喜美子

舞夢

蛙

志華子

正雄

周信

恭昌

久峰

千歩

澄子

英千子

さと美

凡子

照子

叔子

東雲

春

正坊

千梢

靖巳

今日の妻嵐が吹いているらしい
 慕参りひと時渡る里の風
 奥の手があった筈だが出てこない
 親離れ子離れシーソーが軋む
 花筏風にまかせて流れます
 父権落ち平和な風が吹く茶の間
 よう似合うびったりやわと薦められ
 オイル切れた跡がある出勤簿
 留守と言え奥の方から声をする

敬老会昔の花がせい揃い
 茫然自失前のチャックがあいたまま
 人前で茫然となる癖がある
 じつくりと運命線を見ておこう
 散歩道大根ブライ長話
 散歩など忙しいのにやつとれん
 ぼうぜんとしてはおれない不整脈
 嫁さんを花に喩えるのはよそう
 ふと花が咳したような一人の夜
 余所の花壇批評しながら散歩する
 じつくりと山と話をして帰る
 人間の居ないところを散歩する
 只酒を飲んでじつくり腰据える
 死時刻はみんな一人で曼珠沙華
 花暦順番狂う温暖化
 じつくりと腰据え飲んで午前様
 花もよし酒も程々寝るもよし
 梨の花散つたら一目散に夏

倉吉川柳会

松本よしえ報

真砂 絹子 伽羅 義美 宣司 蕉舟 石遊 鬼遊

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

じつくりと待った甲斐あり嫁ご寮
 遠回りしても花は踏まない登山靴
 じつくりと聞けば敵にも一理あり
 一夜明けたら町が火口の傍にある
 じつくりと焼き物市を見て飽きず
 呆然と言葉失う突然死
 ハイテクで季節音痴の花が咲く
 竿やあー竿竹エー一緒に歩く
 散歩だと家を出たのは二年前
 呆然と見る堂々のキスシーン
 じつくりと充電をする外は雨
 じつくりと檻の中から人を見る

よしえ 喜美子 和枝 芳光 博丈 幸子 節子 和歌子 一夫 完司 睦子 次男

財布の紐こころ動かすことばです
 淋しさは財布を当てにされぬ時
 守札の門を使いぞめに待つ財布
 花疲れ財布の中もわたくしも
 旅先の土産は財布を軽くする
 僕と妻財布の中味桁違い
 親友を失くしたこともある財布
 ゆくゆくは一人ぼっちという悟り
 仲良しは悟りに遠い事ばかり
 悟れないぐらいい事は悟ってる
 何もかも悟って翁日向ぼこ
 負けおしみ悟ったようなことを言い
 悟られぬように笑顔でする看護
 悔しさを悟られまいとする笑顔
 あきらめが良くて悟った人に見え

螢 秋草 照彦 玲坊 ゆり子 かつみ 石花菜 季芳 玲子 克枝 天雀 雄々 賀寿恵 久子 きみ子 智子 喜美子 みち子

川柳塔おとり

原みさを報

不合格息子よ悟れ世の辛さ
 さざ波を渦巻きにした人の口
 気がつけば逃げるつもりが渦の中
 渦に距離おいて水平思考する
 激論の中で渦巻く個の主張
 人の渦にもまれ生気をちと貰う
 世の渦に巻かれて今の我があり

延命の薬はきつと愛だろ
 結局は漢方にした母の腰
 薬とも仲良くなった更年期
 熊の胆をのんで脳みそ刺激する
 薬にも毒にもなつて丸く住む
 高ければ効いた気がするエスカップ
 薬よりよく効くらしい子の見舞い
 くすりだと思つて飲めばきいてくる
 風邪ぐすり狂気の沙汰になろうとは
 お料理に薬味一滴こくを出す
 漢方に方針を変え腰さえる
 不景気にはしい総理の処方箋
 何より薬は妻のいい笑顔
 寝たきりでいてもあれこれ指図する
 はどほどに注意しない子がぐれる
 沖縄はうるさい基地のつじもらい
 生きるは四季折々の風に会つ
 新風を吹き込んでみる古い殻
 新緑の風が走らすランドセル
 家中を開けて風さんこんにちは

千里志 直次 博史 祥風 久子 緑骨 艶子 舍人 紀子 雄々 宏章 幸次郎 敦子 風花 庸二 義弘 彰雄 黙光 千秋 由多香 小生 孝子 邦昭 登美 仁子

そよ風にゆられて藤のぶらりんこ
夫婦して心のごみをはたき合っ
ちよとした心の隙にごみ積もる
原発のごみには触れぬコマーシャル
可燃物恋のなみがらそと出す
知育偏重心のごみが大あばれ
生きている証のごみを少し出す

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

ナイターの歓声聞きつつ夢心地
野球見にホカロン持ってさあ行くぞ
逆転でナイタービールほろ苦い
テレビみて一人で叫ぶナイター戦
巨人が勝っている寒いナイター
蝶の舞う花野はいつも子が群れる
翅閉じて蝶はひそかに風を待つ
ままごとへひらひら蝶のお客様
てふてふを追った野原は消えていた
蝶に聞く懺悔の場所とうまい店
定年で皮の手帳は引き出しに
手さぐりのミニ菜園に光る汗
余白なおまあるく生きる手をつなぐ
左手が少し甘えてばかりいる
手のうちを見せぬさくらが先に散る
海に出て病み呆けたる手を開く
ふる里がするする抜ける手の隙間
冷奴互いに白髪増えました
鳥かえる赤く大きな陽の中に
からっぽの頭を机がよんでいる

富貴子 清子 ゆきの 真一 雅通 和子 みさを
愛 節子 ヒサコ 正子 義芳 昌子 和子 糸子 富美子 孝一 一笛 夢之助 恵子 寛之 薫 美子 紫香 昭三 キク子

芽の吹かぬ鳥歳月は浅からず
森を出た少年着く濡れている
時計の音がだんだん高くなる余生
落ち椿鮮やかなるは偽りか
殴れなかった男コスモス束ねてる
HBを6Bに代え春の絵を
連休はエアポケットにいるわたし
花じゅうたん踏みつつ登る老人ホーム
応援で外でも判る勝ちと負け

川柳ねやがわ

江口

この道では新人古希を過ぎたとて
あっさり茶髪をカットして入社
新人らしくないポジションを狙われる
新人のくせに夫が居ると言う
すれ違ふ新人森の匂いする
玄関の靴でお客を見られる子
玄関のあかりほんやり老いふたり
女関のインターホンでする取材
おだやかな脈にのって花の下
美しい山脈が待つ都落ち
美しいナースに脈を乱される
山脈の向うに返す思がある
脈みやくと続く老舗のつつましき
祈る眼で脈診る医師を取り囲む
差がなくて選ぶは笑顔明るさで
懸命に歩く選んだ道だから
励ましの言葉を選っている見舞

年代 光穂 比ろ志 芳子 全彦 武庫坊 半蔵門 千恵 保夫 度報 文秋 秋 小 弘一 英士子 重也子 利昭 あやめ 亜成 恵子 波留吉 仁清 義雄 勇太郎 忠央 光子 洋

選択の自由もきかぬ籠の鳥
この道を選んだ悔いが少しある
開いたり閉じたり迷う傘選び
そこそこで手打ちにした嫁選び
選ばれてだんじりの屋根跳んでいる
風向きに合わせる隣へ言葉選る
成人式も目の中に入られず
ひと許すところに風が風いれくる
落し蓋母の秘訣をそとと見る
妻の留守一升瓶が横にある
大阪育ち河内音頭が唄えない
素性などいわず大器は花咲かす

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

余地がない席へどうぞと招かれる
乗る場所にいつもの人がいない朝
しみじみと歳を感じる朝の顔
戦慄が走る笑顔の十七歳
余生など付録のようでなじめない
食への見込み無の仕舞う余り物
ちようどいい布が余ってベアルック
七難を笑顔でカバーしています
朝帰り少し饒舌すぎないか
余すこと知らず増えく体脂肪
じやがいもがせせら笑った土いじり
流れ出る汗がビールを旨くする
初めてのお使い出来て泣き笑い
おすそ分け余り物ですとは言わず
リフォームで生まれ変わった余りぎれ

とし子 とし修 日出子 博泉 一風 ルイ子 朝子 庸佑 冬葉 時弘 絹子 笑子 街湖 政勝 嘉信 ふみ サト子 かず枝 為佐子 かつ子 句多留 鈴美 裕峰 和可 早智

今朝もまたリズムが狂う休刊日
 子の笑顔いじめ非行には無縁
 朝刊の下からぬつと箸を出し
 とりあえず雨戸は開けて朝寝する
 頂点の椅子に苦勞の汗がある
 場違いの朝のホームの老いの旅
 汗の味知らない奴が多過ぎる
 汗をした失敗談を怒れない
 旅だより余白へ一句添えて出し
 食べ残す料理に腹の立つ値段
 嫌なことみんな昨日になった朝
 輪の中に笑わせ上手入れて置く
 朝ださて何はともあれ歯を磨く

川柳塔打吹

米田

幸子報

徳三 亜希子 純子 道子 雅子 土風 省子 あかり 広和 あらた 潮華 満秋
 勇喜男 セツ子 龍枝 照彦 宣子 やえ きみ子 楨元 睦子 玲泉 玲坊 よしえ 和枝 玲子

北側に山が有るから堪えられる
 折檻をする方だつて堪えている
 のどぐろの煮付けが好きなの僕
 厳寒に堪えて彼女を待った駅
 年金も堪えた割りには出し渋る
 喉笛を捜して北の風が吹く
 風雪に堪えて刻んだ皺の数
 日本海を呑みこめる川柳人の喉
 すじ張った喉にスカーフ巻きかくす
 包丁のリズムに目覚め母の味
 喉からも手を出したいなこの色気
 姑との芝居を続け耐えてきた
 堪え過ぎて脳梗塞にならぬよう
 パチンコの釘にリズムを狂わされ
 喉元をすぎたら弓をひくだろう
 快調なリズムに乗って子の舟出

岬川柳会

八十田洞庵報

和歌子 一夫 博丈 勝見 秀峰 芳光 たけ代 洋子 逸子 しろう 雄々 完司 かつみ 節子 幸子
 年子 茂平 辰郎 令子 和美 里子 みつ子 幸子 蛙城

琴の音に人間不信少し消え
 縮こまる心を揺する温い風
 何事もトップでないとおさまらず
 気は若い体が年を知らせてる
 母の樹を咲かせずワルになりもせず
 ゆっくりと前行くバトで走れない
 五連休かえってストレス溜まつてる
 正装を脱いで乳房もホツとする

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

よし子 朋子 信博 みやこ 寂子 勝 ユミ子 洞庵 トシエ まさと いづみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 君江 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子

鼻筋が通って人生狂わせる
 今日もまた生きてる証ゴミが出る
 末むすめくほが無いと泣き崩れ
 飽食の社会を叱るゴミの山
 日本の顔になりそうゴミの山
 厨房の勝手おぼえた妻の留守
 粗大ゴミに養われてるのは家族
 買ひすぎて生ゴミ溜める冷蔵庫
 ご出勤おとこに渡すゴミ袋

堺川柳会

河内 月子報

恭一 奈良司 友甫 正純 朝子 一道 賢子 ますみ 鬼遊

泰子 半銭 小雪

手応えを確かめながら釘を打つ
 子育ての手応えすつと後に出る
 手応えは引算だけの世紀末
 閃きもつくに枯れた土踏ます
 近づけば富士もお肌荒れていく
 叱つても手応えのないもどかしさ
 秘密ですとも素敵なつけどどけ
 鶴の一声空しい相談は続く
 手応えをワイロはずんでたしかめる
 まちがった人に相談足の裏
 厚底の靴に相談する未来
 手応えはあった小遣い増えている
 たいくつで手応え欲しいケンカ売る
 後れ毛が近づくバズルまだ解けず
 こここまでと言える相談もやい舟
 久しぶり当選したが捕まった
 おだても手応えのない空返事
 札束の手応え男蹴躓く

りつこ みつこ 梓

冬虹 千代

八千代 東雲

アキ 伽羅

深雪 勇太

文 朋月

かりん 紀美女

恋の相談持ちかけられて羨まし
 近づけば夢の香りのするあな
 ひとり居の冬瓜あてに酌きお酒
 香水がほんのり小さな動きにも
 相談をしたのに逆に利用され
 のし袋やばな相談しています
 昼日中とつと家出妻のスト
 近づいて見ればやっぱりお歳です
 よい知恵はないと承知でやってくる
 手応えを気にするうちはまだ小物
 相談をする前答え出している
 ひっそりと都会の隅につながらる

尼崎いくしま川柳会(前月分) 春城年代報

何となく不安コーヒーがぶのみに
 決断に迷うコーヒー熱くする
 ご苦労さんコーヒー飲んで解散す
 コーヒーをすこし残して朝の新聞
 ブラック飲んで話題迷路へ迷い込み
 菜の花添え母の弁当し窓辺にも
 菜の花活け鉢を鳴らし窓辺にも
 菜の花が野原一パイはしやぐ見ら
 肌寒く菜の花亡母の一周忌
 独り居に菜の花活けて春を呼ぶ
 黄が好き茶の花連翹みんな好き
 菜の花や蝶の口づけ待ってます
 菜畑の蝶が秘密を知っている
 菜の花のまつ只中において夢中
 キヤスティングミス鼻だけが目立ってる

しづ子 和子 夢の助 薫

武庫坊 全彦

ヒサコ 節子

昭三 千恵

渉 愛

昌子 静

歌子

美しい鼻のお方の淋しい背
 リストラで折れた天狗の鼻並ぶ
 むずがゆい鼻ふと思ひ出す竜之介
 花冷えの夜の春雷人恋し
 満開の下でさよなら言ひし
 朝な夕な桜のシャワーを浴びている
 新芽ふくらむバス停の会話
 ひらがなの恋人ができそうくらさく
 水すましゆとりの処世術学ぶ
 駅に並んで欠伸している公衆電話
 続編を書く書こうと夕映える
 蟹させることがらしの闇深くして
 鉛筆をしつかり握り円を描く

ローズ川柳会

山崎 君子報

ウィンドーの吾が影亡母に似ておかし
 忘れたい過去は鏡にふたをする
 あなたの句に胸のいたみを癒される
 春夏秋冬着るに迷うて女なり
 身構えてみたが年には勝てません
 子は鏡狂ってるのは誰なのか
 応召後鏡の裏に住む私
 忘れ上手になつて素直になつた肩
 お茶を飲むただそれだけの緑なり
 夕映えにながれ縁を紡いでいる
 闇の姑わたしの名だけ呼び給う
 前世では姉か妹かバラ集う
 自己弁護かがみに向かいあつかんべえ
 古鏡わが半生に口を出す

ミサヲ キク子 哲子 トミエ

貴代子 まさお

澄子 いわゑ

年代 はつ絵

君子 義子

雅子

弘治 比ろ志 久子 正子 光穂 紀乃 義芳 恵子 半蔵門 キク子 年代 芳子 美子

柳界展覧

愛つむぐ糸太からず細からず
西出楓楽
かぎ括弧あけると思い溢れたです
大石あすなろ
てのひらの中に溢れる物語
大角幸代

1000円 応募締切—7月31日 選者—大木俊秀
応募方法—1組毎にA5判大の用紙に作品・郵便番号住所・氏名・年齢・電話番号を明記して応募料(小為替)を添えて左記へ送付。
天地人賞の作品は石彫板にして歩道に埋設展示する。

吉本川柳

選評

河内 天笑

第11回 「憎い」

投句先 5425 大阪市中央区難波千日前11-6

〒0075 吉本文芸館(06-66643-7799)

投句締切 7月11日(便箋に3句以内・80円切手5枚同封)

没句評句会 7月28日(金)午後6時 吉本文芸館

朝日なわ柳壇 片岡つとむ・橋高薫風選

第八集(平成二年一月—平成四年十二月)

申込先 6632 西宮市甲子園町8-2-202

(七月末まで) 〒81 長谷川淳(天栄一八六六)

頒価 一五〇〇円(送料一〇〇円・二冊三〇〇円)

振込先 大阪市信用金庫西淀川支店229981

郵便小為替でも可

▽人事往來△

人数が参加した。

■5月13日、第11回時の川

柳交歓川柳大会が兵庫県民 開かれた川柳塔まつえ復刊

会館で開かれ、河内天笑理 30周年記念川柳大会に黒川

事長が選者として、ほか同 紫香相談役がお話、西出楓

★川柳塔まつえ復刊30周年記念川柳大会は5月13日、ホテル白鳥で開かれ、本社関係の秀句は次のとおり。

いっばいに過保護が詰まる玩具箱 恒松町紅

子には子の歴史始まる玩具箱 岸 桂子

星を踏まずに爽やかな顔 原 章峰

花道の手前に地蔵さんがある 土橋 螢

子育てが女の花道だと思う 吉岡きみえ

しりとりが続く笑顔が続いている 大角正道

人間を続ける嘘をつきな 城 多喜

白黒の糸で事足る佗び住 杉本孝男

愛つむぐ糸太からず細からず

★第46回今治汐風川柳大会は5月14日、今治市総合福祉センターで開かれ、本社同人の藤解静風氏が今治市観光協会会長賞を受賞した。

★川柳ねやがわ25周年記念川柳大会は5月22日、寝屋川市立総合センターで開かれ、本社同人の秀句は次のとおり。

目標を身近に置いている 余生 河井庸佑

阿鼻叫喚万歳響く古戦場 岡本久峰

★十和田市文化協会主催の第3回「野外文芸館」応募要項「テーマ「風」(詠み込み)2句1組 応募料—

1000円 応募締切—7月31日 選者—大木俊秀

応募方法—1組毎にA5判大の用紙に作品・郵便番号住所・氏名・年齢・電話番号を明記して応募料(小為替)を添えて左記へ送付。

天地人賞の作品は石彫板にして歩道に埋設展示する。

応募先—034-0022 十和田市東二十四番町28-5 十和田文化新聞社内「野外文芸館」事務局

★ツインブリッジ(大山橋)開通記念川柳募集△題と選者「橋」中田たつお・「集つ島翔庵・「飛躍」杉山海苔風「きずな」佐藤一粒・「自然」奈倉楽甫△応募料1000円(定額小為替)△7月3日締切△便せん1枚に各題2句ずつ1枚目の作品右側に住所氏名電話を明記して左記へ〒504-8555各務原市那加桜町1-69各務原市教育委員会川柳係宛

▽人事往來△ 人数が参加した。

■5月13日、第11回時の川

柳交歓川柳大会が兵庫県民 開かれた川柳塔まつえ復刊

会館で開かれ、河内天笑理 30周年記念川柳大会に黒川

事長が選者として、ほか同 紫香相談役がお話、西出楓

楽副理事長が選者で松江へ。

■5月13日、米子市法蔵寺の林荒介氏告別式に板尾岳人副理事長が参列した。

■5月21日、寝屋川市立総合センターで開かれた川柳ねやがわ25周年記念川柳大会に薫風主幹・紫香相談役柳宏子相談役が選者として楓楽副理事長ほか同人多数が出席した。

市 高田博泉理事(寝屋川市) 藤村亜成理事(枚方市) 江口度理事(寝屋川市)。

▽御芳志御礼△

■林瑞枝さん(理事・米子市)から、夫君荒介氏の供養として金一封を拝受。

▽出 版△

■寝屋川市川柳協会は25周年記念合同句集『愛生住』第二集を発刊。序文は橋高薫風主幹と山本三郎寝屋川市川柳協会会長。会員85名の18句ずつを掲載。あとがき高田博泉氏、題字は里小路氏。B6判・186頁。

▽同人消息△

■5月14日、寝屋川市文化連盟発足50周年記念式典に本社同人五氏が寝屋川市文化連盟から表彰された。文化連盟役員として山本三郎理事(寝屋川市)が特別表彰。ねやがわ川柳協会役員として里小路参与(寝屋川市)。

林荒介さんを偲ぶ会

日時 十一月十二日(日) 午後一時から

会場 米子てんまやホール 選者 橋高薫風・小松原爽介・森中恵美子・金築雨学・八木千代

◎詳細は後日発表 ◎恒例の忘年句会は中止します。

川柳塔きやらぼく

▼訂正とお詫び▲

■6月号P101(本社句会) 下段17行目舞↓洋

■P103(本社句会) 中段25行目文・秋・房子

■P110(各地柳壇) 上段16行目ひと美↓さと美

■P113(各地柳壇) 上段23行目千年期↓千年紀

▼計 報▲

■北ミサワさん(同人・北勝美氏夫人・大阪市)は5月13日、病気のため死去。84歳。

■榎本路児氏(同人・大阪市)は6月13日、病気のため死去。81歳。6月15日、北大阪祭典での告別式には薫風主幹・天笑理事長はじめ柳友多数がお見送りした。

第四回川柳展望全国大会

日時 7月30日(日)10時半開場 参加費2000円

場所 「マリエド・クルール空港」[阪急・堂池]徒歩10分

あいさつ 天根夢草 祝辞 高杉鬼遊

お話し 「新人として川柳へ」 永井玲子

題と選者(各題2句・出句締切正午)

「流す」 笹田かなえ 「鏡」 和泉 香

「中」 太田 虚舟 「守る」 谷口 節子

自由吟 鈴木 公弘 「重い」 なかはられいこ

自由吟 新家 完司 自由吟 佐藤 岳俊

自由吟 金築 雨学 自由吟 天根 夢草

(自由吟は各選者に違つ句を出すこと)

講評 森中恵美子 質疑応答 進行・天根夢草

事務局 〒563-0102大阪府豊能郡豊能町

ときわ台3-4-17 天根夢草方

第七回「さんま川柳」全国誌上大会

課題「さんま」はがき一枚に二句(一人二枚まで)

住所・氏名・電話番号を明記のこと

投句先 〒988-8501気仙沼市八日町1-1-1

気仙沼市役所内「さんま川柳大会」係

締切 7月31日(消印有効)

一次選 川柳けせんぬま吟社選考委員会

二次選 ちば東北子氏(発表誌希望者は六百円同封)

賞 入賞80句に生鮮さんま一箱を贈呈(宅送)



林 荒介さんを悼む

小林 由多香

五月十日昼過ぎ、荒介さんの訃報を受けた。少々疲れ気味のようには感じられたが、しっかりとした口調で奥さんの瑞枝さんから電話。「今朝八時二十分、林荒介が亡くなりました。いろいろとありがとうございました。五月十三日午後四時から法蔵寺で葬儀をするになりましたのでお知らせします。一瞬目の前が真っ暗になり涙がこぼれ、お慰める言葉もお悔みも伝えられないまま電話を切った。

やがてこの日の来ることは知らされていたが、あまりにも早すぎる。信じられない。しかし次々と柳友から入ってくる電話に、「やっぱり荒介さんは逝ったんだな」そんな感じにさせられてしまった。

あれだけ几帳面であつた荒介さんが、何を慌てたのか順番を間違えて私より若いくせに先に逝ってしまった。残念で残念でならない。思えば二月二十四日の夜であつた。いつも

の調子で「荒介です。あのね、昨日腹痛で七転八倒しました、胆石らしいので明日検査入院しますのでよろしく」という電話をもらつた。まさかこんな大事にならうとは全く思わず、検査結果の良い知らせを待ち続けた。ところが日を追うごとに良くない知らせばかりの末、二か月半の病魔との闘いに勝てず、ついに帰らぬ人となった。

荒介さんが川柳界にのめり込んできたのは昭和五十八年ごろと記憶している。しかし亡母の林泉甫さんが中心になり石垣花子、八木千代、林瑞枝のみなさんら女性ばかり十人ほどで、昭和三十九年に句会を開いている。以来、林邸などを会場にして現在の川柳塔きやらばくに発展してきた歴史がある。このころから荒介さんも川柳にかかわっていたようであるが、興味を持つ程度で陶芸の方に凝っていたらしい。

ところが川柳界に名を出すようになってか

らは、個性豊かな作品を次々と発表すると共に、よく勉強もして川柳界の動向にも詳しく、川柳をよく知った理論家とも言われるようになった。

平成元年には、ふれあいの祭典ひょうご89川柳大会で

折々の酒にわたしの灯を点す 荒介

が見事文部大臣奨励賞を受賞するなど川柳作家としての活躍ぶりは全国的に知られるようになってきた。

おしどり作家としても知られ、弓削の川柳公園には

約束を果し葉桜彩を増す 荒介

悔いのない汗千金の夢追わず 瑞枝

の句碑が仲好く並んでいる。

平成十四年に鳥取県で開催される国民文化祭には、川柳界を代表して企画委員会委員に、さらに事業別委員会委員も委嘱されて、成功に向けて着々と準備が進められている最中であつた。急逝は彼自身も残念であつただろうと思つが、川柳界にも私にも大きなショックであり、正に痛恨の極みである。

荒介さん、国民文化祭は必ず成功させます。安らかに眠り下さい。さようなら。

全日本川柳二〇〇〇年東京大会開催

第24回全日本川柳二〇〇〇年東京大会は6月11日
東京都新宿区の日本青年館大ホールに760名の参
加を得て開かれた。当日、長寿川柳人の表彰があり
本社相談役黒川紫香・月原宵明、理事二宗吟平、同
人工藤吟笑の4氏を含む17名に表彰状と楯が贈られ
た。当日の受賞句は次のとおり。

文部大臣奨励賞

耐えながら虹を描いてる首都の空
東京 近江あきら

参議員議長賞

ファツションで包む青梅熟れてくる
青森 西山 金悦

川柳大賞

何も無い故郷なのに駅を降り
栃木 福田一二三

大会賞

五体不満足だけど翼が僕にある
東京 阿部 勲
一冊の本から飛んだ少年期
山梨 浅川和多留
鮮烈なファツション壁画から抜ける
埼玉 花道 歌子
疵ついた柱が見てた少年期
埼玉 松岡恵美子
床柱森の素性は喋らない
愛媛 丹下 茂夫
中心がずれた都庁がよくしゃべり
千葉 小林 和子
吹雪く日を起点に父のまるい背な
岩手 熊谷 岳朗
男の胸にいつも起点となる花火
兵庫 梶原サナエ
ピリオドを打とうと決めて足袋洗う
愛媛 井原みつ子
バリアフリーの街のつばくろ低くとぶ
東京 古川ときを
いっばんの薬です泣いてくれたのは
福島 江尻 麦秋

暑中お見舞い申し上げます

夏バテになりませぬように

2000年 盛夏

私たち“川柳塔鹿野みか月”第21回記念大会は
今秋、11月19日（日）に開催をいたしたく、
皆様のご支援を心からお待ちしております。

※ 詳細はあらためて御案内させていただきます。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原 諷人方
〒689-0405 電話（0857）84-2100

暑中お見舞い申し上げます

城北川柳会

会長 吐田 公一

岸	川	川	神	叶	鍛	太	大	大	宇	上	石	池	井	安
野	端	久保	夏磯	岡	原	田	川	内	野	田	塚	田	上	達
あ	一	睦	典	史	千	と	道	朝	義	登	順	寿	白	は
や	歩	子	子	風	里	し	子	子	江	美	三	美	峰	じ
め														め

延	中	都	寺	津	高	高	鈴	鈴	渋	坂	小	小	栗	喜
山	田	倉	井	村	橋	杉	木	木	江	上	糸	泉	山	多
み	あ	求	東	志	一	千	政	ト	博	高	昭	ひ	チ	佐
え	い	芽	雲	華	枝	歩	子	ヨ	遊	栄	子	さ	乃	津
	子			子				子				乃	子	乃

吐	森	三	丸	真	松	松	松	町	本	板	長	橋	野	野
田	杉	浦	岡	鍋	本	岡	岡	田	間	東	谷	村	呂	村
											川			
公	秀	久	静	藤	た	千	久	達	満	倫	春	容	右	美
一	夫	美	枝	子	だ	恵	留	子	津	子	蘭	子	近	代
					し	子	美		子					子

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山 三 古 藤 古 石 岡 森 岩 時 小

ほ
か
会
員
一
同

内 宅 田 解 谷 原 本 井 本 広 島
房 不 太 静 節 淑 清 菁 笑 一 蘭
子 朽 虚 風 夫 子 水 居 子 路 幸

時計台の鐘の音を

心に響くおいしさにして

時計台ビール株式会社

〒060-0051

札幌市中央区南一条東七丁目15番16

暑中お見舞申し上げます

横浜あおば川柳会

川島良子	金森徳三	小野句多留	巖田かず枝	伊藤ふみ	和泉あかり	石原三郎	石川ただお	生坂サト子	荒井広和	芦田鈴美	秋元和可	菱田満秋
福島かづ子	播本充子	長島亜希子	田中笑子	平のぶ子	平達也	鈴江純子	清水潮華	近藤道子	後藤早智	日下部美柳士	北沢街湖	菊地政勝
吉田裕峰	吉田土風	山本為佐子	山廣あらた	山梨雅子	山下省子	八田敏	保田絹子	宮村ちよ路	三村八重子	松土十三子	布山嘉信	福田由美子

暑中お見舞申し上げます

75周年記念川柳大会のご支援ありがとうございました

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉 岡 きみえ方

TEL0853-22-1068

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

事務局 〒680-0033 鳥取市二階町3-102

電話(0857)26-2226 植田一京 方

会 計 倉 益 一 瑤 横 田 春 名
副 会 長 杉 本 孝 男 加 島 修
会 長 両 川 洋 々 夏 目 健 一

加 藤 茶 人 下 田 茂 登 子
萩 原 美 雪 岩 原 喬 水
山 本 益 子 山 中 露 山
尾 崎 泰 山 河 田 の り 代
永 井 三 津 子 米 岡 南 亭
伊 勢 田 毅 安 部 初 江
中 宗 明 両 川 康 博
中 村 金 祥 松 尾 喜 雄
浦 島 一 昌 足 立 天 翔

暑中お伺い申し上げます

正 本 水 客
黒 川 紫 香
西 田 柳 宏 子
阿 萬 萬 的
小 池 し げ お
川 島 諷 云 児
都 倉 求 芽
藤 村 女
竹 内 花 代 子
松 川 芳 子
奥 山 美 智 子
富 山 ル イ 子

暑中お見舞い

申し上げます

川柳藤井寺

高 田 美 代 子
中 島 志 洋
鴨 谷 瑠 美 子
太 田 扶 美 代
坂 本 和 樹
川 端 六 点
楠 昭 子
武 部 敦 子
福 田 悦 子
高 田 治 子
他 一 同

暑中お見舞い

申し上げます

川柳クラブわたの花

高 杉 鬼 遊 中 島 春 江
川 崎 友 甫 山 本 宏 至
服 部 春 子 八 倉 知 佐 子
平 川 幸 枝 乾 美 代 子
松 葉 君 江 篠 原 い つ ふ み
田 中 ト シ エ 井 尻 民 子
二 瓶 道 子 砂 田 八 寿 子
粳 山 隆 盛 与 田 明
生 嶋 ま す み 坂 本 奈 良 司
吉 村 一 風 藤 本 一 道
大 内 朝 子 太 田 恭 一
村 上 剛 治 山 本 美 千 子
村 上 ミ ッ 子 江 波 正 純
神 原 ま さ と 北 村 賢 子

暑中お見舞い申し上げます

西宮ローズ川柳会

吉田笑女	山本義子	山崎君子	林はつ絵	春城年代	春城武庫坊	西口いわゑ	長浜澄子	那賀島雅子	久保まさお	木村貴代子	菊池トミエ	亀岡哲子	小倉藍	奥田みつ子	岩倉キク子	飯西ミサヲ	秋元てる	橘高薫風
------	------	------	------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-----	-------	-------	-------	------	------

暑中お見舞い

申し上げます

NHK川柳教室

志田千代	田中節子	前たもつ	鴨谷瑠美子	三品征子	古川喜美子	海老池洋	指宿千枝子	黒田能子	藤井正雄	北畑金治	橘高薫風
江見見清	矢倉五月	古今堂蕉子	谷鈴子	三木愛子	北野哲男	井上信子	緒方美津子	井上松煙	野下之男	小林周信	

産経新聞社
後援

大阪川柳の会

句会—毎月偶数月上旬・サンケイビル本館3階 322号室
事務局 〒583-0026 藤井寺市春日丘2-11-12 後藤正一 方
TEL 0729 (53) 5552

大阪川柳人クラブ

竹森雀舎	西田柳宏子	米澤俊夫	吉村雅文	安井英華	本田智彦	濱田良知	内藤光枝	津田一江	砂本啓三	坂本和樹	後藤正一	河合時弘	岡良三	足立淑子	磯野いさむ	代表
------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-------	----

暑中お見舞申し上げます

東大阪市川柳同好会

会 長 片岡湖風 副会長 吉川晋吾

句会部 澤村猪太郎 会 計 森下愛論

暑中お見舞い

申し上げます

京都塔の会

都	松	山	山	高	山	本	榊	三	山	西
倉	川	海	口	沢	田	莊	本	宅	本	村
求	芳	友	美	葉	榮	福	宏	満	輝	益
芽	子	熙	穂	子	子	子	子	子	美	子

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

岩	島	田	井	井	長	堂	原	古	柿	高
佐	崎	中	伊	伊	谷	免	苑	妻	花	須
ダ	富	文	東	齋	川	路	子	敏	昭	賀
ン	志	時	吉	一	呂	子	子	光	二	金
吉	子	齋	齋	齋	万	子	子	光	太	太
原	不	寺	村	内	善	加	宮	藪	徳	芳
さ	破	田	垣	田	野	藤	野	野	庄	地
よ	仁	甚	鹿	一	盛	基	美	ケ	美	狸
子	緑	一	太	弥	之		津	イ	智	村
			郎				江	子	子	

暑中お見舞い申し上げます

高槻川柳サークル卯の花

一同

川柳若葉の会

暑中お見舞
申し上げます

吉	山	宮	宮	宮	古	辻	椎	黒	橘
田	内	崎	崎	本	川	川	江	田	高
あ	香	シ	弘	欣	喜	慶	清	能	薫
ず	住	マ	直	史	美	子	芳	子	風
き		子		子	子				

もくせい川柳会

宮	満	松	藤	西	辻	玉	玉	田	滝	住	小	小	岸	木	岡	江	安	黒	橘
田	仲	本	村	田	川	置	置	中	北	谷	林	池	田	村	本	口	藤	川	高
緑	き	た	メ	柳	慶	英	重	正	博	石	周	し	知	一	吉	明	寿	紫	薫
骨	く	だ	女	宏	子	子	人	坊	史	舟	信	げ	香	子	郎	光	美	香	風
	子	し		子								お					子		

例会は毎月第3月曜日に開いています。お気軽にどうぞ。

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

川 柳 塔 な ら

	清	宮	吉	大	坊	米	中	宮
会	水	西	川	内	農	田	原	口
員	絹	弥	寿	朝	柳	恭	比	笛
一	子	生	美	子	弘	昌	呂	生
同							志	

暑中お見舞

申し上げます

熊本川柳会

高野 宵草

永田 俊子

岩切 康子

暑中御見舞

社吟えまつ塔柳川

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

暑中お見舞

申し上げます

尼崎川柳協会加盟

尼崎

いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎

尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後1時半

尾浜市尾浜二丁目五十八
尾浜公民館
(阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④、尾浜二丁目下車)

両句会共各地句会案内に

掲載しています

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔 おおとり

会長 小林 由多香
会 員 一 同

〒680-0805 島取市相生町1-110
TEL 0857-23-1170

暑中お見舞い申し上げます

川柳ささやま社一同

代 表 遠 山 可 住

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔唐津支部 一同

山	山	山	樋	浜	仁	田	宗	久	市	岩	井	相
門	門	口	口	本	部	口		保	丸	崎	上	葉
タ	幸	高	輝	久	四	虹	水	正	晴		勝	あ
ミ	夫	明	夫	仁	郎	汀	笑	剣	翠	實	視	き

暑中お見舞い申し上げます

うみなり川柳会

会 員 一 同

鳥取市相生町 3 丁目 204
電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑 中 お 見 舞

鳥取県川柳作家連盟

事務局 春 木 圭一郎

歌謡教室シヤンテ ヨーガ教室

阿倍野、東住吉、平野、住吉に
複数教室あり

〒545-0012

大阪市阿倍野区桃ヶ池町 1 - 4 - 12

櫛 田 浩 之

06-6628-1451

暑中お見舞申し上げます

長 柳 会

樋口冬虹	濱野三和子	山原輝治	木虎良男	梶武男	綱木けい子	佐中もこ	松谷マサ	沢田和子	柏本靖子	水谷正子	大西文次	木太久正一	妹背尽呂久
板尾岳人	石堂潤子	針生和代	山岡富美子	大垣輝子	網俊郎	西浦一慧	西浦あつし	岸本たけし	前原正美	加島由一	中谷ひろし	西山幸雄	

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

川見絹子	亀岡哲子	門谷たず子	小倉藍	小熊江美	奥山美智子	奥田みつ子	石原靖巳	井上信子	井上松煙	浅野房子	秋元てる	阿萬萬的	正本水客	黒川紫香
------	------	-------	-----	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------

富山ルイ子	都倉求芽	田辺鹿太	田中正坊	住谷石舟	坂上高栄	小林周信	小池しげお	黒田能子	久保田千代	久保まさお	木村貴代子	菊池トミエ	神原文	川島諷云児
-------	------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-----	-------

吉田笑女	山本義子	山崎君子	松下比ろ志	牧渕富喜子	藤村メ女	春城武庫坊	春城年代	林はっ絵	長谷川春蘭	野瀬昌子	西田柳宏子	西口いわゑ	長浜澄子
------	------	------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------	-------	-------	------

暑中お見舞い申し上げます 川柳塔わかやま吟社

おかげさまで9月に30周年を迎えます

同人										顧問	主幹		
澤田和重	坂部紀久子	坂口公子	小山太一	桑原道夫	川上大輪	柿花紀美女	小倉アサ		野村太茂津		牛尾緑良		
中島正博	中後清史	中井榮美子	堂上泰子	富上光代	天満三千代	寺田裕美	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	芝あつむ	
ほか会員一同										細川稚代	福田英子	中村君枝	塩谷佐代子
											福田和子	中田誠子	

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方

TEL 0734-46-2855

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

主 幹		理 事 長		副 主 幹		副 理 事 長		常 任 理 事	
橘	高	河	内	宮	口	板	尾	大	内
薫	風	天	笑	笛	生	岳	人	朝	子
典	子	比	呂	志	西	口	い	わ	ゑ
山	本	希	久	子	宮	崎	シ	マ	子
米	田	恭	昌	西	出	楓	楽	前	た
宮	西	弥	生	宮	崎	シ	マ	子	も
河	内	月	子	神	夏	磯	典	子	奥
中	原	比	呂	志	西	口	い	わ	ゑ
西	口	い	わ	ゑ	西	口	い	わ	ゑ

川柳塔社常任理事会

第二回 時計台ビール川柳八選句発表

「ゼロ」

川柳塔社
理事長

河内天笑選

ゼロからの出発だから夢がある
ゼロからの出発愛に支えられ
視界ゼロ杭は大きく打っておく
旅帰ゼロの財布が心地よい
好投のエースに点のない味方
たんまりと貯め天国へゼロで立ち
無医村に天使のような医者がある
無限にもゼロにもなれる葦の自負
背負うものゼロにしてから跳んでみる
赤字から見れば立派なゼロの位置
零点という反抗の意思表示
ゼロになり本当の愛が見えてくる
貧しいが借金ゼロに胸を張る
修飾語削れば主張ゼロだった
ゼロ歳の眼を見て描いた青写真
評価ゼロ影もお前も口惜しいか
乾杯の一気に泡もないコップ
振り出しに戻り喜劇の幕が開く
定年をゼロと数える人生譜
事故ゼロを勲章にして職を退く

準特選

特選

仙人はおそろく収支ゼロだろう
底力ゼロの下から湧いてくる
すぐゼロになる忙しい通帳だ

京都	奈良	春日井	新井	川島	広島	和歌山	富士宮	日野	熊本	富山	竹原	鳥取	茨城	仙台	東京	京都	東大和	福島	札幌	高知
中奥	西村	伊藤	増田	三木	山岡	辻内	岩淵	松原	藤森	八木	沖浜	平尾	野口	今野	石田	戸井	長岩	浦田	桑名	孝雄
道子	晴子	弘子	幸一	亜人	涼山	次根	不弁	実	恵	孝子	正宏	正人	明子	宗吾	きみ	慶太	佳夫	隆	かな	

第三回「海峡」七月末メ切
第四回「憧れ」九月末メ切

クール便運賃表

1ケース6本入 (1~3ケース)

北海道	600円
東北	1,100円
関東・信越	1,200円
北陸・中部	1,300円
関西	1,400円
中国	1,500円
四国	1,600円
九州・沖縄	1,700円

◎川柳応募者に限り2割引!!

1ケース¥3,000を2,400円

応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051

札幌市中央区南一条東7丁目15-16



時計台ビール株式会社

だ
通帳
道子
ゼロになる



句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 会 梨 花	15日(土)午後1時から 断る・カード・てんぷら・雑詠	鳥取県民文化会館 第2会議室 (鳥取駅から徒歩10分・バス5分) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から くすり・化粧・口実・支える	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	16日(日)正午から パワー・予想・地図・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 気軽・待つ・はやはや	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から スーツ・鏡・縮む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(金)正午から 声・悩む・白足袋・でたらめ 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
東大阪市 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から ピンチ・掘る・外人・海	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日)午後1時から 情けない・ダイエット・そっと	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市 民 川 柳 会	23日(日)午後1時から 発表・レギュラー・やれやれ 「子供」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	24日(月)午後1時から 瓜・リゾート・問題	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	24日(月)午後8時から 中元・夕立・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	26日(水)午後6時から 慣れる・荷物・縫う・ねた	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から 背く・顔・花束	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

川柳塔東大阪カルチャー教室 7月27日(木)2時から 布施駅前市民プラザ
「祭」3句—5句・〒593-8305 堺市堀上緑町2・16・3 河内天笑宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
富 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 内気・直前・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	1 日(土)午後 4 時から 叩く・大物・ちくちく	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	2 日(日)午後 1 時半から 台風・化粧・読む	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	6 日(木)午後 1 時から 体裁・肘・つくる	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	7 日(金)午後 1 時から ひまわり・肩・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 打 吹	8 日(土)午後 1 時から めらめら・鉛筆・伝	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土)午後 1 時半から 汗・音楽・座る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	9 日(日)午後 1 時から 拒む・ごみ・ウイंक (熱いもの「熱い」は読み込み不可)	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10 日(月)午後 1 時から 柱・遊ぶ・あっさり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火)午後 1 時から 留守・休む・暑い	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150 米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11 日(火)午後 1 時半から 泳ぐ・優れる・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口からバス⑨番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5 - 2 - 47 田辺鹿太
八尾市民 川 柳 会	11 日(火)午後 6 時から はやばや・叩く・喉・得意	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
堺川柳会	13 日(木)午後 1 時から 支度・忘れる・(折り句)つきよ	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2 - 16 - 3 河内天笑
城 北 川 柳 会	15 日(土)午後 1 時から うっかり・拾う・チャンス・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅 2 号出口徒歩 8 分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子

編集後記

★前月号の当欄に、酷似した句の話を書いたが、今回も同じような話になる。

★5月20日のNHKBSテレビ「俳句王国」に、ゲスト出演したK女優が出句した4句の中に、人恋し人煩わし波の音^{なみ}があった。本社西尾葉前主幹の句である。

★放映直後から、NHKに

ファックスやハガキで、この句は某作品である旨の指摘が寄せられた。その指摘した人のところには、同番組プロデューサーから謝罪のファックスが届き、次の同番組で「西尾葉氏の作品であること、ゲストが亡母の句帳から引用したこと

を明らかにしてお詫びのコメントを入れるから了承して欲しい」と記されていた。

★西尾葉夫人・美與子さん

にも、K女優からお詫びの電話続いて手紙が届いた。亡母の句帳にあった句を書いたことと「どんなことがあってもしてはならないことを、自分がしてしまっ

と、ほんとに悔んでいます」など心からの反省とお詫びの言葉が綴られていた。★誰でも過ちはあるが、その対処に誠意があるか、ないかに人間性が問われるのではないだろうか。

★最近、中高年の登山が盛んになっているのは結構だが「この年代には自分のペースではなく、タイムや数

の記録にこだわる人が多い、その競争意識が遭難につながるのではないか」と山の専門家が嘆いていた。

★川柳でも何句抜けたかではなく、自分で納得できる句であれば、入選の有無は問題ではないと自分に言い聞かせるのだが。(み)

ひとこと

「孫弟子」

今年また路郎忌の七月が巡ってきたが、残念ながら私自身は路郎師と直接面識がない。しかしNHK文化センターカルチャー教室で、十数年来続けて薫風先生のご指導を受けており、先生は路郎師の句をよくレジュメに利用され、詳しい解説も加えられているので、いも路郎師を身近に感じ、師(薫風師)が師(路郎師)を想う師弟の情れがむずかしい (藤井 正雄)

○郵便番号が七ケタになって二年五ヵ月になる。

始めるに当っては、労働力節減で約二千億円のコストダウンになり、二千五年まで(あとたった四年半)値上げをせずにすむ、というのが謳いであつた。

○実際に郵政省のもくろみ通りコトが運んでいるか否かは、発表がないのでさっぱりわからない。

○あれ以後いたかく書簡は

に常々感服している。甚だ厚かましい言葉で、且つ失礼だが私は路郎師の出来の悪い孫弟子だと自負している。路郎師の言われる「いのちある句」とは脈々と流れている「人間陶冶の詩」であり、本格川柳と一言では済まされないもの

だと思ふ。その心をどのように受け継ぎ、句に表わしてゆくのか、それがむずかしい (藤井 正雄)

全部と言つていいほど、七ケタがきっちり書かれていて、切れない。また、由緒ある地名、馴染みある地名、夢一杯の新興住宅地とおぼしき地名などを、封筒にしたためる楽しさまで捨て難い。

○市から書いている。○そんなこんなで、少々割切れないまま、両だてに慣

地と名前さえあれば届くわけだから、親しい人にテス

トして見るとちゃんと届く。(当り前です)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（9月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

第六回 川柳塔まつり

きりとらせん

〔平成12年9月24日(日) ホテル・アウリーナ大阪〕

事前投句「むらさき」

黒川 紫香選

(8月20日締切 出席者に限る)

懇親宴 7,000円 会席料理 不参加 参加	NO.	
	〒	
	姓・雅号 ふりがな	
宿 泊 ホテル アウリーナ大阪 シングル 朝食付 8,000円 24日泊 23日泊	住所	
	性 別	
	男・女	
◎ 懇親宴・宿泊の代金のみ同封の 払込用紙で御送金ください。 ◎ 句会費は当日いただきます。	TEL	

卷之十

詩經

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

卷之十

作品募集

9月号発表 (7月15日締切)

初歩教室「弾む」(3句)	課題吟 (3句)	吟詠台風	川柳塔 (8句)	水煙抄 (8句)	愛染帖 (3句)	茴香の花 (3句)
吐田公一担当	「読む」	「化粧」	橋高薫風選	河内天笑選	波多野五楽庵選	西出楓楽選
	石原淑子選	志田千代選				

10月号
課題吟「正」「強」「慌てる」
初歩教室「石」

路郎忌 本社7月句会

とき 7月6日(木) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
兼題 「夕日」
「黙る」
「スピーチ」
「糸」
「末練」
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

池森子選
前たもつ選
阿萬萬的選
森中恵美子選
橋高薫風選

本社8月句会 7日(月) 予定

兼題 「新聞」「チャンス」「地獄」
「書く」「迎える」

夜市川柳募集

第2回「マグマ」 高瀬霜石選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

第19年度 夜市川柳

題 選 者 締切

③「浮気」 山本希久子 8月末
④「息子」 板尾 岳人 9月末
⑤「震える」 舟渡 杏花 10月末
⑥「リズム」 中田たつお 11月末
⑦「脱ぐ」 津田 暹 12月末
⑧「吐く」 大西 泰世 1月末
⑨「錯覚」 加茂 如水 2月末
⑩「掃除」 天根 夢草 3月末
⑪「おおきに」 森中恵美子 4月末
⑫「旗」 橋高 薫風 5月末

第18回夜市川柳大会は7月29日(土)に堺総合福祉会館で開催します。皆様の御参加をお待ちいたします。

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)

二〇〇〇年(平成十二年)七月一日発行

編集兼 発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 アー ト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

振替 〇〇九八〇一五 電話(〇六)六九一四番
電話(〇六)六九一四番

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL・FAX (06)6372-1178



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳 士 服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631